第9回 全国同人雑誌最優秀賞 まほろば賞 発表

全国同人雑誌振興会・文芸思潮による第九回全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」選考会は、二〇一五年十月二十五日火曜日に東京都大田区民プラザ会議室において、三田誠広氏、中上紀氏、小浜清志氏、五十嵐勉「文芸思潮」編集長の四名の選考委員によって厳正に行なわれました。多彩な領域にわたる充実した作品で、一作品ごとに選考委員それぞれから熱い感想・批評が発せられ、濃密な議論が交わされました。選考の結果、以下のように決定いたしましたので、ここに選評とともに発表させていただきます。

また一昨年より、読者賞を設け、全国からの読者の投票と寄付により、別な形での表彰と賞揚も行なうことにしております。その投票および内容の結果も併せてここに発表させていただきます。

「まほろば賞」受賞作品には、賞状と賞金十万円（賞金は寄付によるものです）および記念トロフィー、また今回は特に木内是壽氏の特別寄贈により、エミール・ガレの藤文ランプを贈らせていただきます。また特別賞には賞状と賞金五万円・記念トロフィーを、河林満賞には賞状・賞金五万円と記念品を、五十嵐勉賞には賞状と賞金五万円・記念トロフィーおよび五十嵐勉自筆の書道作品（条幅掛軸）を、また優秀賞には賞状と賞金二万円・記念メダルを贈らせていただきます。

情熱のこもった優秀作品に、それぞれの地域、それぞれのグループでの同人雑誌の豊かな創作力を見ることができました。

今後も全国の同人雑誌の中から優れた作品が生まれることを祈念し、たくさんの同人雑誌の作品が全国同人雑誌振興会・文芸思潮に寄せられてくることを期待しております。

次回第十回の全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」対象の同人雑誌は二〇一五年十二月三十一日までの発行の同人雑誌とさせていただきます。奮って御応募ください。

また、どうぞ作品の推薦にも多数の方が御参加くださり、また積極的に読者賞への投票に加わっていただき、ぜひ皆様自らの熱い手で同人雑誌の優秀作品を選び、この賞を育てていっていただきたいと存じます。全国の同人雑誌諸氏の熱い支持を切にお願いする次第です。

選考会の模様の一部は、ユーチューブにも載っておりますので、どうぞ御覧いただけましたら幸いです。

なお、まほろば賞の表彰は、明年二〇一六年一月十五日（金）東京都大田区民プラザで開かれます文芸思潮授賞式で他の賞と併せて行なわれる予定です。

●今年度よりこれまで銀華文学賞のなかに置かれていた河林満賞はまほろば賞のなかに組入れられることになりました。

第9回全国同人雑誌最優秀賞 まほろば賞

「トッカータとフーガ」（「季刊午前」51号）
井本元義

第９回まほろば賞特別記念品
没後100年記念復刻作品
エミール・ガレ　藤文ランプ
木内是壽氏寄贈

特別賞
「インナーマザー」（「弦」96号）
木戸順子

河林満賞
「地の来歴」（「全作家」97号）
嶋津治夫

五十嵐勉賞
「二の糸」（「弦」96号）
市川しのぶ

優秀賞
読者賞
「家族の樹」（「狐火」19号）
澤つむり

「アンデスの祈り」（「空とぶ鯨」15号）
辻村仁志

まほろば賞賞金は、来の宮あんず氏、原石寛氏、夏目火美子氏、木内是壽氏、蘭藍子氏、今田真理子氏の御寄付によるものです。ここに厚く御礼申し上げます。また「群系」「安芸文学」など文芸思潮同人誌団体会員の御協力にも厚く御礼申し上げます。

それぞれが充実

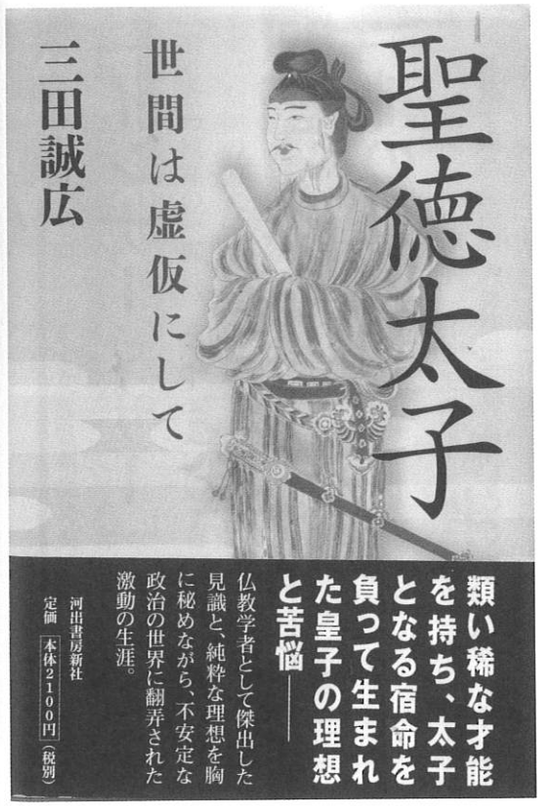
三田誠広

みた　まさひろ
1948　大阪生まれ
早稲田大学文学部卒
77「僕って何」で芥川賞受賞
作品はほかに「いちご同盟」「空海」など
日本文藝家協会副理事長
日本ペンクラブ理事
著作権情報センター理事
日本点字図書館理事
武蔵野大学文学部教授

候補作はそれぞれが充実していて書き手の熟達が見てとれた。それだけにどれか一つを選ぶのは難しかったが、わたしは『トッカータとフーガ』を推した。漱石の『それから』のような三角関係の話なのだが、夫は複雑な状況下に失踪しており、妻には無残な老いの陰が忍び寄っている。この冒頭の状況設定は残酷であり息の詰まるような閉塞感があるのだが、夫の友人で結婚前の妻に思慕の念を抱いていた主人公が、遠い過去の追想を始めると、にわかにロマンチックな芳香が発散する。その落差が鮮やかで、おそらくは書き手によって充分に計算されたものだろう。これは輝かしい青春を描きながら、時の推移の苛酷さに焦点を当てた作品で、その年月の幅が作品に深みをもたらしている。

次に心に響いたのは『アンデスの祈り』だ。これは同人誌に掲載された時には『三頭の悲しい虎が、小麦畑で小麦を食べる』というタイトルだったようで、試みに夏休みに遊びに来ていた中学生のスペイン人（わたしの孫）に訊いてみたら、スペイン語圏の人なら誰でも知っている早口言葉のようだ。語呂合わせで小麦を食べさせられる虎には不条理な悲しみがある。それと同じように、苛酷な運命に弄ばれるボリビアの少年のはかない人生が読み手の胸を打つ。もっとプロットを書き込んで大きな作品にすれば、その不条理な悲しみがさらに活きたのではないかと思われる。

他の作品にも短く触れる。『二の糸』の完成度の高さにも驚かされた。中間小説的なまとまりのよさがあり、インパクトは弱くなっているが、これはこれで充分に成熟した作品だと思われる。『地の来歴』はルポルタージュのような作品で、よく考え抜かれた構成が成功している。小説的な展開は乏しいのだが、小説というものの多様さの一面を見せてくれた。『家族の樹』は失われた過去を探索するミステリーふうの作品で、導入部の展開にリアリティーがある。後半、ヒロインの妄想とともに過去が解き明かされるくだりは少し筆が急ぎ過ぎている。『インナーマザー』はありきたりな老人介護の話かと思っていると、母親の個性が輝きだして、印象に残る作品になっている。残念なのはタイトルについての説明の部分がとってつけたようで、そこのところが惜しまれるのだが、受賞作と甲乙つけがたい力作であることは間違いない。



翻弄させる言葉

中上紀

なかがみ　のり
1971　東京生まれ
ハワイ大学美術学部卒業
99『イラワジの赤い花 ミャンマーの旅』（集英社）を上梓
同年『彼女のプレンカ』（集英社）ですばる文学賞受賞
『悪霊』（毎日新聞社）『いつか物語になるまで』（晶文社）『夢の船旅—父中上健次と熊野—』（河出書房新社）『アジア熱』（大田出版）『シャーマンが歌う夜』『水の宴』（集英社）『海の宮』（新潮社）『熊野物語』（平凡社）など著作多数

記憶にすっとしみ込む小説は、呼吸をしている。普段は忘れていても、ふとした瞬間、心の中でコトリと音を立てる。やがてそこから、新しい喜びが芽生えてくる。読者自身の人生に混ざり、影響を与え、また、変化する。さながら読者という大地に根を伸ばす、しなやかな樹木の種のような、そんな小説を書けたなら本望だし、読み手として出会うことが出来るのなら、これほどに幸せなことはない。

今年の同人誌に掲載された作品の中でも特に輝いている六作品が収録された『文芸思潮』を、そんなことを思いながら読み始めたのは、夏の終わりだった。圧倒的にして細密な筆の力と、物語が放つ重力に、否が応でも引きずり込まれた。

井本元義氏の「トッカータとフーガ」に散りばめられた独自の世界は、停滞する日常から読者を連れ出し、おおいに翻弄させる。失踪した友人で医者の吉野の妻との再会、そして彼が残した小説を軸に、話は進んでいく。その物語は、ところどころ挟まれるバッハの「トッカータとフーガ」の音に、フランスに暮らした若き日の孤独感とを絡み合わせながら、冷たく寒々しい風を、主人公沢木のみならず読者にさえも吹き付ける。落雷のごとく悲劇的にして残酷に響く曲は、吉野と自死した古い共通の友人との関係、吉野の妻への湿り気を帯びた感情をも思い出させる。男や女の営み、患者たちとの関わりの上に繰り広げられる人間模様が、幾重にも絡み合い、後をひく余韻を残す。それはまさに、書き手が小説に与えた命の呼吸音に他ならず、異国の荘厳な寺院のパイプオルガンが醸し出すニ短調の絶望の上に、否が応でも立たされた読み手は、身を投げ出して救いを乞うだろう。しかし、作者は最後に老いた吉野の妻由紀子の醜悪なエロスを全面的に押し出すことによって、手を差し伸べている。そこが一番良かった。

特別なことでなくても、小さな出来事でいい。素材が自身の経験でなくても、聞いた話でも、あるいは、まったくの想像でも、そこに書き手が通過してきた人生があるなら、フィクションに鮮やかな色を与え、熱く波打つ血脈をもたらす。そう言った意味で、小説とは、多分にノンフィクションでもあるのかもしれない。

厳選された素材と緻密な描写で組み立てられた澤つむり氏による「家族の樹」は、関東大震災の記憶をたどる。死んだはずの肉親が、もしどこかで生きていたらという幻想が主軸となっているが、それは3・11を経た今、多くの人の願いでもあるはずだ。主人公は、スケッチのために訪れた祖母との思い出の場所でもある横浜の古い洋館で、ふと震災で亡くなり顔も知らない祖父の影を見る。そこに根を下ろす大木が過去と現在を結び、ともすれば個人のルーツを妄想するだけの話になりそうな作品に重層感を与えている。

木戸順子氏の「インナーマザー」は、介護という閉ざされた空間で母と娘が奏でる伴奏のようなものが空虚で痛々しい。ドラマチックな展開はないが、認知症の影響で亡父のパンツに執着する母のどろっとした女の部分が衝撃的であるし、母の前で完璧な娘を演じることに疲れ、わざと地元の大学に落ちて家を出た主人公の過去の悲しさも、同じ母であり娘であり女である自分と共鳴するのか、ぐいっと引き込まれた。母が切り抜いて壁に貼っている色とりどりの蝶と、自転車を漕ぐ若き主人公がそれを目印に母を振り返るという燃えるようなグラジオラスの花が対になり血の流れのようなものを感じさせた。

嶋津治夫氏の「地の来歴」は、作者の百科事典的知識を巧みに投入しているためか、短いながらも重量感を感じる作品となっている。農業、害虫、土壌と言ったものに、満州開拓団のことや、成田空港反対運動が挟み込まれたり、風土記や、神話の話が、「侵略」という視点で挟まれる。一見それらは互いに無関係であるように思えるが、土壌や地球の歴史という大きなスパンで見ると、縦と横、縦横無尽に繋がっているという、強いメッセージを小説は放つ。主人公が調査する害虫「アカビロードコガネ」は、子供の頃捕まえて遊んだ。六月ごろ、夕方になると大量に発生したその虫にとって私は「侵略者」だった。

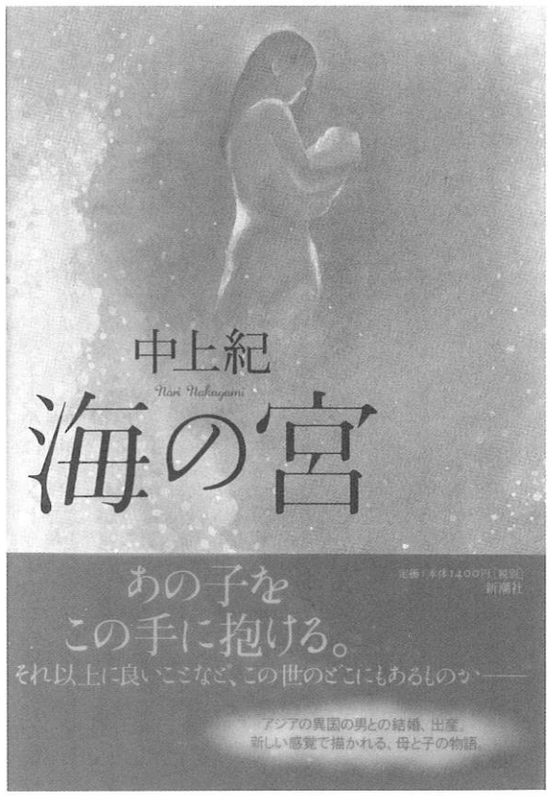
辻村仁志氏の「アンデスの祈り」はインディオの少年チコと主人公のかけあいが新鮮である。ボリビアという国の文化、社会状況、宗教や民族の複雑さを踏まえながら、リアルな汗の匂いと共に一日本人である主人公がどうすることも出来ない理不尽さを綿密に描いた作品で、とても興味深い題材だ。願わくば、チコの母親の背景と日蝕との絡みをもっと読みたい。

市川しのぶ氏の「二の糸」は、美しい小説であった。不本意に生きざるを得ない女性の悲しみが、雪の向こうにほのかな色気を匂い立たせている。しかし、密室での男女のあわいは、もっと肉感的でも良かった気がする。振り続ける雪が、嫉妬も叫び声も人間の汚さも、すべてを包んでくれるのだから。

私にとって今年で三回目となるまほろば賞の選評であるが、六作品すべてに、作者の強い信念を感じた。一つ一つの言葉に、生きた思いが乗っている。読む者の中に新しい何かを芽生えさせる「言葉」を、書き続けていただきたい。

※授賞式について　今年は大田区民プラザ改修工事のため、一月十五日金曜日ウィークデーしか会場が空いておらず、ご不便をおかけしますことを深くお詫び申し上げます。

文芸思潮



作品の長さのちがい

小浜清志

こはま　きよし
1950沖縄県生まれ
劇団四季など様々な職を遍歴
87作家中上健次に師事、マネージャーを務めるかたわら文学修行
88「風の河」で文学界新人賞を受賞
他の作品に「消える島」「後生橋」「光の群れ」「火の闇」などがある

全体的にレベルが高かったといえば当然の話で全国にあまたある同人誌の中から選り抜かれた作品六編であるから選考会当日まで私はどの作品を推すか決めかねていた。

かつて所属していた同人誌時代を思い浮かべながら電車の中で候補作を見比べていた。枚数がまちまちで一番長い「トッカータとフーガ」と最も少ない「地の来歴」では約三倍以上の差がある。作品と枚数は大きな関係があるもので、ある程度の紙面がなければ書ききれない内容もあるが「トッカータとフーガ」を三分の一に縮小するなら多分作品にはならないだろう。逆に「地の来歴」を三倍以上に膨らませれば今よりはるかにいい作品になるだろう。私の記憶によれば高井有一の「北の河」は原稿用紙六十数枚であるが、読後感は長編を読み終えたようにずっしりと胸にしみたのを覚えている。それは高井有一の作家としての力量だが一般的に枚数は重要である。三十枚と六十枚そして百枚くらいが各文学賞の規定であろうが、百枚の内容を三十枚にすることは無理であろう。従ってある程度のハンデは必要であろうと考えた結論として私は木戸順子の「インナーマザー」を推そうとひそかに決めていた。

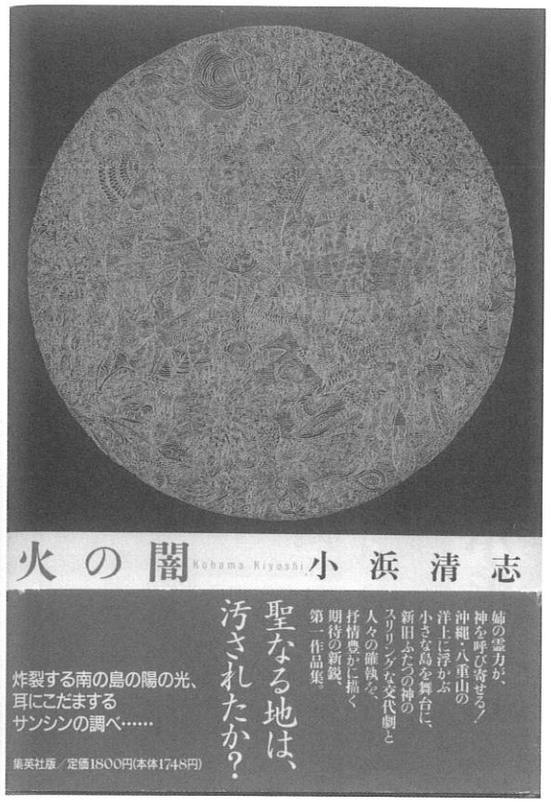
嶋津治夫の「地の来歴」はあまりにも他と比べて枚数が少なく見劣りしてしまう。六、七十枚に仕上げれば当選もあり得ただろうし残念でならない。次回はたっぷりと枚数をかけた作品を書きあげていただきたい。

井本元義の「トッカータとフーガ」は力作であり筆力も素晴らしいが、とび抜けて枚数が多くこれではあまりにも有利であると考えた結果、私なりのハンデを与えて順を下げたが、当選作とすることに意義はなかった。

澤つむりの「家族の樹」は重大な失敗をしてしまったことが悔まれる。小説とはそもそも仮説であり空想である。なぜそれを書いてしまったのか今でも理解ができない。あえて「私の仮説をまず明らかにしたい」「わずかな資料とあの日、末男さんに会ったとき閃いた独りよがりな空想である」という文章を書いてしまったのであろうか。独りよがりな空想をもっと膨らますべきであって、安易な空想など読者は期待していない。安倍公房の「砂の女」など凡人には空想すらできない作品であるが、あり得ない空想であっても文章の力で独特の作品世界を作っている。それが小説の魅力であり作者の腕の見せ所ではありませんか。独りよがりの空想から過去を推理していく過程で出て来る資料や写真などから、その空想は空想でなくなるという展開にすればまったく違った良質な作品になっていたでしょう。禁じ手をあえて使うという進め方もあるでしょうが、それには熟慮が必要です。

辻村仁志「アンデスの祈り」はボリヴィアに赴任した香川と現地の少年との交流を描いた作品であるが原題の「三頭の悲しい虎が、小麦畑で小麦を食べる」の方が私はよかったと思った。ただ結末がすごく気になったので中上健次のエピソードを紹介したい。私の友人であった故河林満が「渇水」という作品で文学界新人賞をとりそのまま芥川賞の候補になった。落選してしばらく経って私と河林と中上健次で呑む機会があった。「今回は残念だったが三回目が大事だからしっかり書け」と中上健次が激励していたが、酒が回り始めると、なぜか「渇水」の作品合評になっていった。この先品は簡単に説明すると水道局員が未払い家庭の水道を止めたことにより貧しい少女が死んでしまったという小説であるが、中上健次がかみついたのはなぜ少女を殺したかということであった。

「お前なぜ少女を殺した」
「いえ、あれは小説ですから……」
河林は苦笑して弁明した。しかし、中上健次は激怒したのである。小説だから許されるのか。作家は平気で少女を殺していいのか。傍にいた私も最初は単なる合評だと思っていたが、中上健次の怒りを見るにつれただ事ではないことに気づいたときはすでに時おそく、お前はどう思うとホコ先が変った。私とて河林と同じような説明しかできなかった。結局、一時間以上も延々と怒られただけで話の結論はなかった。後日、素面のときに聞いたが何も答えてくれなかった。しかし、明確にわかったことは小説だからといって少女を簡単に殺してはいけないという事だった。勿論、人は死ぬし殺されもするが、「渇水」の場合少女の死がテーマともかかわっていただけに河林の死に対する姿勢を問うていたのだと理解できたのは何日もあとだった。
「アンデスの祈り」を中上健次が読んだらやはり激怒する少年の死であっただろう。



力作揃い

五十嵐勉

いがらし　つとむ

1949　山梨県生まれ
早大文芸科卒
79「流謫の島」で群像新人長編小説賞受賞
84-90カンボジア問題を取材「東南アジア通信」編集長
主著『緑の手紙』(読売新聞・NTTプリンテック「インターネット文芸」最優秀賞)・『鉄の光』他の作品に「ノンチャン、NONGCHAN」「聖丘寺院へ」「破壊者たち」「文芸思潮」編集長

第九回まほろば賞の候補作六篇はどれも力作・秀作で、趣もテーマも舞台もそれぞれに異なった世界を表出しており、堪能させられた。現在の同人雑誌のレベルの高さをよく示している。
選考の流れを伝えると、掲載順を追って一作ずつ各選考委員が感想・批評を述べ合い、良い点、着想のよさや文章の緊密度や構成のおもしろさ、逆に悪い点、問題点、不足点などを挙げながら議論を深めていく。見方が割れる場合もあり、好みによって評価がかなり異なる場合もある。作品自身が議論を沸かせるケースもある。議論が熱を帯びてくると、時間も濃くなり、長引く。意見や批評がほぼ出つくすと、次の作品に移る。全作品への議論が終わって、投票する。開票の結果、得点が接近している場合はさらに詰めて議論をし賞を決定する。今回は舞台や題材が多様であったせいもあり、特に票が割れ、それぞれの作品がかなりの高得点を得た。
最終的にまほろば賞に輝いたのは、井本元義氏「トッカータとフーガ」(季刊午前51号)である。この作品は、失踪した友人の医師の捜索と医院の後始末をその妻から頼まれるところから話が始まる。行方を捜すため、自然に過去を辿り、フランス留学時代からの自分との付き合いを遡ることになる。彼らとパリで知り合った主人公は医師のその妻に魅かれ、彼女のピアノ演奏の音の中に、激しい恋慕の情熱を掻き立てられる。フランス時代の狂おしい緊縛的な情熱の嵐が、苦い追憶としてよく描かれていて、これがこの作品の、晩年に人生全体を振り返る土台をなしている。失踪医師は、しかし若いころ書かれた告白小説を残していた。そしてそこに記された秘密が、自身の情熱と同じ構造を持っていたことに気づかされる。それはもっと背徳的で、もっと罪の匂いの濃い、彼の最奥の秘密に触れるものだった。この幾重もの秘密の構造の一つに、失踪医師自身親しい人間からその愛の対象を奪う行為が垣間見え、主人公の封印された情熱が残された彼女に向って再燃するところで小説は終わる。すでに肉体は衰えて、観念的情熱しか残されていないが、その方向に確かな生の追求があり、命の焔(ほむら)の在処(ありか)がある。生きてきた軌跡の意味に触れようとする痛切さが高まるラストに、この小説作品の足場が強く感じられる。小説中に小説を出してくるのは、禁じ手に近い手法で、危ういが、この作品はそれを超えて迫ってくるものがあり、その情熱の力を感じさせるところに、他の作品を一歩抜き離す手ごたえがあった。耽美的文章の骨格に逞しさがある。
特別賞の木戸順子氏の「インナーマザー」(弦96号)は、認知症になりかかっている母親の介護の生活を軸にした作品である。現代ではよく見られる題材だが、読み進めていくうちに別な領域が広がってくるのが新味と言える。この二重構造が小説世界を深めている。母親からの束縛を絶えず感じながら、その反発とうちとけなさのうちに成長してきた自分を介護の中に発見していく過程が、現在の状況と反対の立場を映していて、人間の因果を感じさせる。母親への愛情と反発、逆に接近しなければ共に生きていけない状況との葛藤、女としての重なり合いが交錯するところに、この小説の陰影がある。これまでの氏の「なまめかしさ」を、失われていくものとして捉えている新しい視点が深まりを獲得しているのを感じた。
短いものではあるが、「地の来歴」(全作家97号)は、農業や土地を基にして人間の変遷を低い位置から巨視的に眺めるまなざしが卓越していた。これまでになかった見方で、新鮮な投射を覚えた。化学肥料や、さつまいもの根を食い荒らす害虫とその越冬の生態を目前の農業の取り組みとして仕事を進めながら、一方で成田闘争や、戦後満州から成田へ引き揚げてきた開拓団の歴史や、古代の「風土記」に見る「茨城」の起源を通しての地方への征服の様子などうまく取り混ぜて、権力の浸透や闘争など大地の上を流れすぎる人間の勝手な事象を突き放して眺める眼は、地上の変遷の無常観を鮮やかに浮かび上がらせて虚を突かれる。このような独特な視点を持った小説はこれまでの日本文学にはなかったもので、筆者の専門の領域の根の深さを感じさせる。終わり方もいい。この新鮮な視点は捨てがたいものがあり、短い作品にもかかわらず、河林満賞を贈ることになった。
ちなみに河林満賞は、これまで銀華文学賞のなかにあったが、銀華文学賞の終了によって今回まほろば賞のなかに組み込まれた。故河林満の文学への情熱を継承するものとして、同人雑誌の創作意欲に満ちた作品に授与される。それにふさわしい内容を覚えた。
市川しのぶ氏の「二の糸」(弦96号)は、ひじょうに形の整った作品で、完成度は六編中随一である。三味線の伝統芸能の世界での「家元」という厳しい制度下に繰り広げられる男女の恋愛のなりゆきを繊細な筆で描き切っている。張りつめた糸の音のうちに、男女の息遣いが伝わってくる。他の選考委員から出た「濃密なものを流し込んでもよかったのでは」という方向も考えられなくはないが、雪の夜の逢瀬の情緒は、そこまでの重さを求めずに、雪のようにすべてを被いつくしていく。その淡さが、この作品の味ともいえる。古風な題材をよく逃げずに腰を落としてここまで磨き上げた。その練磨の精度は、賞に値するものとして、五十嵐勉賞を贈ることにした。
澤つむり「家族の樹」(狐火19号)は、既視感のある家と樹とを、偶然横浜に写生に来た主人公が見つけるところから、物語が動き出す。関東大震災で死んだと聞かされていた祖父は、実はどさくさに紛れて別な女性の所へ転がり込んでおり、そのまま別な家族の営みがそれぞれに続いていく。若い祖母は義弟と愛し合う仲になり、結婚の形をとらずに愛の形を続けていく。攀縁植物のように枝を広げ、それぞれの家族の形を得ていく男女の模様を自身の血縁の遡及に求めていくおもしろさがここにはあり、簡単に家族を捨てても、それなりに成立しなんとか力を得て展開していく生活と家族の姿が偶然の浮遊感の上に紡ぎ出されている。血縁というものの不思議なつながりとまた男女間の引き合う力の自由なひろがりが、ない混

ぜになってひろがってくる。はかなさを醸しつつ移り変わる淡さの奥行を感じさせるところにこの小説の妙味がある。タイトルの「家族の樹」が、冒頭部スケッチした樹ともっと深く絡み合わせることができれば、さらにテーマは鮮明になったと思われる。

辻村仁志氏の「アンデスの祈り」(空とぶ鯨15号)は、素材はすばらしく、高山病から始まる南米の風土がよく描かれており、町に生きる人々の姿も活写されている。日本からの進出企業の調査員の主人公と露天市場で小物を売っていたチコという少年との触れ合いを軸に、筋は展開していく。チコの生き生きとした言動は鮮やかですがすがしい。チコは孤児院から市場に出てきているが、すでに亡くなっている母親に何か秘密がありそうで、主人公がたまたま日蝕を見に行くことになったとき、その近くにあるチコの母親の死んでいる村へ連れて行ってくれとせがまれる。ここまでの展開はすばらしいが、母親の死にもっと南米の社会や風習などの矛盾を背負わせたりすれば、はるかにおもしろいものになったはずなのに、踏みとどまってしまった造りが惜しまれる。日蝕や遺跡をうまく組み合わせ、チコの死を母親の死に重ね、ボリビア社会や因習の犠牲の象徴のような形に持っていければ、しっかりした焦点を結んだ作品になっていただろう。可能性の大きな作品なので、今後も筆を入れて重要なテーマを結晶させてほしい。

同人雑誌のなかに、優れた作品を見い出すことは希望である。この広い日本語圏のなかでの人間の苦悩や認識、変わりゆく社会とそこに生じる矛盾や問題を、まだ同人雑誌の小説は反映できている。あまりに変化の激しい通信機器や便利な機能社会の陰で、人間の真の問題はますます見えにくくなっており、捉え難くなっている。それを表出できない商業文芸誌はこの激変する通信革命社会の中でその存在基盤を失いつつある。すでにその時代ではないのかもしれない。書き手が一人一人誠実に自己と向かい合い、表現の練磨を経て、他へ発信していく文学の原点は、同人雑誌の中にこそ死守されていると思う。今後その純粋行為が光を浴びる時が来る気がする。移ろい流れゆくものに左右されず、しっかりと自身の筆に魂を刻みこんでいってほしい。

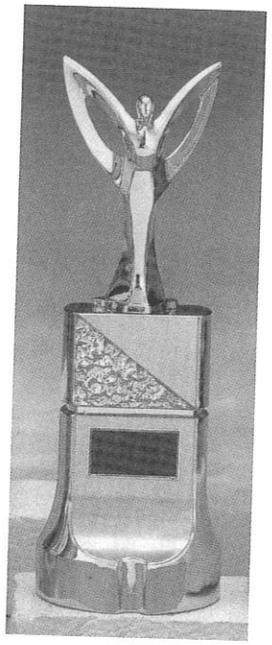
河林満賞の移設について

河林満文学賞は、二〇〇八年一月十九日脳出血で急逝した作家・河林満を偲び、その文学への情熱と創作にかける志を遺す意を込めて、御遺族の寄付を基に、二〇〇八年十二月十日に創設されたものです。故河林満の文学への熱情と響き合う、優れた小説作品・創作活動への顕彰とさせていただきます。

贈賞作品はこれまで銀華文学賞に応募される小説作品を対象にしてきましたが、銀華文学賞の終了によってまほろば賞のなかに組み入れられることになりました。同人雑誌の優秀な作品に贈賞され、受賞者には賞状、賞品、記念品、賞金五万円が授与されます。

この賞によって、たゆまず小説創作に情熱を燃やす方々に光を当てることができましたら幸いです。

作家集団「塊」／文芸思潮



第９回まほろば賞 読者賞 集計

	家族の樹	トッカータとフーガ	地の来歴	アンデスの祈り	二の糸	インナーマザー
今田真理子	10			10		
朝倉里子	50					
伊藤元子			20			
渡辺恵理	20				20	20
西田宏	20			10		
嶋津理恵子			30			
木内是壽		50				
	100	50	50	20	20	20

まほろば賞は、一昨年から読者賞を設けました。読者からの寄付金に加えて感想投票をいただき、その合計点数の最高点の作品に読者賞を贈ることといたしました。今回は上記の集計のような得点となりましたので、ここに御報告いたします。寄付金合計金額26000円を得票に従って配分し、各著者に贈らせていただきます。お寄せ下さる方はまだ少数ですが、これが大きく発展し、多数の方が参加して下さることを期待しております。　全国同人雑誌振興会

読者賞「家族の樹」澤つむり

寸評・感想

●「トッカータとフーガ」は、近親相姦とホモセクシュアルとが陰に隠れ、人間の奥に潜む暗い領域を情念の中に取り出してバロック音楽のような力を感じました。よかったです。今後も期待します。　匿名希望

●文芸誌「弦」のお二人の作品に心魅かれました。　今田真理子

●木戸順子様の「インナーマザー」が、老人女性と女性の心の屈折を見事に描いていてよかったです。
市川しのぶ様の「二の糸」も雪の中の思いが伝わってきて、心に染みました。　渡辺恵理

●「地の来歴」は人間の歴史を越えた「地の歴史」があることをよく知らせてくれて、深い新たな眼を開かせてくれました。短いですが、とても優れた小説と思います。　匿名希望

●澤つむり氏の「家族の樹」は、このような男女の結びつきや血縁の糸があるのだな、とあらためてその複雑さと多様さを覚えました。人間て不思議ですね。蔦のように、家族の形に沿って伸びていかなければならない宿命でありながら、でも自由な思いがけない方向もあるということを教えてくれました。文章もなめらかでやわらかく肌ざわりのよさを感じました。　匿名希望

まほろば賞　受賞の言葉　井本元義

この度、「文芸思潮まほろば賞」を頂きましてありがとうございます。二回目の候補で頂き嬉しいばかりです。

学生時代には詩、小説、東京でのサラリーマン時代には小説を書いていましたが、郷里に帰ってからはまったくペンを持つことが出来ませんでした。中小企業の経営に携わり、その日々の煩雑さは私に物を書くという時間と気持ちを与えてくれませんでした。想像力と何かを表現しようとする意欲が、次第に萎えていくに任せて、気がつくと三十五年の年月が経っていました。青年時代はそうやって川に流され遠い闇に消えてきました。ただ、悶々とした日々でしたが、読書だけが唯一の楽しみでした。

還暦を迎えた時、記念にと詩集を出しました。長年溜まっていたものが噴き出したようでした。そして仕事を辞めてから少しずつ小説が書けるようになりました。

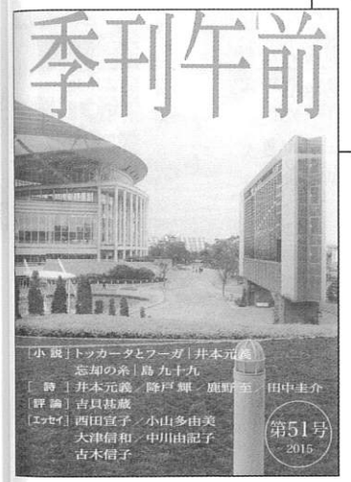
コントのような散文詩をいくつか書いていましたが、今回受賞した作品は小説としては三作目です。

青春時代とは、生命の力があり希望があり愛があり、それを不安が美しく見せてくれるものです。その青春青年時代を素通りして、今、私は老い、生命の力も希望もありません。しかしそれらを彩る青春時代のような不安もまったくありません。あるのは「無への憧憬」だけです。それは暗いけれど静謐で美しいものです。時折り激しく荒れ狂うこともあります。これをどうやって表現するか。それがこれからの私のテーマです。

井本元義

いもと　もとよし

1943年生まれ
九州大学理学部卒
詩集「花のストイック」
「レ・モ・ノワール」
小説「ロッシュ村幻影」
　新潮新人賞　佳作
　福岡市文学賞
「顔」第5回まほろば賞優秀賞
　文芸思潮　現代詩賞奨励賞



河林満賞　受賞の言葉　嶋津治夫

このたびは、「まほろば賞」の「河林満賞」をいただいて、たいへん感激しております。河林さんの「渇水」は「文学界新人賞」の時に読んだ記憶があります。同じ公務員として感じるものがあり、共感した覚えがあります。河林さんは、なんとなく野呂邦暢氏のような印象を持っていました。同じように若くして亡くなられたのはとても残念です。小さくても存在感のある作品。この賞をいただいたことを契機に、さらなる勉強をしてまいりたいと思います。ありがとうございました。

嶋津治夫

しまづ　はるお

1949　東京都生まれ
　71　茨城大学農学部卒業
　92　「父との関係」で関西文学賞エッセイ部門佳作入賞
著書「白鳥悲歌―常陸国風土記異聞」（2002／澪標）
　「蜻蛉日記異聞―芥川龍之介の恋」（2010／驢馬出版）
　「一葉探訪」（2015／のべる出版企画）
現在「全作家協会」会員
千葉県香取市在住

特別賞　受賞の言葉　木戸順子

この度、第九回まほろば賞の特別賞を頂き、大変うれしく心よりお礼申し上げます。実は、私は「セラピープロジェクト」という作品で二〇〇八年に同人雑誌優秀賞を受賞しています。長い間同人活動を続けていましたが、それまでは自分の作品に自信が持てずに悩んでいた時のことでした。初めて自作の小説が認められ、これからも書いていこうと勇気を頂いたのでした。

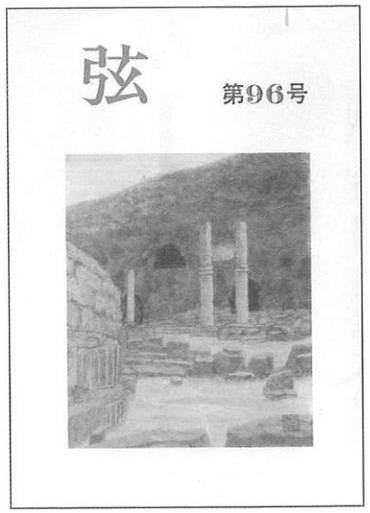
今、文芸思潮は大きく発展し、全国の文学を志す人々の心の拠り所になっています。あの時の私のように勇気づけられ、背中を押されて意欲的に創作活動を続けておられる方も多いのではないかと思います。

私も今回の受賞に甘んじることなく、少しでもいい作品を書き続けていきたいと思っています。本当にありがとうございました。

木戸順子

きど　じゅんこ

1945年 名古屋市生まれ
文芸誌「弦」同人
中部ペンクラブ理事・編集委員
短篇小説集「思秋期」
2014年中部ペンクラブ文学賞受賞「シェルターに住む」



五十嵐勉賞　受賞の言葉　市川しのぶ

この度『五十嵐勉賞』とのご連絡を頂き、思いもかけないことでしたので、大変驚いております。

明日への確実な保証もない混迷の世の中で、まるでそのことに関係ない『芸事』の世界を書き続け、時には自己嫌悪に陥ることもありました。今回の受賞は、諦めずに長年書き続けた事への、何よりのご褒美だと思っております。

十一月は誕生月ですので、その月に「受賞のお知らせ」を頂いたことは、最高で最大のバースディプレゼントでした。

これからも書き続けるつもりでございますので、今後ともご指導賜りますように、よろしくお願い申し上げます。

有り難うございました。

市川しのぶ

いちかわ　しのぶ

1943　名古屋市に生まれる
　97　名古屋タイムズ社文芸大賞受賞
2000『桜のレクイエム』出版
　02『梧桐の詩』出版
　04『横町花見小路』出版
　05　日本文学館大賞審査員特別賞受賞
　06　中部ペンクラブ文学賞特別賞受賞
　　『風のメロディ』出版
　中部ペンクラブ会員
　「弦」同人

新しい日本文学の潮流を

同人雑誌から

全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞

2015 第9回

全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞

選考委員

三田誠広・中上 紀

小浜清志・五十嵐勉

※候補作6篇は「文芸思潮」60号に掲載

読者賞投票もあります●詳細は次ページを御覧下さい。

全国同人雑誌最優秀賞まほろば賞改訂

●全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」

全国同人雑誌振興会および文芸思潮では、文芸同人雑誌の振興と創作活動の奨励を図るため、全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」を創設します。これにより、同人雑誌で活躍される方々の創作エネルギーを鼓舞し、優れた同人雑誌の作品を、文芸を愛する人々に広く読まれる運動を展開していきたいと存じます。

●全国同人雑誌最優秀賞の選考過程（改訂）

① 全国同人雑誌振興会選考委員会および文芸思潮編集部により、同人雑誌に掲載された作品のなかから優秀賞を選び、文芸思潮に掲載する。これに同人雑誌優秀賞を贈り、さらに選考の上6篇前後を最優秀賞選考の候補作品とする。優秀賞には賞金2万円と賞状・記念品を贈る。

② 毎年選考委員による選考会を行ない、候補作品について十分な討議を重ね、最優秀賞を決定する。

③ 最優秀賞「まほろば賞」は一人が原則だが、複数もありうる。

④ 次点には特別賞を授与する。

⑤ 選考委員は別に賞を授与することができる。

⑥ 全国および海外からの送付による投票により、「読者賞」を決定する。

⑦ 読者賞の投票は選考会1週間前までに行う。

⑧ 最優秀賞には10万円の賞金と、賞状、記念品を贈る。（賞金は、できるだけ有志の寄付を募り、その寄付金によって、運営する）

⑨ 最優秀賞選考結果を「文芸思潮」に発表する。

⑩ 優秀賞を4回受けた作者には「まほろば作家賞」が授与される。

⑪ ポピュラー（大衆）部門、評論部門も設ける方向で整えていく。

●この全国同人雑誌賞「まほろば賞」は、文学を愛する方々の賛同と御協力によって運営されていく新しい賞です。ぜひ読者賞に投票されて奮って御参加いただくことを切にお願いするしだいです。

2015年6月24日　（改訂）

全国同人雑誌振興会
文芸思潮

読者賞

第9回全国同人雑誌まほろば賞 読者賞 投票用紙

読者賞に投票する方はこの用紙を切り取るか、コピーして点数を記入し、郵便為替同封の上、8月15日までに、まほろば賞係宛てにお送りください。※点数の合計が持ち点となるようにつけてください。（一〇〇〇円の方の持ち点は10点です）一作に限らなくてもけっこうです。参加投票料の郵便為替は賞金にさせていただきます。

①	②	③	④	⑤	⑥
「家族の樹」 澤つむり「狐火」19号	「トッカータとフーガ」 井本元義「季刊午前」51号	「地の来歴」 嶋津治夫「全作家」97号	「アンデスの祈り」 辻村仁志「空とぶ鯨」15号	「二の糸」 市川しのぶ「弦」96号	「インナーマザー」 木戸順子「弦」96号
点	点	点	点	点	点

持ち点 ●金額の1／100	氏名	TEL	
住所　〒		文芸思潮定期購読の方は○をご記入下さい	同人雑誌振興会会員の方は○をご記入下さい

※1口1000円からですので、2000円の方の持ち点は20点となります。30口まで可能です。

●送り先　〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13　アジア文化社　まほろば賞読者賞係

同人雑誌優秀作

狐火 19号

家族の樹

澤 つむり

その男に会うまで私は霊感などというものを信じたことはなかった。もっとも、私の母は生前、あなたの夢を明け方に見たのでちょっと気になって、などといって電話をかけてきたし、祖母が死ぬ前日、雲の上から手を振る姿を西の空に見た、などともいっていたから、母には霊感があったのかもしれない。だが娘の私は、母がそんな話をするときはいつも話半分にしか聞いていなかった。今もその気持に変わりはない。

しかし、その男、といっても八十歳過ぎと思える老人だったのだが、彼に会ったときに感じた思いを煎じ詰めると、霊感としか思えないのだった。

その日は五月半ばの第三木曜日で、五月晴れのよい天気だった。これほどの好天はそれまでの青空教室ではなかった。そう、青空教室とよばれる野外でのスケッチの場所でその男に出会ったのだ。

私が水彩を習い始めたのは三年ほど前である。月に三回ある教室のうち、二回は室内で静物を描く。第一週か第三週の木曜日だけが野外で行われ、その日私は十五人の仲間とともに、さいたま市から横浜の「港の見える丘公園」に出かけ、それぞれ気に入った場所で描き始めたのだった。

実はここでの青空教室は四回目で、だから公園内のイギリス館や公園近くの西洋館はすでに描いたことがあった。

もちろん港の向こうに見えるベイブリッジや倉庫群、湾内に停泊している大小の船舶などを描いてもいいのだが、あまりにも天気がよく、日差しがきつかった。私は、バラ園で描くという良子たち数人の仲間、大佛次郎館の前でスケッチブックを広げた男性、あるいはレストランの建物に取り組む人などを次々に覗きこみながら、いまひとつ描きたい気持が湧かず、少しずつ公園から離れ、イタリア山のほうへと緩やかな坂を上っていった。

女子大や私立中学、レストランや教会など、閑静な建物を左右に眺めながら、一人でスケッチポイントを探した。まだ初心者だが、観光名所の建物を描くのは気が進まなかった。もっと心ときめく場所で描きたかった。そんな欲張った気持で、早々とスケッチブックを広げ、描き始めた仲間から離れていったのだ。講師の本橋にはいつも、気に入った場所を探すのが一番大事です、といわれていたし、今日こそは妥協しないでそんなポイントを探そうと思った。というのも先月、仲間につられ、数人が座った場所についつい座り、すぐ描き出してしまい、途中で、もう少し違った場所のほうがよかった、とつまらない後悔をしたのだった。

しかし、これぞと思うスケッチポイントはなかなか見つからなかった。

瀟洒な建物の向こうに港が見えるエキゾチックな場所はいくつかあったが、ここでなんとしても描きたいという気持が湧いてこなかった。

さすがにイタリア山の案内標識が見えてきて慌てた。時計を見ると十一時を過ぎており、ポイント探しだけですでに一時間半も歩き回っていたことになる。仕方がない、もう一度公園まで戻ろう、と今上ってきた坂道を下り、そのまま左手に回りこむ道なりに行こうとして、ふと、自然石の石段が緩やかにつづく細い坂道を見つけた。

その道が目に入った途端、いつか通ったような気がした。既視感があったのだ。しかし、青空教室のときに通りかかったのではなく、もっとずっと以前、はるか昔に、と、すっかり忘れていた記憶が刺激されるような気持で、そうだ、ここだった、ここを下りるのだ——と、不可解な衝動に押され、石段を下りていった。

下りる人と上る人がようやく擦れ違えるほどの幅しかない、細くくねる、自然石を踏み固めた石段の道をしばらく進んでいき、突然、その場所に出た。

といって、取り立てて珍しいものがあるとか、抜群に景色がよいとかではない。きっと他のスケッチ仲間には、なぜここが、たとえばイギリス館やエリスマン亭や、イタリア公使の家といった有名な建物より魅力があるの、と首を傾げられるに違いない。だが、どうしてもこの場所を描かなければいけない、今日のスケッチポイントはここ以外にはありえないというような、画然とした感じで、立ち止まっ

たのだった。

石段の左斜め下に、古びた洋館が木の間隠れに見えるのだが、それも無人のような白茶けた様子で、二階のステンドグラスふうの飾り窓にはひびが入っており、ツタの絡まった煉瓦の外壁もところどころ縁が崩れたり、亀裂が入ったりしている。芝生の真ん中にある楕円形の池には水はまったくなく、端のほうに泥や枯葉がうず高く固まっていた。

おそらく、かなり前から人が住んでいないのだろう。だが、それにしては荒れ果てた洋館というほどの凄みはなく、こじんまりした西洋風の建物で、ただ、池の脇にある、なんという名前かわからないが枝を広げた大きな木が、家全体を抱え込むように茂っている、その取り合わせに心惹かれたのだった。

そのときの気持を今振り返って言葉にするならば、自分の根っこに触れるような、いや自分だけではなく、自分にいたる父祖の、というべきかも知れないが、そんなふうな、懐かしさに包み込まれるようだった。

とはいえ実際には、歩きまわった疲れと、ようやく描きたい場所を見つけ、なにはともあれほっとしたという思いとで、そのとき自分が心惹かれた理由など曖昧なまま、遅れを取り戻そうと、画材の入ったバッグを脇に置き、携帯椅子を取り出し、スケッチブックを広げ、まずは、アタリ——画面での配置——をつけようとしたのだった。

それにしても、なんとも居心地のいい場所だった。太陽はほぼ真上にあるのだが、石段の両脇にある並木に遮られ、木漏れ日がわずかに射しているだけで、風というほどの風はないが、海からのかすかな塩のにおいが爽やかだった。枝の間から覗ける無人の洋館と、その建物を守るように脇に聳える木。すばらしい景観だ、と心が弾んだ。

古びた洋館は、よく見るとバラのアーチが門から玄関までかつてはあったらしく、その名残の鉄枠が緩いカーブを描いてところどころに残っていた。大きく枝を広げている木は、以前はそこまで茂っていなくて、おそらくバラがこの庭の主役だったのだろう。しかし何年も手入れをされていないせいか、雑草のほうが勢力を増し、バラはどこにも咲いていなかった。

スケッチブックを画架に載せて、私は迷った。

大きな木と古い家の、両方を画面に入れようとすると、おさまりが悪い感じがするのだ。といって木を端に寄せて家だけを描くのでは、平凡すぎて、物足りない気がした。無人の家だからなのか、活気のない画面になりそうだった。両手の、親指と人差し指で作った長四角の中に、風景をどう切り取り、どう収めようかと悩んで、手を遠ざけたり近づけたりを繰り返した。

やはり画面全体のバランスを考えると、あの家と木と両

方を描くしかない。そう思いきめ、3Bの鉛筆でラフな形付けを始めた。

そのとき、ボーという汽笛が聞こえてきた。腕時計を見るとちょうど正午である。二時半にバラ園にあるあずまやに集合する予定なので——そこで全員の講評がある——約二時間しかない。思いがけず場所選びに時間を費やし、正午から描き出すとは、と気持が焦った。手の遅い初心者なので、鉛筆デッサンに優に一時間はかかる。

しかし、どうしても描きたいと思って描くからなのか、無駄な線にてこずることもなく、洋館の二階屋根の部分、廂（ひさし）、玄関上のバルコニーの木枠、玄関ポーチ、レンガの敷かれたアプローチなどが、手早く写し取れていった。

たびたび本橋講師に指摘される構図の狂い、特に描線が右肩上りになる欠点が、目を細めて画用紙と実際とを見比べてもあまりなさそうで、つまり、建物を描くのが苦手の私としては、まずまずの仕上がりと思えた。

だが問題は、あの大きく枝を張った木だった。水彩画を習い始めた頃は、建物を描くのが一番むずかしかったが、少しずつ慣れてくると、建物よりも自然の、木や草を描くほうがよほどむずかしいとわかってきた。

特に、あの木の、大小の枝が複雑に絡み合い、菱形の葉の、大きさや色合いに微妙な変化のある重なりを、どう描けばいいのか。膨れたような枝の張り加減と、木の間から見える洋館の、一階の窓とテラスの光と影……。

デッサンが木に近づくにつれ、鉛筆を動かす速度が鈍り、とうとう手を止め、睨むように大きな木を見つめた。

なんとも奔放な枝の張り具合で、どう描いても、無人の洋館より調子が強くなりそうだった。

木のほうが強すぎるのは、まずいかもしれない——。

理由はないが、私が描きたいのは、あの家と木が、持ちつ持たれつ、長い年月、双方が絶妙なバランスでこの地にある、その独特な関係から醸しだされる微妙な味わい、のはずであった。家が強すぎても、木のほうに力が入りすぎてもいけない——。

「そろそろ木のほうも描いたほうがいいでしょう」

後ろからの声に、ハッとした。携帯椅子から飛び上がりそうになった。

グレーのピケ帽をかぶった長身の老人が、すぐ後ろから絵を覗き込んでいた。

ほとんど人通りのない坂道とはいえ、昼時が近づくに連れ、幼児を連れた女性や、犬の散歩らしい人がときおり後ろを通っていたし、少し離れた中学校の校庭から球技をする歓声も響いてきたりしていた。だが、わざわざ足を止め、後ろから覗き込んでいる人がいたとは、思いもしなかった。私はいまだに他人に自分の絵を覗かれるのに馴れないでいた。

しかし、老人はそんなこちらの戸惑いなど意に介さないように、
「櫨(はぜ)の一種ですが、葉っぱは十一月になると上のほうから紅葉しはじめて、松明のような真っ赤な色に染まると、すべて落ちてしまいます。赤色といっても、日の当たり方によって濃さが少しずつ違って、黄金色の部分もあるのですが、そりゃあ見事なものです。真っ赤なときはほんの二日ほどですが、そのときには、あの家の窓ガラスまで赤く染まって活気が戻るんです」
老人は、私にというよりも、描きかけの私の絵に向かってのように語りつづけた。
木のデッサンに移ろうとしていた私はしかし、早く立ち去ってほしい、という思いをこめ、わざと洋館の窓枠の部分をなぞったり、玄関上の雨樋の、少しひしゃげたような線を描き直したりした。そんな素振りで、ここから離れてほしいという思いを表したつもりであったが、男はまるで私の描線に注文をつけるように、
「窓枠とか細かい部分は、あの木を描き込んだ後のほうがいいでしょう」と、押し付けがましくいった。
私は素知らぬ顔のまま、立ち上がって、伸びをするようにゆっくりと空を見上げた。雲ひとつない青空が並木の上に広がっていた。
私のあからさまな拒否の素振りに、さすがに男も気がついたのだろう、どうもお邪魔してすみません、と一礼して立ち去りかけ、だが、まだここの景色に心が残るように、
「あの木にはそりゃあ手こずりますが、あの家にはあれを描かないわけにはいかんから、それで困るんだなあ」と、呟いた。
その言い方が、それまでの命令口調と違い、親密な、実感がこもっていたので、私は迷惑がっていたことなど思わず忘れ、「あのう、ここをお描きになったことがあるんですか」と、男を振り返った。
その途端、先ほど椅子に座ったまま見上げたときには、ピケ帽の庇の陰ではっきりしなかった男の顔をまともに見上げる形になり、なんともいえない感じに襲われたのだった。
咄嗟に思ったのは、父によく似た目鼻立ち、ということだった。だがその第一印象が過ぎると、父に似ているところは、まるい頬の両側にできるえくぼで、大きな鼻や厚みのある唇は少し違う、と思い、しかし、なぜか目が合った瞬間、十五年も前に亡くなった父が生き返り、私の下手な絵を見にきたような、気恥ずかしさを覚えたのだった。
「ええ、何度も描こうとしたんですよ、何度もねえ。この場所です、あなたが今椅子を置かれているそこからです」
老人はしかし、父よりも甲高い声で頬にえくぼを刻んで答えた。

「あ、すみません場所を塞いでしまって」
「いやあそんな、僕だけの場所じゃないんだから、どうぞ」
老人は笑って、だけど、珍しいな、ここまでスケッチに来る人はめったにいないのに、お仲間は？　といった。で、他の人たちは公園のほうで描いているのだが、自分はもっといい場所をと欲を出し、さんざん歩きまわり、ようやくこの場所を見つけた、どうしてなのか、この場所にとても惹かれて、と、いわなくてもいいことまで話していた。
「それはそれは……。ほんとうにお邪魔しました。どうぞスケッチつづけてください」
男は会釈して立ち去ろうとした。と勝手なもので、今度は私のほうが名残惜しいような、もう少し話していたいような気がして、「あの木を、あの家より強くしたくないんです、そのバランスが気になって」と、無理に引き止めるようにいってしまった。
「ああそうです、そこが大事ですとても。でも大丈夫、僕もそれが気になったものだが、描いてみると、確かに枝振りが複雑で手こずるんだが、意外に家とのバランスは取れる。おそらく、植木鉢だったのが根付いたものなので、どこか、わきまえたところがあるのかもしれない」
と、ふたたびえくぼを見せていった。そして、あの木が、もともとは鉢植えであったのを、庭に置かれているうちに根付き、一度火災にも遭ったのに翌年には芽吹いて、あれほど大きくなったのだ、という話をしてくれた。
今では、二階建ての洋館よりも高く、大人が一人では抱えられないほどの太さである。それが、鉢植えで室内に置かれていたとは、長い年月の間に、と思ってもにわかに信じられない気がした。
どうやら私が訝しそうな表情をしたのだろう。いや、これは、僕が子供の頃、親父に聞いた古い話なんだけど、と老人が付け足した。
「お父様に？」
「この辺りまで散歩に連れてきてくれて、そんな話をね。僕は、親父との散歩は大好きだったけど、ほんとうは港のほうがよかった、いろんな船が泊っているからわくわくして。だが、親父はなぜか、この場所が気に入っていて、必ずここで立ち止まってしまった」
男はそういいながら洋館のほうを見やった。
そのときだった。胸の奥のほうでざわざわと、後で思い起こすと、霊感のような、としかいいようのないものが蠢き、そう、この場所ですわ、と囁いたのだ。確信に満ちた口ぶりだった。
それは危うく声になりそうだった。そうですわ、私も小さい頃、祖母に連れられて、ここに来たことがあったんです、だからとても懐かしい気がして。この場所ですわ、ここに、間違いありません。ずっと忘れていましたが、そこ

の坂道の下り口にある、平べったい石に足を乗せたとき、おやっと思ったんです。あそこを下りてきて、祖母がいつまでもここに立っているので私は飽きてしまい、祖母の手を強く引っ張り、早く帰ろうって促しました——。

「いやはや、どうも大変お邪魔して申し訳ありません、どうぞ、スケッチつづけてください」

男が、失礼します、といって坂道の石段を上っていくのを、私は茫然と見送っていた。

それ以上、どうにも声を掛けられなかった。金縛りにあったように、立ち去っていく背中を見ていた。ひょっとしたら……、と息を継ぐことも忘れて、男の後ろ姿を見守っていた。それでいて、心のどこかでは、突如思い浮かんだ光景を男の言葉に結びつけるのは、とんでもない思い違いかもしれないと、夢が醒めるときに感じるようなひんやりとした違和感も膨らんできて、とにかくもっと後で、もっとゆっくり考えよう、落ち着かなければ、と何度も自分にいいきかせていた。

その日の青空教室の講評会はさんざんだった。絵を描き終えていないまま集合場所に向かった私は、どこで描いていたの、と友人の良子に聞かれても、はっきり答えられなかった。心ここにあらずの状態で、描いた絵を芝生の上に並べるようにいわれてもぼんやり物思いにふけっていた。

皆の力作の脇に自分の描きかけの、色も薄くようやく下塗りしか終えていない絵が並ぶと、さすがに惨めな気がした。だが、それも一瞬で、講師が一枚ずつ講評を始めるとまた、あの男のことを考え始め、周りのざわめきなどまったく聞こえなくなってしまった。

「あなた、どうしたの、ほら、あなたの番よ」

良子に促され、ようやく自分の絵を本橋講師が見ているのに気がついた。

「ここはどこですか。公園？」

「いえ、公園から少し坂を上っていったところです。石段があって」

「紅葉していたのですか、その木」

「いえ、まだなんです。十一月になると真っ赤になるんですけど」

「もみじでしょう、この木」

良子が助け舟を出してくれたのに、

「いいえ、ヨルベノキです」と、断固とした声でいっていた。

「そういう名前なの、その木？」

「そうじゃないけど、そう呼んでたんです、みんなが」

「みんなって？」

私は口ごもったまま顔が熱くなっていった。自分ではない声が、勝手に答えているようなのだ。「ヨルベノキ」などとは、あの老人だって決していわなかった。

「通りかかったお年寄りがいったのね、ずいぶん大きな木だもの、きっと由緒ある木なんでしょう」

機転のきく良子が気まずい沈黙をとりなしてくれ、本橋講師も、「まだ途中段階だからはっきりはいえませんが、なかなか楽しそうな取り合わせですね、仕上がりが楽しみだ」と、無難にまとめてくれ、何とかおさまった。だが十五人の中で、描き終わらなかったのは私だけで、それも半分も進んでいないのだから、話にもならなかった。

しかし、それすらも気にならないほど、あの男に会ったときに感じた霊感は強烈だった。

もしかしたら、と帰りの混んだ電車の中でも考えつづけた。

もしかしたら、あの老人は父の、異母弟かもしれない……。そう考えそうになり、いや、突拍子もない妄想だ、と即座に否定し、しかし、霊感のようなものでも、何かの手がかりになるのかもしれない、そんな気もして、ほとんどうわの空で帰宅したのだった。

この青空スケッチでの末男さんとの出会いが——彼の名前を私は「末男」と名付けた。身勝手な便宜上の名前である——私をもう一度、父方の祖父母について考えさせるようになった。

もう一度というのは、かれこれ二十年前になるのだが、祖母・チヨが九十一歳で亡くなったとき、どうしても必要があって祖父・幹生について調べた。しかし結局、うやむやになったのだった。それがいまだに自分のどこかに引っかかっていたのかもしれない。

二十年前の経緯というのは、祖母が亡くなって四十九日忌に納骨する手筈になっていたとき、墓のことを頼んでいた石屋が、父に電話をしてきて、「墓の中に幹生さんのお骨が入っています」と告げたことだった。

それまで、祖父・幹生の墓の中には、焼けたレンガが入っているだけだ、といわれてきた。

一九二三年九月一日に起きた関東大震災のとき、三十四歳だった祖父・幹生は、横浜の会社にいて、そこで死んだのだが、崩れ落ちたビルの瓦礫の下になり、遺体は見つからなかったとかで、だから幹生の墓の中には、そのとき火災で焼け落ちた建物のレンガが入っているだけだ、と父は私たち家族に話していた。それは、祖母・チヨから繰り返し聞かされたことだったという。

私も、焼けたレンガしか入ってないから、とチヨが呟くのを聞いたことがあった。そのせいだったのか、チヨは毎日仏壇にお灯明をあげるのを欠かすことはなかったが、夫・幹生の墓参りにはめったに行こうとしなかったのだ。

しかし、チヨが亡くなり、その納骨のため、墓をあけた

石屋は、「幹生とかかれた骨壷があり、そこにお骨が入っています」と、報告してきたのだった。

寝耳に水のような話であった。

大急ぎで父は、ほんとうにそれが幹生のお骨なのかどうか、あちこちに問い合わせて調べようとした。だが、途中から会社の仕事が忙しくなり、父の代わりに私が、事情を知っていそうな人を訪ね、「古い話で恐縮ですが」という父の言葉を振り出しに、思い当たることがあれば、と聞いてまわった。その当時はまだいくらか関係者が生きていたのだ。

チヨのすぐ下の妹・志津子と末弟の修、幹生の甥の隆、チヨの親友だったお蔵さん、長野の旧家で畑を手伝ってくれていた松田家の、次女・ノブさんの五人から、もし何か心当たりがあればと、つまり、お骨が幹生のものなのかどうか、知っている限りのことを話してもらった。

そうやって聞いた彼らの話を繋ぎ合わせると、関東大震災前後の、幹生とチヨ夫婦、そして幼い三人の子供たち（私の父・健と、妹・郁、弟・剛史）の状況が少しずつ見えてきた。

その日、幹生は横浜港に近い会社のビル内にいて地震に遭った。逃げれば逃げられたのに、地下室にいた人を助けようとして戻って……など、いろんな話があったらしい。チヨは、たまたま大磯の実家に子供たち三人を連れて帰省していて、助かった。もしも住んでいた横浜・山手町の家にいたら、そこは、隣家からの火災で跡形もなく消失したので、三歳を頭に三人の子供たちを抱えてどうなっていたのだろうと思う。

チヨの実家、大磯の家で妹の志津子は、その当時を振り返ってこんなふうに話した。

「九月一日の日、チヨ姉さんはここに来ていたのよ。もう三週間も前から子供たち三人連れて横浜から来ていて、九月になるし、そろそろ帰ったらと、母さんは何度もいったわ。だけど、幹生さんが迎えに来てからってきかなくて。私たち妹や弟にしてみたら、チヨ姉さんのいつものわがままとしか思えなかった。三週間もほおっておかれて、幹生さんが可哀想ねって陰でいってたわ。年子で三人の子を産んで大変だったにしろ、父さんが子守をつけてやったんだし、もう少し辛抱するもんじゃないのって。確かに、大磯にいたから姉さんも子供たちも無事だったのかもしれないけど、幹生さんは浮かばれないじゃない、まだ三十四歳の働き盛りだったのに。

幹生さんが行方不明だと聞いても、最初姉さんはのんきに、そのうち帰ってくると思っていたみたい。それが一ヵ月ぐらいして、幹生さんのご実家からお骨が届いたの。あちらでは、弟さんがそれを抱いて号泣したと、そう聞いた覚えがあるわ。姉さんはお骨を届けられても、泣かなかったわ。お骨が、幹生さんのものでないと思っていたのどうか、そこまではわからなかったけれど……」

ここで志津子が語った「幹生のお骨」というのは、一ヵ月ほどして、崩れ落ちたビルの瓦礫の中から三体の遺体が発見され、一つはまったくの別人、もう一体はわずかな特徴から違う、となり、残されたのが幹生であるとされ、すぐ荼毘に付され、チヨのもとに届けられたものらしい。だが、それについて、チヨの末弟・修はあっさり否定したのだった。

「そのお骨はおそらく、父・真吉が、手をまわしてどこかから探してきたものだろう、とぼくは思った。その当時、ぼくはまだ十六歳で、脊椎カリエスの治療中で大森の病院のベッドにくくりつけられていたから、もっぱら見舞いに来た家族からの情報だったが、ピンときた、これは父の、お芝居だろうな、と。

あの日、父も幹生さんも同じビルにいた。山下町の同じビルの、五階に父の事務所があり、幹生さんは一階にいた。幹生さんは一度外に逃げ出したのに、逃げ遅れた人を助けると戻って、それっきりという。父のほうは、非常階段を使って海へ逃げた。もうそこにも火の手が迫ってきていたが、そこは機敏に、小船を見つけて船頭に、沖にいる大型船に渡してくれ、と交渉した。そうして、港に入らないで沖に停泊していた大型貨物船に乗り移った。そこまではよかったのだが、その船がイギリス船で、乗組員は外人ばかり。そして実は神戸へ行く途中で、すでに碇を上げ、出航するところだった。で、父一人のために泊っているわけにも行かず、神戸に連れて行かれてしまった。否応なくだが、命を助けてもらったのだし、好奇心旺盛な父なので、面白い体験だ、ぐらいに思ったらしい。神戸に着いたのが五日後だったとかで、そこから今度は汽車で東海道を引き返してきた。父が大磯に戻ったのが、結局一週間後ぐらいだったと思う。

その間、大磯のほうでは、父からも幹生さんからも連絡がないので、かえって一緒に逃げ延びたのだろうぐらいに思っていた。そこへ、父だけが帰ってきたから、では、幹生さんは、と大騒ぎになった。

父はその騒ぎの中、疲れも知らず飛びまわって、崩れたビルに何度も足を運び、幹生さんの遺体が見つかったと聞いたのが、十月に入る頃だったと思う。とうてい会わせられるような遺体ではないとすぐ荼毘に付され、幹生さんの弟の滝男さんが、お骨を大磯まで持ってこられた。

それはそうだが、ぼくはやはり、父のお芝居だった、と今も思っている。同じビルにいて、自分だけが助かって、娘婿が生死不明のままでは、格好つかないもの。チヨ姉さんは、父の一番のお気に入りだったし。その大事な娘と、かわいい孫三人のためなら、お骨の一つや二つ、どうあっ

ても調達したのじゃないのかな。

父はとにかく桁外れの人だった。伊勢の貧乏氏族の三男坊から兜町でのし上がって、一財産つくった男で、なんでも徹底しないと気のすまない質だったから……」

「幹生のお骨」を大磯まで持ってきたという滝男は、この時点ですでに亡くなっていて、直接話を聞くことはできなかったのだが、彼の息子・隆が、こんな話を聞いた覚えがある、と話してくれたのだった。

「お骨のことで何か、父・滝男から聞いていないかというお話。いろいろ考えて、一つ思い出しました。

ぼくがまだ東京の新聞社の駆け出しの記者で、九州で起きた炭鉱の爆発事故の取材に行くときだった。何百人もの犠牲者が出た痛ましい事故だったが、そのとき父が、遺族の気持というのははかりしれないものだから、取材には細心の注意を払えといって、幹生さんの遺体が見つかり、検死に行ったときのことを話してくれたのです。

横浜一の頑丈なビルが崩れて、中で埋まってしまった人を探し出し、着ている服や容貌で身元のわかった人を遺族に渡していき、最後に、どうしても身元のわからない遺体が三体残った。もう日が経っていて、顔や形では見分けがつかない。ただ一人には金歯があり、もう一人は小柄で、それでその二人ではないとなり、残った最後の一人が幹生さんとなったという。

その当時は科学的な判定などなかったからそうやって判断したのだろうが、父がいうには、人間の男であるとしかわからない遺体が三つ残り、その一つがしかし、兄・幹生だと確定されると、堪え切れずに涙が出てきて、もう遺体というより物体のようなその遺骸に取り縋って泣いてしまったらしい。もちろんそんな状態だったから、すぐ荼毘に付されたという。検死に立ち会ったのは、父と、チヨおば様の父上の、真吉さんだった……」

チヨの親友だったお蔵さんと、松田家のノブさんは、チヨたち親子が長野に転居してからの知り合いであり、幹生が亡くなった後のチヨたちの暮らしぶりについてなど、いろいろ参考になることを聞けたのだが、さすがに幹生のお骨については、二人とも、まったく知らなかった、とのことであった。

だが、志津子と修、そして隆の三人の話から、おおよその事情はわかってきて、暗黙の了解とでもいうものがチヨの実家と幹生の実家の間にあり、特にチヨの父・真吉と幹生の弟・滝男とで、穏便に収めた感じは掴めたのだった。

幹生の葬儀の記録や、その頃では珍しかったはずの写真も、志津子と修の家で見せてもらった。その写真で目に付くのは、三歳、二歳、一歳の遺児たちの小さな姿と、チヨの、表情のない顔であった。

チヨの顔は、骨壷の中に入っているのは夫・幹生ではない、と頑なに思っているように見えた。だから子供たちに、墓の中にはレンガしか入っていない、焼けたレンガしかないのだから、といいつづけ、いつの間にか子供たちもそう思わされてきたのだろう。

ところが、事実はお骨が入っていて、石屋が慌てて父に電話をしてきてあれだけの騒ぎになったのだが、ともかくチヨの四十九日忌の法要・納骨は、滞りなく、無事に済んだのだった

二十年前の三月、父に頼まれて駆けまわった記録を今読み返すと、よくも短時間の間に五人もの人に会えたものだとまず思う。

だが、それからまた日が経ち、還暦をすぎた私が、今ここで調べておかなくては、もうきっと何もわからなくなってしまうに違いない、とも思う。

もっとも、すでに父も母も亡くなり、このままであって別に困るわけではないのだが、あのとき、祖母・チヨの側から考えたのを、では、祖父・幹生の側に立つとどうなるのだろうか、とふと思った。

そのきっかけが、青空教室の日、私のスケッチを覗き込んでいた末男さんであった。それと、時間が経ってかえってわかってくることもあった。

というのは、チヨの亡くなった後ずっと無人となっていた長野の旧家を昨年、急に壊すことになったのだ。

長年風雨にさらされ、崩れかけていた土塀が、いよいよ危ない状態だと役所の検査でいわれ、建物全体に赤いテープを張られてしまった。で、倒壊の恐れのない土蔵だけを残し、母屋と土塀の部分を早急に取り壊すことになり、慌ただしく残っていた古いものの整理をした。

といっても、めぼしいものを段ボール箱に詰め込み、埼玉の我が家に運んできただけで、まだ中身を吟味したわけではないのだが、どうやらその中に、幹生が長野の母親・ミツに宛てて書いた手紙や、中学の頃に書いた日記、チヨの父・真吉からの手紙や文書類など、今まで見たことのなかった遺品がいくつかあるようなのだ。

私の仮説をまず明らかにしたい。

あの場所で、末男さんに出会って閃いたのだが、幹生は、地震で押し潰されたのではなく、焼け死んだのでもなく、何とかして逃げ出したのではないか、と思ったのだ。

果たしてそれが可能だったのかどうか、そして、なぜ逃げ延びたのなら家族の元へ、妻・チヨと子供たち三人の元へ戻らなかったのか、それを考えてみたいと思った。

わずかな資料と、あの日、末男さんに会ったとき閃いた独りよがりな空想である。

しかし、関東大震災で行方不明となった幹生を、一ヵ月

後に、死んだと結論付けたのが、ある意味、双方の実家の都合であり、チヨを納得させるために、そして世間に対するけじめとして、葬儀をはじめとする段取りが考えられたとするならば、それらを元に戻し、生と死の、生のほうへネジを回したらどうなるのかを考えてみたかった。

末男さんと出会った場所が、幹生とチヨと三人の子供たちが住んでいた場所であると知ったのは、たまたま段ボール箱の中から零れ落ちた、幹生から長野の母親宛に出された手紙の、裏に書かれていた住所を地図で調べてわかったのだが、その所番地には何となく予感があったような気もした。

チヨは晩年、冬の寒い間、私のさいたまの実家で過ごしていたので、私はチヨの外出によく付き添っていった。

大磯の妹・志津子宅へも何度か出向いた。その折、チヨが横浜に寄りたいといったことは一度もなかったのだが、もっとずっと以前、まだ私が小学生になる前の、ともかく私のほうがチヨに連れられて大磯の家を訪ねたとき、あの地に立ち寄った記憶があったのだ。

だから、旧家に残っていた幹生の手紙でその所番地を確認したとき、ああやはり、と思った。たった一度で、四、五歳の年齢だったので、まったく忘れていたのだが、青空教室の日、スケッチポイントを探し歩いていて、なにか勘のようなものが蘇ったのかもしれない。

横浜のその地から、幹生が長野の母親に出した手紙は、今のところ三通見つかっている。

日付を見ると、関東大震災の一年前のものが二通、震災の一ヵ月前のものが一通である。

三通とも、巻紙に筆の候文で、簡潔明瞭に用件が書かれている。太く勢いのある字体で、率直な言い回しが特徴である。もしも字体で人の性格を判断できるとしたら、おおらかな、男らしい、さっぱりした、といった言葉が浮かんできそうな書簡である。

事実、手紙を見つけてからさらに、幹生の中学時代に書いた日記や中学卒業のときの成績表などを見つけたのだが、それらからも、幹生の男らしい、やや直情型の姿を跡付けたのだった。

中学のときの成績は、六十一人いた同学年の中で卒業時に二十一番であるが、これは、半年前の夏休みから毎日、彼なりに相当な猛勉強をした結果のようで、彼の兄・昌造や弟・滝男がいつも学年の五番以内であったのと比べると、まあまあの出来のように思える。

それよりも、自分がたまに勉強を見てやっていた弟の、成績のいいことを率直に日記に記したり、朝早く起きて勉強をする予定だったのを、寝過ごしてサボった、と正直に書いたり、弁論部に所属していたらしいがその活動が制限されたのを、校長にいかなる理由かと談判しに行ったり、

といった記述で、行動的な面が浮かび上がってくる。

何とか高校への入学を許可されるが、その許可の封書がきれいに残されているのから見ても、幹生の喜びが伝わってくる。得意でなかった算術や物理に必死で取り組み、ようやくに得た入学許可であったのだろう。

その後、大学を出るまでの記録はどこにも見当たらないのだが、船会社へ就職したところを見ると、ごく平均的な成績で、学者になるような才子ではなかったのだろう。

つまり、一代にして会社を興し、発展させた父親の次男として、秀才の兄と弟に挟まれたそこそこの、体格はがっしりした男、といえるのかもしれない。

その頃、親類の沢井家に嫁に行った父親の妹・ミツが、子供ができないまま寡婦となり、幹生を養子にしたいといってきて、それを受諾する。これも、人柄のさっぱりしたところを気に入られたからのように思う。実際の叔母と甥の関係であったから、母と息子の間柄になっても親密で、かえって居心地がよくなったのかもしれない。

そして父親の知り合いが、チヨとの縁談を持ってくる。この縁談については、同じく箪笥の中にあったチヨの父親・真吉の書いた文書によってわかるのだが、その細かい経過の記述、かかった費用の委細洩らさずの記録などで、チヨの父・真吉の人となりまであらためてわかってくる。

真吉は、チヨの末弟・修の話にもあったが、好奇心旺盛な面白い人物で、筆まめでもあったらしい。兜町で自分ひとりの才覚で財産を築き、大磯の本宅のほか四谷、麹町などに何ヵ所かの家作を持ち、子供たちの教育にも熱心だった。長女のチヨは四谷の女学校に入り、美人で成績もよいと評判であったらしい。チヨの下に娘が三人、息子が三人いたが、父親に一番気に入られていたのがチヨだった。で、その娘の婚礼ということで張り切ったのだろう。結婚に至る経過、結婚式の出席者について、式次第、細々した費用に至るまで克明に記している。

チヨには、有力な求婚者が何人かいたようだ。それは私もチヨの口から、何とかさんがそれこそ熱心におっしゃって、というような話を聞いたことがある。

幹生との縁談も最初は断わるつもりであったとか。二十一歳のチヨはもう少し一人でいたかったのかもしれない。それが、仲人の再三の骨折りで決まる。上野の音楽会に友人と出かけたら幹生が追いかけてきた、という話を、やはりチヨから聞いた覚えがあるのだが、幹生のほうは、美貌のチヨに一目惚れであったのかもしれない。

だから幹生は、沢井家の、ミツの養子ではあっても、それは家の相続のためで、実際は、チヨの実家に近い横浜の会社に勤め、住居も市内で、子供たちの世話もかねてチヨの末の妹が同居するという、どちらかといえばチヨの実家・依田家の婿になった感じのほうが強かったように見え

る。幹生たちが住んでいた山手町の家も、真吉の持ち家の一つであったらしい。

そして、真吉の事務所と幹生の会社は同じビルにあったのだ。

その日、同じビルの五階にいた真吉がいち早く港に逃げ、沖に停泊していた外国船に小船で乗り付け、そのまま神戸まで連れて行かれたのは誤算だったにしろ、震災の一週間後無傷で大磯まで戻ってきたのに、同じビルの一階にいた幹生はなぜ、行方不明になどなったのだろう。チヨがどうしても納得できなかったのも当然かもしれない。

そのとき幹生を見かけたという人の証言は、幾つかあった。

恐ろしい揺れが来たとき、皆で外へ飛び出したが、彼は中にいたほうが安全だといって動かなかった。このビルは市内で最も新しいビルなんだから、といった。あるいは、いったん外へ逃げたが地下室にいる人を助けなければといって戻ったところを余震が来てやられたようだ、というもの、さらに、逃げ惑う人々に、慌てるな、と大声でいっていた、彼は柔道四段の偉丈夫だったから、などである。

逃げれば助かったものを、みすみす中にいたから建物の下敷きになった、あるいは燃え移った火にやられた、そういう結論が導き出される証言である。一目散に港まで逃げた義父の真吉とは、対照的な行動に思える。

五人の人に当時のことを聞いてまわったときにも、私はその日の幹生について、真吉と比べてあまりにも消極的なのが、腑に落ちなかった。

港まで走れば五分もかからない距離である。地震のあった時刻が正午の数分前で、昼時で火のまわりが非常に早かったにしろ、火事を避けるためにも出来る限り早く逃げるのが正解であろう。真吉の素早い行動と、その後の機転の利いた振る舞いには胸のすく思いがし、反対に、気の毒とは思っても、幹生に腹が立ったのだった。

ところが今回、旧家の箪笥の奥に残されていた彼の、長野の母親ミツに宛てたハガキに、「脚気もこのところ回復してきた……」とある記述を見つけ、ハッとした。三十四歳の若い幹生とはいえ、脚気であったのでは、と思ったのだ。敏捷な義父・真吉に比べると、婿・幹生があまりにも行動の遅いふうであった原因が、もしかしたら脚気のせいであったのかもしれない、と。

それは、幹生の生存にプラスになるような事柄では決してないのだが、それでも、いろいろな事柄の背後に、もう一つ見えにくいもの――体の好不調とか、気分の浮き沈み――などがあるのかもしれないと気づかせたのだった。

脚気で素早く逃げ出せずにビルの下敷きになった、あるいは延焼が早くて焼け死んだのかもしれない、という諦めのような気持が湧いて、よけい、段ボール箱に詰めた資料

を精査する意欲を失ったのだった。

そんな気持でいた私にとって、青空教室の日、末男さんに会ったのは、いいようのない衝撃だった。

なぜ、祖父・幹生に似ているのだろう、と思った。

末男さんの顔は、私の父に似ているというよりも、一枚だけ残っている幹生の、仏壇にある写真の顔に似ていた。

写真の幹生はタキシード姿で口髭を蓄え、まだ三十歳前後の、りりしい姿であるが、その目許や鼻筋が、私の絵を覗き込み、どうぞスケッチをつづけてください、と促して去っていったあの男性、末男さんにほぼ重なる。

他人の空似なのかもしれない。彼と出会った場所が、幹生とチヨの家があった場所で、彼の、父親に連れられてここへよく散歩にきました、という話から浮かんだ、もう一つの幹生の姿であるかのように。しかし、幹生が生き延びた可能性はほとんどなさそうだ、と、脚気のせいにして済ませていた私を、もう一度調べ直す気にさせたのは確かだった。

青空教室の翌月、私はふたたび横浜へ向かった。

みなとみらい線に乗り換え、「馬車道」で降りる。目指したのは、神奈川県立歴史博物館、旧横浜正金銀行本店である。

関東大震災の日、幹生がここの地下室に逃げ込んだ可能性はないだろうか、とふと考えたのだ。

真吉や幹生が、当時この銀行とどんな関わりがあったのかはわからないのだが、チヨの末弟・修の話の中に、チヨたちが大磯の実家にいた時分、幼かった私の父・健が、「正金銀行」といえず、何度教えても、「ちんちん銀行」といっていた、など、この銀行の話題が出たり、「幹生さんは、船会社ではなく、てっきり、正金銀行にお勤めになっていたのかと思ってました」と、チヨの親友だったお蔵さんにいわれたりしたのを思い出し、ともかく一度訪ねてみようと思ったのだ。

博物館は、いかにも明治の建築らしい重厚なコンクリート三階建てで、多くの建物が倒壊した関東大震災でも残ったのだ。ただし、印象的な尖塔を持つドームは焼失し、戦後復元されたものだという。

博物館の二階に、関東大震災の記録を伝える部屋があった。高島町にあった二代目横浜駅の大時計が、地震が起きた正午少し前で止まっている当時のパネル写真が飾られていた。

案内係の男性に尋ねると、ここの地下室は、銀行だった当時は金庫室でした、と説明してくれた。

関東大震災の当日、銀行の一階から三階までが、ドームから入った火の粉によってすさまじい火事になり、行員た

ちは全員、この地下の金庫室に避難して、防火扉を閉めた。しかし、扉を閉めたため、銀行内に避難しようと集まってきた市民が中に入れず、百四十人もの人が銀行の玄関前で焼け死んだ、という記録があるという。地下室だけが火災にやられなかったのだ。

果たして、幹生はこの地下室に入れたのか。入れず、外で火煙の犠牲になった人々の一人だったのか。それとも、どこか違う場所へ逃げられたのか。

震災の直後に撮られたという白黒のパネル写真を、一枚ずつ見ていった。すると、ほとんどが焼け野原のような中に、この銀行の、斜め前ぐらいの場所に、白いビルだけがポツンと残っている写真を見つけた。勢い込んで、この建物は、と聞いてみると、案内(ガイド)の男性が、いまだに、このビルがどういう会社のどういうビルなのか、わからないのです、と残念そうにいった。この後建て直されたかして、わからなくなってしまったらしい。

一階に降りて、売店で震災に関する本を調べてみた。

山下町、山手町、元町など、それぞれの町ごとの被害を調べた綿密な記録もあった。人々の記憶が薄らぐ中、そのときの証言は貴重だ。それでも、個々の人の姿まではなかなか浮かび上がってこない。

博物館を見学した後、開港記念館や開港資料館、日本郵船博物館、さらに横浜市役所の情報室などをまわって、最後に山下公園に行った。

そろそろ夕方で、目の前の氷川丸に灯りが点り始めていた。幹生がもし正金銀行の地下室にいたのであれば、と思ったのだが、行員でない人がその中に入れた可能性は少ないようだった。

幹生の生存を裏付けるような史料は、もはやどこにもないのかもしれない。あとは、あのスケッチの場所に行き、いつ現れるかわからない末男さんを待つ以外ないのかもしれない。どこに住んでいる人かはわからないが、もう一度出会える可能性がまったくないわけではないだろう。

しかし不思議なのだが、あの日の出会いを、そっとそのままにしておきたいような気持もどこかにあった。

私の空想の中で、幹生は生き延びる。煙に巻かれ、息も絶え絶えになりながら、火傷を負ったかもしれない、足を怪我した、あるいは気を失ったかもしれない。しかし、彼は生き延びるのだ。

彼の蘇生に力を尽くしたのが、妻のチヨではないもう一人の女性であったとしても、誰も咎めるわけにはいかないだろう。

脚気である幹生が煙にまかれながら、地割れができたり瓦礫で道が塞がれたりしている間を逃げていく。

彼の手を引いているのが奈美子だ。正金銀行の窓口係の女性である。

幹生は土曜日のその日、昼までの勤務だったので、正午少し前に会社を出て正金銀行へ向かった。窓口にいる奈美子にいつもの合図をし、馬車道のほうへ歩き出した。ちょっと味のよいスペイン料理の店があり、そこで昼食をともにしようとしたのだった。

二人は半年ほど前、その店で出会った。というか、店が混んでいて、相席でもよいかと店員にいわれたのがきっかけで、それから何度か同じ店で食事をしたのだった。

幹生のいるビルの五階には、妻の父・真吉の事務所があった。だから幹生はときおり誘われて、昼食をご馳走になるのだったが、その日は約束をしていなかった。

八月の旧盆に幹生は長野に戻り、いつものように盆の行事を養母のミツと務めたのだが、チヨのほうは、三人の子を連れて汽車の長旅は無理だろうと真吉が反対して、その頃から大磯の実家に帰っていた。次男の剛史が七月末頃熱を出し、八月に入っても微熱がつづき、看病疲れでチヨも一息つきたかったのだ。

で、お盆のほうは幹生が一人で行き、ミツと滞りなく送り盆も済ませたのだが、横浜に戻り、仕事に行くようになっても、チヨと子供たちが大磯から帰ってこない。

一週間前に迎えがてら大磯まで行こうとしたら、今度は長男の健が扁桃腺炎で高熱を出し、もうしばらく動かさないほうがいい、といわれてしまったのだった。

もちろんこちらにも、真吉の配慮で女中の時さんがいたし、八月末になり、チヨの妹でこの家に寄宿している芙由子も、女学校が始まるから、と戻ってきていたのだが、幹生にしてみたら、半月以上も里に行ったきり戻ってこない妻・チヨに、不満があった。今朝も、九月一日なので合着の背広に着替えていきたい、と時さんにいうのに、まごつくだけで用が足せなかった。義妹に腹立ちをぶつけても、と思いながら、つい不機嫌な顔で幹生は出勤したのだった。

そのせいもあって、義父が五階から下りてきて自分を昼飯に誘うようなことがあったら、いやだな、と思った。そうなる前に、と一足先に会社を出た。ふと、奈美子を誘って昼を食べようか、と心が動いたのだった。

しかし、馬車道へ向かう途中で地震に襲われる。激しい地鳴りと突き上げるような揺れで、周りの建物が一瞬のうちに崩れていき、すぐあちらこちらから火の手が上った。

幹生は正金銀行を振り返った。三階建ての建物は倒壊していなかったが、ドームから黒煙が噴き上がっていた。道路の敷石がうねったように盛り上がり、亀裂が入り、方々からの火煙に人々が逃げ惑っていた。

立ちすくんでいるうちに、路地の奥のほうから火の海が押し寄せてきた。昨日通過した台風の余波の強風で、火の

勢いはさらに増していった。

幹生は火煙に巻かれ、路上で倒れてしまった。気がついたときは、奈美子に手をとられ、足を引きずりながら歩いていた。

息が苦しく、どこを歩いているのかわからないまま、煙を大量に吸い込んだせいなのだろうか、次第に意識が薄れていった。奈美子が自分を呼ぶ声が遠のいていく。

目覚めたとき、幹生は見知らぬ納屋のような部屋に一人で寝かされていた。あとでそこは奈美子が祖母と住んでいた家の、潰れなかった離れの建物で、すでにあの地震の日から五日が経っていると知らされる。

幹生の記憶は途切れていた。頭が重く、考えようとしてもあの日より以前のことが浮かんでこない。妻と子供たちの姿がぼんやりと蘇るが、住んでいた自宅の場所すら思い出せない。会社はどうなったのか。

奈美子が幹生を、自分と祖母が住む家に連れてきて看病し、そのまま匿ったのは、なぜだったのだろう。軽い記憶喪失となり、顔と体に火傷を負い、面変りした彼に同情したのだろうか。彼の家が焼け落ちて、会社のあったビルも跡形もなく倒壊したのを病人の彼に隠すため、あえて彼の生存をどこにも名乗り出なかったのだろうか。

わからないことだらけであるが、奈美子はその地で幹生と暮らし始めるのだ。

幼い頃、両親が死んで祖母一人に育てられた奈美子は、幹生と同い年の三十四歳で、すでに婚期を逸しかけていたが、長年しっかりものの行員であったせいか、逆境に気丈だった。震災後急に体が弱り、入退院を繰り返すようになった祖母と、幹生と、二人の世話を独りでしながら、祖母の営んでいたささやかな喫茶店を再開する。

やがて、奈美子の祖母の死など紆余曲折を経て、幹生はこの店のマスターとなり、奈美子を助けて働くようになる。

火傷した足を軽く引きずり、頬にもかなりの引き攣れの痕が残っていたが、そんなことを忘れさせるようなえくぼに愛嬌があった。深くかぶったベレー帽が案外似合い、無口だが、丁寧な仕事振りで、常連客に人気があった。

震災から三年ほどして生まれた息子をかわいがり、散歩のたびに連れて行く。港やその向こうの公園まで歩いて行き、町が少しずつ活気を取り戻していく様子を眺めるが、なぜか、あの日以前のことは話そうとしない。馬車道の辺りには決して足を向けない。迂回するように道を選ぶ。

あの日の記憶があるのかないのか、散歩に出かける二人を見送りながら、奈美子は夫の心をはかりかねた。

当初、火災で焼け死んだと思っていた幹生の妻子が、大磯の実家に行っていて無事で、逆に、幹生の行方を探していた、と聞いたのは、奈美子が、銀行に勤めていた頃同僚だった恒子に、道で呼び止められたときだった。

四方山話の後、自然あの日の話になり、幹生の弟だという人が銀行に尋ねて来た、という話を恒子がした。

幹生が、あの日の正午少し前に、銀行に行く、といって会社を出たとかで、だから銀行の地下室にいたのではないか、と尋ねて来たのだという。しかし、その中に彼はいなくて、結局、地下室に入れず玄関前で焼け死んだ人々の中にいたようだとなって、地震から一と月近く経って、身元のわからなかった三人の中から、所持品や体格で彼に違いないとなった遺体を、彼の弟が引き取っていった、という話をしたのだった。

奈美子は黙って恒子の話を聞いていた。

「みんな死んじゃったねえ」

恒子がしんみりといった。同僚の中にも家族が全員死んでしまったり、家が焼けてしまったり、という人が何人もいるという。

達者でいてね、と励ましあって別れた。

幹生と一緒に暮らしながら、そして今では末男が生まれ、親子三人水入らずの毎日であるのに、奈美子にはいまひとつ夫のほんとうの気持が掴めないような、もどかしさがあった。

失っていた記憶は徐々に戻ってきているように見えた。しかし、思い出しそうになると、無理やり顔を捻じ曲げ、忘れた振りをするようにも見えた。

新聞に、横浜の復興記念大会の記事が載っていたときだった。

山下町の、震災当日の光景と現在の状況の写真が、紙面に並んで掲載されていた。それを食い入るように見つめていた幹生が、ふいに新聞を閉じて押しやったのだ。何かに苛立っているように、立ち上がってすぐ玄関から出て行った。

奈美子は、ひそかに幹生の妻子について調べていった。住んでいた山手町の住まいは、隣家からの延焼で焼け落ちて、今はもう他の人の所有になっているとかで、瀟洒な洋館が建築中だった。

大磯のチヨの実家についても、幹生には内緒で住所を調べ、ある日、そこまで一人で行ってみた。

駅から五分ほどの、坂道の途中にある大きな屋敷だった。チヨらしい人が、小学生ぐらいの女の子と芝生の庭で草むしりをしている姿を垣間見た。チヨの、たおやかな姿に、気が引けた。訪ねていき、幹生の消息を伝えようとした気持が萎えた。いや、ほんとうにそう思っていたのかどうか、奈美子は俯いて駅へ戻ろうとした。

途中で、幹生に似た男性が二人の少年を連れて歩いてくるのと擦れ違う。

男性が、庭にいるチヨに向かって、姉さん、坊主たちと飛び込み台まで競争しましたよ、という声を聞き、ああ、

と思う。声も幹生に似ていたのだ。

お母さま、ぼく、一人で行けたんだ、と、小さいほうの少年がいうと、大きいほうの少年がすぐ、違うだろう、滝おじちゃんに背中に乗せて連れてってもらったくせに、といい返した。

奈美子は、駅へ急ぎながらつい後ろを振り返る。チヨと滝男のまわりを二人の少年と一人の少女が囲み、小さいほうの少年はいつの間にか滝男の背中に飛び乗り、肩車の格好ではしゃいでいた。

奈美子は、心の中で自分に問いかける。

隠しているわけではない。成り行きに任せよう。あちらが調べて、私のうちにたずねてくるのなら、それでもいい。でも、私のほうから名乗り出るのはよそう。何が幸せであるか、わかりはしないのだ。もしもあの日、地震が起こらなければ……。けれど、誰もが予想もしなかったあの大地震はほんとうに起こってしまったのだ。

なるようにしかならない。そう自分にいい聞かせ、いや、今の幸せを失いたくない、と思わず立ち止まって空を見上げた。これが自分の正直な気持ちだと気づく。

桜木町と大磯町とは、電車なら一時間もかからない距離である。しかし、死んだとされた幹生が奈美子と新たに家庭を持ち、二人の間に生まれた息子・末男を育てていく——そんな可能性がゼロではなかったのでは、と私は思う。人は知ろうとしなければ、隣に住む人の生死もはっきりとはわからないものだから。

とはいえ、幹生が生きているという噂を聞いて、調べに来た人があったかもしれない。

弟の滝男である。東京の新聞社に勤めていた彼は、ある日、取材先でひょんなことから幹生の噂を聞く。桜木町にある喫茶店のマスターが、幹生さんによく似ていると。

滝男は驚愕する。彼は、兄の幹生を兄弟の中で一番好いていたし、幹生も一番可愛がってくれていたのだ。大学生の頃病弱だった滝男のために、山手町の自宅にしばしば呼んで夕食を振舞ってくれた。軽く胸を患い、滝男が入院したときには、チヨを見舞いに寄こしたり、わざわざ看護婦を自分でつけてくれたりした。

滝男の病が癒え、就職したときには、盛大な祝いの座を設けてくれた。

その兄が、あの震災で行方不明となり、やがてチヨの父・真吉の尽力で、身元不明の死体の中から、この人に間違いない、と見出されたとき、滝男は号泣した。すでに形が崩れ、かろうじて男女の判別しかできないほどの体にすがりつき、なりふり構わず泣きつづけたのだ。

チヨの気持を慮って、真吉とともにすぐ荼毘に付し、お骨の形にして大磯に届けた。その折にも、滝男は顔を上げられなかった。チヨのほっそりした体が微かに傾き、一瞬自分を恨めしそうに睨んだ目が痛かった。

兄嫁と、残された甥と姪のためになら、滝男は何でもやるつもりだった。チヨに笑顔が戻ってくるのなら、どんな苦労も厭わない、と思った。

自分の愛をチヨが受け取ってくれるなら、滝男はすべてのものを投げ出しても惜しくない気がした。

はじめてチヨに会った大学生になった日、兄の家を訪ねたその日から、自分が彼女しか目に入らなかったと気づく。どんな仕草もどんな表情も、愛おしく、可憐で、勉強が手に付かなかった。彼女の夫である兄・幹生が、ふと憎く思えた瞬間すらあった。滝男は、兄の家を訪問するのを遠慮しようとした。

実際、あの震災の年の春から夏、滝男は一度も山手町を訪れなかった。

だからか、兄が地震で死んでしまうと、滝男は兄に償いたいような、ほんの一瞬でも兄を憎んだのを悔いる思いがし、いや、それ以上にチヨへの想いが溢れて、滝男はどんな役回りも進んで引き受けたのだった。

健や郁、剛史の父親代わりになって、毎週のようにあちこち連れて行き、遊んでやった。

チヨが大磯の実家に世話になりながら、母親の登米とは余りうまくいってないらしいのを見て取り、はらはらしたりもした。

あの震災の日からすでに七年余りが過ぎていた。

兄・幹生の七回忌も、昨年の命日、九月一日に盛大に行われた。長兄の計らいであったが、真吉の意向を聞いて、招待客を予定の三倍ほどに増やしたのだった。

チヨは三十三歳となっていたが、少し憂いを含んだ美しさは、以前よりも増していた。一歳年下の滝男には、喪服姿の兄嫁が眩しかった。自分にも縁談の話があれこれあったが、ひそかにチヨを想う滝男は、頑として見合いの話は断わっていた。幹生の遺児たちは十一歳、十歳、九歳になって、皆、滝男を慕っている。そろそろ健の中学受験を考える時期になっていた。

兄が生きている。ほんとうだろうか。

驚愕のあとに、滝男の胸に広がったのが戸惑いであったとしても、仕方ないのではないか。

まさか、と信じられない気持で、しかしすぐその話の真偽を確かめようと彼は行動した。

奈美子の店を人伝に聞き、訪ねたのだ。だが、実際に滝男が奈美子に会えたのか、そして兄・幹生に再会できたのかは、はっきりしない。どこにもそれを裏付ける記録はないし、もし会えたのなら、その後、チヨと三人の子供たちの生活に大なり小なり関わってくるはずなのに、それは何もないのだ。

いや、そうとは言い切れないかもしれない。というのはその一年後、チヨは三人の子供たちとともに大磯の実家から長野へと、慌ただしく転居するのだ。

表向きの理由は、幹生の義母ミツが高齢となり、せめて孫の健だけでも長野へ戻してほしい、健の中学受験・進学は長野でするように、幹生の母校であるのだから、と再三真吉に申し入れがあった。で、いくら幹生の故里でも一度も暮らしたことのない地に健一人をやるわけにはいかないと、チヨが一大決心をして実家から婚家へ戻る、といってもすでに幹生は亡くなっていたわけだが、そこへ行く決心をした、というのだった。

だが、そこにはもう少し複雑で、微妙な事情が絡んでいたように見える。

まず、養母のミツが強硬に健を長野へと主張し、ついに渋っていた真吉もやむをえないと判断する。確かに、チヨと母親との根深い不仲、そしてチヨのすぐ下の弟つまり真吉の長男の結婚が間近に迫っていた、などはあったようだ。だから、この時点でチヨは二つのことを断念したようにも見える。

一つは、沢井の家を離れての再婚である。幹生の葬儀のとき、チヨには三人の子がいたとはいえ、まだ二十六歳の女盛りであったから、大磯の実家に戻って他家に嫁入りしてかまわないというように、幹生の墓碑銘はあえて真ん中に作られたのだという。

しかし、チヨはその後八年間実家で過ごし、結局、婚家に戻る。戻るといっても一度も暮らしたことのない長野の、夫のいない家へである。並大抵の決心ではなかっただろう。それはまた、大磯には住まない、という決心であったはずだ。長年住み慣れた湘南の温暖な地から、冬は零下十度にもなる気候の厳しい地に移るのだ。これも相当に覚悟の要ることだったろう。

それにしても、今と違って汽車の旅は長くかかる。父親の真吉にとって、一番のお気に入りの長女とかわいい盛りの孫三人との別れとなるのだ。どのような話し合いが滝男との間であったのだろうか。

つまり、ここで滝男の、なにがなんでもチヨたちを長野へ連れて行く、という強い意志――依田家のさまざまな事情に、さらに真吉を説き伏せるほどの決意――が感じられるのだ。転居を急がざるを得ない理由があったように私が思うのは、うがちすぎ、考え過ぎなのだろうか。

ともあれ、滝男はここで八面六臂の活躍をする。

彼は前年、長兄から長野の会社の一つを任せられ、仕事も住まいも長野に戻していたのだが、これも考えようによってはチヨたちを迎える準備のように見える。

滝男が、それこそ針箱の針の数にまでこだわって転居のための用意万端を整えた、という話が伝わっている。

そうやって、チヨたちは長野へ行って暮らすことになった。

もちろん、子供たちが一番なついている滝男のそばに行くのは自然であったのかもしれないが、チヨの妹・志津子が、「依田の家の者は皆、チヨ姉さんは滝男さんのもとに嫁ぐのだろう、と思っていたのよ」と洩らしたのも、この成り行きでは当然のように思える。

その数年の、チヨたちが長野へ移る変化と、奈美子と幹生の家庭がどう交錯したのか、あるいは一切交わることはなかったのかは、もはやわからない。

だが、ひょっとしたら、滝男は奈美子だけには会っていたかもしれないと私は思う。

幹生には会えなかった、あるいは人違いだといわれ、会わせてもらえなかった、あるいは、ようやく会えた幹生があまりにも様変わりしていて昔の記憶がなかった、などさまざま考えられるが、少し前まで新聞社に勤めていた滝男なら、何らかの情報を掴んでいたような気がする。しかし、それら一切を自分ひとりの胸におさめてしまったようにも思う。

それが何のためであったかはわからないが、一度死んだ人間がふたたび出現してはいろいろまずいのは想像できる。それよりも、もし幹生の側で頑として否定したら、今さらどうしようもなかったようにも思える。八年という歳月はそのくらい長く、重いはずだ。震災の年に三歳だった健が、中学生となるほどの年月、いや、奈美子の産んだ幹生の子・末男が、もうすぐ小学生になる事実は、滝男の口を固く閉ざさせるほどのものだったのかもしれない。

年表ふうに事柄だけを追うと、長野に転居したチヨと子供たちには穏やかな日々がつづく。

経済的には、幹生の兄弟の援助があったとはいえ、相当切り詰めた生活がつづいたらしい。お嬢さまだったチヨにとっては、馴れない農作業は相当こたえたことだろう。高齢となった姑・ミツの世話も大変だっただろう。

しかし、健につづいて郁も女学校に入学し、剛史も二年後に健と同じ中学に入り、チヨはようやく子育てが一段落したのだろう、娘時代に習っていた書道の稽古を再開している。地域の婦人たちの集まりにも参加し、持ち前の活発な明るい気質がようやく戻ってきて、誘われて子供たちを連れ、あるいはお蔵さんたちと、泊りがけで温泉に行ったりする。還暦をすぎても相変わらずまめな真吉は、孫たちを訪ねてたびたび長野へ来た。自分も一からスキーの技術を習い、孫たちにもスキー道具一式を買い揃えてやり、チヨや孫たちを連れて志賀高原にスキーに出かける。そうした折々の様子も、旧家に残されていた彼の手紙類からうかがえる。

滝男が結婚するのは、そうやってチヨたちが長野で生活をし始めてから五年後のことである。

長兄の知人が紹介した見合いで、新婦の好美は、滝男より十三歳年下の商家の娘であったという。夫婦仲は良く、娘一人と息子二人が生まれる。その下の息子が、私に滝男について語ってくれた隆である。

結局チヨは、義母のミツを看取った後も再婚はせず、九十一歳で亡くなるまで長野の地で暮らしたのだ。

なぜ再婚しなかったのか、ここまで辿ってきた流れからすれば、なぜ滝男と再婚しなかったのか、となるはずだが、それについて、隆に聞いてみたことがある。チヨが滝男のもとに嫁ぐと思っていた、という志津子の話をぶつけたのだ。すると——。

「チヨおば様と父の間柄？　うーん、それはもう兄嫁と義弟という関係だったと思うけど。僕はまだ生まれてなかったし、後になって人の噂で、父が幹生さんの亡くなった後、おば様に結婚を申し込んだなどという話を聞いたことはあるが、それは、万事にまめな父が、お気の毒な兄嫁を下にも置かず大事にするのを、やっかんでの作り話だと思う。なぜというと、おば様はうちの母・好美と仲がよくて、母の愚痴の聞き役がおば様だった。父はよく気のつく人だっただけに、家では小うるさくて、母は気苦労が多かったから、おば様に愚痴をいっては慰められていた。そんなふうだったから」と。

好美はチヨを「お姉さま」と呼んで頼りにし、夏には一緒に旅行をしたり、自分の体の具合が悪いときに隆を預けたりしたのだという。隆は、チヨおば様の家に行くのがとても楽しみだった、と懐かしそうに語ったのだった。

チヨの親友だったお蔵さんは、「チヨさまの口癖は、結婚はもうこりごり、でしたもの」と語った。

「私に目をかけてくださったのも、私が亭主と別れた出戻りで、同じように結婚はもう二度とすまいと思っていたせいがあると思います。幹生さんのことはめったにおっしゃらなかったけれど、いつだったか温泉にお供して、二人で少しばかりのお酒に酔ってしまったとき、はじめて地震のときのお話をうかがいました。

『あの日の三週間ほど前、些細なことから言い合いになって、どちらも腹の虫がおさまらず、私は子供たち三人を連れて大磯に帰ってしまった。実家といっても母とは昔から気が合わず、妹や弟は赤ん坊をうるさがるし、居心地は良くなかった。けれど、あの人が迎えに来てくれなくちゃ、と意地を張っていた。ところがあの人のほうも、あの朝、合いの背広が見つからないと、機嫌の悪いお顔で出かけたと、後で妹にいわれた。

合服は、箪笥の一番手前にすぐわかるように入れてあった。あの人はそれをわかっていて、私が帰ってこないのを当てつけがましくいって、出かけられた。そして地震に遭って……。皆にはほんとうに運が悪かったと慰められたけど、私はどうしても納得できなかった。

それが、何日も考えて、気が変になるほど考えつづけて、ようやく気がついた。あの人のほうが、私よりよっぽど意地っ張りだったのだと。

あの人は、逃げようと思えば逃げられたのに、おれはここを動かんぞ、とまるで私を睨みつけるみたいに椅子にふんぞり返っておられた。そうに違いないと、ようやく気がついて、溜息も出なかったのです』

チヨさまのお話に息をのまれたようになっていた私にふと気づかれ、だから、もう、結婚はこりごりなのよ、と頬笑まれたのでした」

隆の話にもお蔵さんの話にも、チヨらしい一面が如実に表れていると思った。しかし、旧家の畑の世話をしてくれていた松田家の、ノブさんは、チヨと滝男との連綿とした繋がりを、ごく自然なこととして話したのだった。

ノブさんの、朴訥とした語り口がいまだに私の耳に残っている。

「チヨ奥さんがお子さんたち三人を連れてこちらに住まわれるようになって、私はよく留守番を頼まれました。婦人会のほうで温泉に行くことになったとか、大磯のご実家にも、お子さんたちを置いてお一人で帰られたり。それが後になって、そういえば、と腑に落ちたのです。

たまたま私だけが奥さんと家にいたときでした。私は隣町の会社に勤めだした頃でしたが、何かのお休みだったのでしょう。お子さんたちがそれぞれ学校へ行っている昼過ぎに、ふらりと滝男さんがいらして、すると奥さん、すぐお二階に案内されて、お勝手でお茶の用意を始めた私に、それは自分がするから、その代わり、銀行へ行く用事をしてきてといわれて、私はまだ二十歳前の小娘でしたが、ハッとしました。

奥さんがお茶を持って階段を上がってかれる背中がなまめかしいというか、おきれいなお顔やうなじがほんのり上気されているというか、私はわざとのろのろと用事をして帰った覚えがあります。

滝男さんとは、それはもうずっとつづいてらしたのだと思います。いえ、あちらの奥さんがご病気がちだったことは、関係ないと思います。もっと深く結ばれていらしたと……。だからといって、決して噂したりはしませんでした。今始めてお話したのですが……。

奥さんは若い頃未亡人になられて、ほんとうにお気の毒だとどなたもおっしゃいました。でも、八十歳を過ぎても

あんなにみずみずしく、女らしくていらしたのは、身も心も満たされてらしたから、と私は思っております……」

ノブさんの話を聞いた当座は、信じられない思いで少なからず反発を覚えた私だったが、還暦をすぎた今は、あるいはそうだったのかもしれない、と、不思議な共感を持って受け止められるようになってきた。

一番身近な、近しい人に遠慮する、という質を、チヨと滝男について感じたのだ。

親しければ親しいだけ、その人に気遣いをし、あえて踏み込まない、遠慮してしまう。親しき仲にも礼儀あり、というのとは違う、むしろ、やっかいな質かもしれない。それを、私自身から遡って、チヨの滝男に対する、あるいは滝男のチヨに対する、そして二人の、幹生に対する心根に感じるのだ。

もちろん、幹生が生き延びたと考えるのは、私の空想であるが、チヨと滝男の、あえて結婚を選ばず、以後六十年近く、ひそやかに、熱を孕みつつ交流をつづけた——というノブさんの話を突き詰めていくと、二人の幹生に対する遠慮がそうさせたように思えるのだった。

そうして、幹生という人もこの、一番身近な人につい遠慮する、やっかいな質の人だったような気がする。

チヨに対する遠慮、あるいは奈美子に対する遠慮が、私の目に浮かぶ。そんな遠慮などせず、何でもおっしゃってください、と二人が同時に叫ぶような気さえする。

しかし幹生は——一度も会ったことのない私の祖父は、両頬に軽くえくぼを刻み、いやあ、まあ、別になんでもないよ、と口を濁し、そそくさと散歩に出かけてしまうに違いない。

私は今、五月に来た横浜山手のスケッチポイントに立っている。

十一月十日、幹生の誕生日で、幹生とチヨの結婚記念日である。チヨの父親・真吉の、手書きの「結婚式覚書」の冒頭にあったこの日なら、末男さんに再会できそうな気がしたし、あのとき、彼がいった櫨の木の紅葉も、真っ盛りのような気がしたのだった。

しかし、細い坂道を期待と不安でおそるおそる下りていき、あの日のスケッチポイントに立つと、櫨の木の紅葉はすっかり終わって、寒々とした裸木になっていた。

これでは末男さんに会うのはとうてい無理だ、と張り詰めていた緊張が途切れた。

犬の散歩で坂道を上ってきた人に聞いてみると、今年は例年より早く、櫨の木の紅葉は一週間ほど前が盛りだった、と気の毒そうにいわれた。そうですか、と道を譲って、それでも諦めきれず、五月に描いたあの無人の洋館と木を眺

めつづけた。

実はあの日、中途半端で描き終わらなかった絵は、家でもう少し手をいれたのだが、どうにも気に入らなくて、水で洗って乾かし、鉛筆デッサンの状態に戻してしまった。今日、紅葉が見頃だったら写真を撮ろう、とカメラをバッグに入れてきたが、やはりそんな安直な方法ではまずいのだろう。

ふと、チヨに連れられてここに来たときにも、紅葉はなく、あんなふうな裸木でとても寒く、それでよけい、早く、と私はぐずってチヨを困らせたのだ、と思い出した。

少し気が楽になり、今日会えなくても、またいつかここにスケッチに来ればいい、そのときには末男さんに会えるかもしれない、と思った。

しばらく見ているうちに、もう少しあの家に近づいてみたくなった。今日はかさばる絵の道具を持っていないし、どこかに道があるはずだ、と坂道を下り、あの洋館に近づけそうな小道を探した。

坂道から左手に曲がり、くねくねとした簡易舗装の道を行くと、「この先抜けられません」という標識があった。だが、きっとこの辺りだ、と霊感に導かれるようにさらにその先へ進んでいった。

思ったとおりだった。狭まっていく道の先に、あの洋館のアプローチが現れたのだ。背中に小春日和の日差しが当たり、鳥の囀りに足元を見ると、雀が数羽、枯葉を蹴散らしながら陽だまりで砂浴びをしていた。

洋館が、眩しいほど照り輝いて見えてきた。いや、洋館のすぐ脇に、ここの景色をそっくり納めたような大きな絵が立てかけられてあったのだ。

我を忘れて、小走りになって絵に近づいていった。

私が描こうとしたのと同じ、坂道から見た構図で、家と木がバランスよく描かれていた。

その絵はしかし、私が描こうとした絵と微妙に違って見えた。門から玄関までつづく色とりどりのバラのアーチと、その下でバラの手入れをする女性の、後ろ姿に目がいくせいかもしれない——。

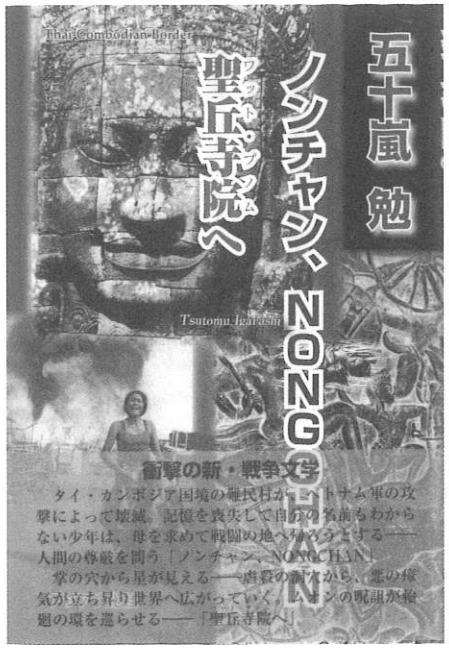
白日夢のような光景が不意に消え、目の前に有刺鉄線の張られた杭が現れた。そして、荒れた庭を挟み、その向こうの、今にも崩れそうな洋館の壁に、裸木の複雑な影が濃く落ちていた。

「狐火」19号より転載

澤つむり

さわ　つむり

1949年新潟県生まれ
父の転勤に伴い、各地に転居
十代後半から埼玉県に居住
早稲田大学文学部卒。三十代から小説教室に通い、同人誌「まくた」ほかに所属
2001年、友人たちと同人誌「狐火」を創刊
以後、「狐火」の同人として作品を発表、現在に至る



アジア文化社　1836円（税込）

アジア文化社　1836円（税込）

故駒田信二の薫陶を受ける

狐火（きつねび）

埼玉県

元「まくた」のメンバー六人で発足

「狐火」同人会はごく小さな集まりで、故駒田信二先生の元「まくた」のメンバー六人で十五年前に発足しました。二〇〇一年四月に創刊号を発行、二〇〇五年の一〇号まで年二回発行しておりましたが、その後は年一回となり、二〇一四年の一九号まで現在に至っております。

現在、仲間は準会員を含めて八名。例会や勉強会などはなく、合評会のみ行なっております。

編集後記の一部を紹介して、私どもの流れや、書く立場などを見ていただけましたら幸いです。

「野島千恵子さんが書いた『駒田信二の小説教室』（文藝春秋社1981年刊）と駒田信二先生自身が書いた『私の小説教室』（毎日新聞社1981年刊）を約三十年ぶりに読み返した。小説を書くにあたって、現在でも貴重なアドバイスがたくさん集められている本である。とくに野島さんの仕事は、小説作法として長く歴史に残る名著だと想う。

両書を読んでいて、三十年前には線を引いていなかったところで、今回、大いに注目した項目があった。それは『地声で語れ』、『素顔で書け』という言葉だった。どうしたらそのようにできるかは、どちらの本にも具体的には書かれていない。しかし、こういうことはしない方がいいよ、という注意事項はたくさん書いてある。たとえば地声で語るといっても、野放図な表現になってはいけないとか、文章で気取るなとか、である。また、ぜひともやった方がいいこととして駒田信二先生の思想の核である複眼的思考の勧めが説かれている。

『何事を見るときでも、自分の狭い先入観にとらわれずに、その背景の広い部分までもとらえる目、そのもの全体をありのままの姿で深く見つめる目、それが複眼である』（野島前掲書）。それらをまもって書いていけば、地声で語り、素顔で書けるようになるのだろうか。

その人独特の作品世界を感じさせる作家はどうやって自分独自の表現を身につけたのだろうか。小説を書いていくと、作者本人の生活上での呼吸のリズムが文章に反映されるようになる。テーマが他の作家と大きく変わらないものであっても、自分なりの切り口を持つことによって作品世界は違ってくる。作者が独創性を出そうとすると、さらに自分なりの世界が現われてくる。創造性豊かな作品を常に書こうとすれば、独自の表現世界は必ず現われてくる、と

「地声で語れ」「素顔で書け」

信じたい。そのためには、とにかく長く書き続けることが必要である。

駒田信二先生は繰り返し語った『書き続けることが才能です』と。」

（一九号編集後記）

「近所の寺へ行く道に沿って、コスモスが咲いていた。満開はすぎているが、散歩の途中で寄ってみた。そこで寺の住職と出会った。そのとき『疎開した四十万冊の図書』の自主ドキュメンタリー映画に招待されて試写会に行ってきたと話してくれた。

一九四四年、四十万冊の本を疎開さして守った人たちがいた。当時の日比谷図書館館長が中心になって、二十数人が動員され、蔵書を選び、さらに民間人の蒐集している貴重な本を買い上げて、戦火を免れる場所へ疎開さすのだが、人手も戦地に取られ、当時の都立一中（現、日比谷高校）の生徒らによって、奥多摩（あきる野市）や埼玉県（志木市）の蔵などに預けられた。ちなみに、住職の蔵にも預けられたが、口外禁止とされてきた。

昭和二十年五月二十五日の東京大空襲によって、疎開出来なかった蔵書二〇万九〇四〇冊は図書館と運命をともにした。

映画になって、口外を許されたのか、住職の顔がとても誇らしげにみえた。

私は、雑多になっている本箱や、段ボールに詰めたままの本を資源ゴミに出すつもりでいたが、いま一度見直してからにしようと思った。本離れなどという風潮に左右されず、本を大切にしなければならないと、反省したところである。」

（一七号編集後記）

「三十年も前になるだろうか。ある小説教室に参加した。ぼくはそこで小説を書いた。その中で、三人掛けのソファを何気なく見つめていると、ソファの縞模様が動きだすという描写をした。これは実際に経験したことで、動くはずのない模様が上下左右に動くのに、びっくりしたことを材料にして書いた。ソファがおかしいとは考えられないので、自分の眼か脳がおかしいのだ。この種の体験は一度だけでなく、二、三度あった。印象が強かったので、小説の中に織りこんだのだ。その小説の合評が終わった直後だった。隣に来た女性がささやいた。女性は冊子の中のソファの模様がうごめくシーンを指差した。

『こういうことはね、このクラスに来ている人たちはほとんどの人が経験しているのよ。小説を書く人はどこか変なのよ』

動くはずのないものが動いて見えるような体験は、小説を書くような人は、皆体験しているのだという。本当にそうなのかは、ひとりひとり確認したわけではないからわか

「書き続けることが才能です」

らない。女性の指摘を、この教室は、悩みが多くて、小説を書くことになった人たちの集まりなのだという意味で、理解した。

精神の不安が強いことが、小説を書きたいという衝動の根源にあるとおもう。小説を書くということは自らの不安を文字の形で対象化することだ。客観的に視えるようにすることで、不安を自分で見つめることができるようになる。自分の不安の原因を確実にとらえられるかどうかはわからないが、その周辺までたどりつける可能性が高い。書いたものを評価してもらうことで他者の視線もはいってくる。それらをバネにして、さらに不安の根源を探して、自らをえぐりだす作業にとりくむことができるようになる。これはカタルシス（抑圧された感情や体験を言葉や演技にして外部に表出して心の緊張を解消すること）につながる。心の緊張が解けることで、元気になり、さらに、心の奥深くまではいっていこうという勇気が湧いてくる。小説を書くことの素晴らしさのひとつはそこにあると想う。」

（一八号編集後記）

「狐火」も誕生して早一五年、何とか十九号となりました。より多くの方に読んでいただき、率直なご意見ご批評をお寄せいただけたらと願っております。よろしくお願いいたします。

（営）

狐火同人会　〒341-0021
埼玉県三郷市さつき平2-2-2-605 朝倉方
☎連絡先 048・951・8619

「狐火」同人

同人雑誌優秀作

季刊午前 51号

トッカータとフーガ

井本元義

沢木が吉野由紀子から自宅へ呼ばれたのは、いくつかの台風が過ぎてやや秋めいてきた時だった。由紀子の夫は精神科のクリニックを経営している吉野修三という沢木の古くからの友人だった。

自宅を訪れるのは二十年か三十年ぶりだったが、沢木はあえてそれを真面目に思い出して計算しようとはしなかった。由紀子と会うのも十年ぶりだった。共通の友人の葬式で出会った時、彼女の表情の変わりよう、友人の死の悲しみではないその表情、やつれにショックを受けていただけに、その日自宅で沢木を迎える彼女の変化に不安を感じていたからだった。三十年も前の彼女に会えるわけではないのだ。あるがままに対処していこう、それが沢木のその日の覚悟だった。

玄関を入ると、記憶にある新築の匂いとは全く異なった、生活臭と加齢臭が混ざって襲って来て、彼は急に疲れた。迎えに出た由紀子の眼には何の懐かしさもない、無表情の光しかなかった。それでも沢木は整えられていない髪の間から覗く、耳や頬や首の付け根を盗み見て、勝手にその眼に懐かしさを感じようとした。

自然な振る舞いをと気にしながら、やあ、お久しぶりで、という沢木に由紀子がかすかに微笑んだように見えた。生活に疲れた初老の普通の女だ、と気が緩んでしまいそうだったが、彼はあえて軽い気持ちのふりをしてそれを抑えた。ただ部屋へ案内する彼女のやや大柄な後姿の背中から腰のあたりの骨格と肉付きに昔の面影が残っており、それが沢木の胸を少し刺した。

家を建てたばかりのころ何度か訪問したことがある。夫婦とその食卓を一緒に囲んだこともある。ある時、由紀子が君にこれから家に来てほしくないと言うんだ、と吉野が申し訳なさそうに沢木に言うまでは。それで吉野との友情が切れることはなかったが、沢木は深い悲しみに陥った。それには秘密を他人に知られてしまったような恥ずかしさもあった。そこから抜け出すまでには時間と努力が必要だった。それももう昔のことだ。

部屋は何も物がなかった新築のころと比べて雑然としており、体に馴染んで深くへこんだソファと大きなテレビがその中心にあった。雑誌が方々に積み重ねてあるだけで広い居間なのにピアノ以外に特別の家具はなかった。掃除も行き届いているようには見えない。壁にはフランスの十九世紀の画家、クールベの「追われる鹿」の模写絵が濃い茶色の額で新築の時のまま掛けてあった。深い新緑の森を鹿が逃げて来ている様子が描かれている。吉野は絵の話になるといつもこれを持ち出すほど好きだった。その後はクールベの参加したパリコンミューンの話になったものだった。しかしその話ももうしばらくはしていない。

白く乾いた土の記憶しかない庭は雑草と雑木に覆われていた。その中で白萩がまるで噴水のように盛り上がって咲いていた。沢木が新築の時に贈ったものだった。それから時折りその花の話をすることもあった。

軒下を藤の蔓が少し覆い、奇妙な細長い実がいくつもぶらさがっている。何かのエッセイで、藤の実が音を立ててはじけ、ガラスを強く打った、というような話を読んだことがある。彼は今目の前でそれが起こるのではないかと目を凝らした。気分の変化を期待したからだったが何も起こらなかった。それよりもいつか吉野修三が話したことが思い出されて気分はまた沈んだ。ある朝その藤の棚に蛇の抜け殻が垂れ下がっていたということだった。そのままにしていたら小鳥が来て啄んでいつの間にかなくなっていたと。

由紀子は修三より十歳ほど下だったからもう五十も半ばすぎだろう。やつれ方は歳のせいばかりではないが、それでもちゃんと化粧などで整えればまだ美しさは残っていると沢木には思われた。由紀子の表情には悲しみよりもあきらめのようなものが占めていた。それは静かなものだった。そうしないと決めていたのに、いつか知らずに彼は昔の由紀子の美しさの名残を探そうとしていた。

話の内容はほぼ推測していたが、今の時点でどうしたらいいか、彼にはまったく考えがまとめられなかった。

吉野修三が福島へ行くといって家を出てから、もう三か月以上たっているということだった。しばしば彼は学会や旅に出かけたが二週間を超えたことはなかった。沢木が吉野に連絡をして一緒に昼食をしたりするのも一、二か月に一度くらいだったから、クリニックの事務員から聞いた時

も少しの心配はあったが深くは考えていなかった。

二年ほど前から吉野が度々福島に行くのを沢木は彼からいつも聞いていた。原発反対の集会の参加であることはわかっていたが、その運動に昔からあまりかかわっていない沢木に吉野は深く説明も誘いもしなかった。それにもう歳も七十歳に近くなって、四十年も前のようなエネルギーと力を発揮する中心人物として期待を得られるはずの状況でもなかった。

ただ沢木がある時インターネット上で一つのニュースを見た時にそれは納得できた。吉野が学生時代から深くかわっていたグループが福島に運動の拠点としての診療所を作るということで警察が注目しているということだった。吉野にそのことを伝えると、へー早いなと言うだけの簡単な反応で終わった。被ばく線量の身体検査と住民の精神的なケアーが主な仕事だと吉野は説明した。

また、「原発事故と命の絆を考える」という小冊子を吉野からもらったことはある。地元の元国鉄の労働組合での講演だった。自分が精神科の医者として、差別された社会的弱者と向き合って生きていることが使命だという主張から、放射能を心配して生きねばならない人々、巨大な社会機構に抑圧された人々、そこで生きていかねばならない人々と、われわれはどう向き合って一緒に生きていかねばならないか。具体的な経験を交えた講演は好評だったという。沢木にも内容はよく理解できた。

ただ、三か月も連絡がないと言うことは、事件に巻き込まれたか、表に出せないかなりの事情か、あるいは意識してこの状況を作っているかだろう。それでも吉野が出発する前に、もし三か月以上たって支障をきたすことがあったら、沢木に相談するようにと言い残していた、と由紀子から聞いた時、沢木は幾分安心した。こうなることの予想か準備をしていたのだろう。命にかかわるような問題ではなさそうだ。

診療所を閉じたいのですが、と由紀子は言った。

当然患者は今はいないし、一応医師会に報告はしている。それでも一人しかいない事務員と看護師が交代で診療所の留守番をしている。診療報酬の収入や家賃や事務員看護師の給与、薬やそのほかの支払いがどうなっているか由紀子が知っているわけはない。代わりの医者を臨時に雇ってしばらく続けるという発想はないのか。診療所を閉じるにあたっても役所にどうやって手続きをするのか。その前に吉野が了承するかどうか。勝手に由紀子の一存だけで決めて、それをそのまま自分が実行していいものなのか。また沢木は自分の部屋からここまで一時間以上かかることや、これからの自分の仕事、冬にかけての大学の講義や入試の準備などを思って一瞬嫌な気がしたが、頼られていることは悪い気でもなかったし、この町に来る別の理由もあった。閉

めるにあたってのおおまかな計画を簡単に頭の中で把握すると、そう難しそうでもなかった。

もうクリニックを始めて、三十五年くらいになりますかね、と沢木が聞いたのに由紀子は、さあ忘れたわ、と答えた。もうちょっと待ちませんか、に彼女はそうね、としか言わなかった。福島の診療所へ確かめてみます、それからまた考えましょう、と言って沢木は辞した。書斎を見せてください、と頼むのを言いそびれたまま。由紀子は部屋の出入り口まで見送ったが玄関までは来なかった。沢木は福島の診療所へ電話をしなければと思ったが、それが急に怖いことに思われて、そのうちにと考えて自分を安心させた。外は小雨が降っていた。その冷たさは冬の惨めな寒さを思いださせて沢木の気持ちをまた沈ませた。

沢木は野本という男を思い出した。吉野の高校の後輩で、もう何十年も吉野の弟分として彼の生活のそばにその位置を占めていた。年齢よりは随分若くがっしりしていた。吉野を崇拝しているというのか「僕は吉野先生の用心棒でして……」というのが彼の口癖だった。ちょっとした使い走りから、多分他人には洩らせない何かの事柄でもおそらく身を挺して働いていたことだろう。

吉野には人を引き付けるなにか知らない魅力があった。痩せぎすな体形だったが、身長はその日に会う者の気分で高くも低くも見えた。大した用事がなくても彼を訪れる者は多かった。彼はまた誰でも優しく受け入れた。患者にはそれは大きな救いであった。一人一人の患者にとって吉野は自分だけの医者だった。吉野にさらに深く自分の心を開き見せることがその生きる証であるかのようだった。吉野も真剣にそれを受け入れたがそれは医者としての義務以上に情がこもっているように見えた。沢木も時たま彼に会うことで、安らぎというか日々の雑事の中でちょっとした刺激を受けた。会っての帰りには自分の人生を俯瞰してみる癖がついて、その時々で悲観的にもなり楽観的にもなった。短時間でも日に一度はクリニックに顔を出す野本に沢木は会うことも多かった。それも長い付き合いになり、沢木は吉野の過去の事やその時々の問題を野本から聞くのだった。吉野が決して直接には沢木に話さないと思われることもあった。

野本は近くで社員が三、四人の小さな医科機材の会社を経営していた。吉野がクリニックを開業するにあたって野本はその会社を近くに作った。しかしクリニックだけでは商売にならないので、近くの医院を瞬く間にお客として開拓した。表面ではできない様々な便宜を請け負うことで小さな開業医から重宝され商売をしているようだった。

沢木は吉野由紀子から頼まれた仕事をするとなると、この野本に一働きしてもらわねばならないと思った。自分が

まとめの指示をするだけで彼がやりこなしてくれるだろう、彼は喜んで手伝ってくれるに違いない。

日々の雑事に追われて沢木がクリニックの様子を見に来たのは一ヶ月経ってからだった。事務員とも久しぶりだった。沢木を見ると安心して近頃の状況を話した。不安を訴えてきた患者も月とともにいなくなり、他は何の問題もなかった。その場から由紀子にその不在を願いながら電話をしたが、さいわい留守だった。福島の診療所への電話もしていなかったし、何の情報も得ていないし方策も考えていなかった。

野本に会うのが目的だった。会社の出入り口のガラスの引き戸を開けるとそこは倉庫兼事務室だった。天井の蛍光灯がやけに明るく、熱のこもった狭い部屋だった。ディスポーザブルの注射器や注射針の箱が積んであり、奥の棚には奇妙な金属の器具がぶら下っている。木製の机がカタログや書類に埋もれてばらばらに置いてある。野本は奥から笑顔で出てきた。いつも彼を見ると沢木はいい気持になった。クリニックの女の子から聞いていました、やあ教授、いつみえるかと待っていました、彼は手を差し伸べてきた。最初の頃、学生に教えるのが仕事だと言ったことがあったので、沢木を教授と呼ぶようになった。

どこかでコーヒーでもと言って野本が案内したのは、昔はよく見かけた、豆電球の点滅する安っぽい装飾の看板の「純喫茶」だった。この町はかつては工業地帯の中心の町であったが今はすたれてしまっている。このような店が残っているのも珍しい。ほかに客はいない。コーヒーも大して旨くない。

今日は時間があるからゆっくり相談したい、と沢木が切り出すと野本も内容は察していて、僕も待っていました、と答えた。

「奥さんが診療所を閉めたいと言うんでしょう、僕は反対ですがね。だれか代わりでも見つければいいんですよ、僕が探してもいいですが。あるいはそっくり誰かに貸すという手もある。家賃だけ払って、しばらく休院してもいい、大した家賃でもないし。でも奥さんがまだ捜索願を出していないのは、何か事情を知っているのは間違いないから、やはりそれもありかな」

確かにアーケードを抜けた街のはずれに診療所はあり、二階建ての雑居ビルでかなり古い。人通りも少ない。そこで三十五年が過ぎたのだ。そしてもう長い間、隣室は空いたままだ。

「第一に先生が帰ってきた時はどうするのですか。確かに連絡がないのは心配だが、昔もこんなことはありましたよ。四十年以上も前のことですよ。まだ先生がインターンのころの何とか闘争で、教授の論文盗作問題とか、何とか制度

反対とか、図書館占拠事件とか、覚えている人も少なくなって、政治問題もやったんでしょうかね、革命という言葉なども聞いたことがあります。デモ隊が暴れて交番が焼き打ちされたこともありましたね。先生はそこまで急進派ではなかったけれど、結局地下に潜ったということなのかな。最後は逮捕されていたということでしたがね。半年後、平気な顔で帰ってきましたよ。まさか今頃逮捕されることもないだろうけど、それだけのこともやっていないはずですが。いや、それもありうるかな。それでも連絡くらいあるはずだし。まさか今頃の中国でなかろうに。教授、あるとすればあとは福島の運動の中で知り合った誰か女性のところへ転がり込んでいる、うん、ありうる。まあ、診療所を閉めて片づけるのは簡単ですよ、その時は僕に任せて下さい、だからもうちょっと待ちましょうよ。それにしても僕にくらい、こっそり連絡があってもいいはずなのにな。いやそのうちにあると思う」

楽天的な野本の言葉に沢木は一つ気になっていることがあったが、口に出さないままだった。何日か前に見たテレビの内容がまさかと思いながら気がかりになって消えなかった。

ニュースは一つの不思議な出来事を告げていた。アメリカのある都市に一人の六十代の男が立っている。身なりもきちんとして旅行鞄を持っている。言葉も正確で動作にも何のぎこちなさもない。所持金は十分にある。レストランの支払いにもなんの不都合もない。しかしそのホテルに宿泊しようとしたときに、彼は自分がどこからきて何をしているのか全く分からないと言うことだった。当然自分の名前も住所も分からない。

テレビの解説者が喋っていた。これは精神統合失調症の一つの病状です。解離性遁走と言います。社会的地位もあり仕事も立派にこなしている人にも起こります。戦争中の恐怖や重圧や、事故とかで頭を強く打つ外的要因や、重い病気が原因であることもありますが、普通の生活でも起こりうる。心の奥にたまった深いストレスが、意識しないまま蓄積され、ある時これも意識しないまま遁走と言う形で静かに起こる。情動的な苦痛からの脱出、抑鬱の回避、新しい未知なるものへの解放の希望、そして放浪、突然だが、ごく自然に。そのあと回帰しても日々の不快感、羞恥、自殺願望、そして攻撃的衝動も起こります。

沢木にはまさか吉野がそんなことになっているとは思われなかったが、そうでないと言う根拠はまったくなかった。日ごろの付き合いから吉野にそれほどのストレスがあるとは思われない。医者自身の彼に病気のイメージはない。何かの外的要因からとすれば考えられないこともない。もしそうであればどこかで見つかって、テレビが放映するはずだ。

野本は喋り続けていた。のんきな男だと、沢木はちょっと嫌な気がしたが本人はまったく気にしていない。

「あの頃、世間では内ゲバと言っていましたが、対抗するR派と鉄パイプで殴り合っていましたね。片輪になったり、死んだのもいた。先生は身を隠していましたが、僕が用心棒でいつも傍にいました。先生は裁判を抱えていましたから、その日は出かけなければならない。裁判所の前でR派から襲われた仲間もいましたから。僕も裁判の日は緊張しましたね。送り迎えも車の追跡がないかどうか確かめて。まあ僕がいたからよかったかもしれませんけどね。先生は毎日牛乳を飲んでいましたよ。そんなに牛乳が好きですかと聞くと、ストレスで胃に穴が開く、これはそれを予防するためだって、そうなんですかね。僕にはけっこう楽しい時代だったけど。いや待てよ、いまごろ内ゲバで殺されたまま、行方不明ということも。いやそんなことはない。いやいやそんなことは」

野本も喋っているうちに心配になって来たようだった。頬が薄赤くなり目じりが少し濡れている。

「そう言えば、福島の診療所の周りを最近は私服警官がうろうろしているとも言っていましたね。先生が覚えている顔がいるって。このあたりでも最近見かける顔らしい。彼らは、変な言い方だけど、堂々と私服をやっていますからね。診療所の前の老夫婦のやっている小さなラーメン屋が、この頃はお客さんが増えて、この前など警察の方々が沢山見えて、とも喜んで言っていたと。先生、笑ってましたけど。診療所ははやっているのかな。一度来いと言われましたが、時間が取れなくてね。昔ほど物騒でないと思ってましたから。一度でも一緒に行っとくんだったな」

福島の診療所へ行ってきましょうか、と野本が切り出すのではないかと沢木は期待したが、彼は自分だけの想像に入り込んでいる。

「向こうの診療所もこっちみたいなものかな。先生は人気があるから。また沢山の患者さんたちに頼られて忙しいのでしょうね。そういえばこの前、道端で患者のKさんに会いましたよ。教授さんも知っているでしょう。ふらふらしながら、眼の焦点も合わないような顔で哀願されました、早くクリニックを開けてくれって。そして誰と誰は強制入院させられているらしいなどと。僕に言われても困るんですがね」

クリニックがオープンしてからの三十数年が沢木の頭をよぎった。開業にあたって吉野がこの町を決めたのは、街の中心から少し離れた古い二階建ての雑居ビルの家賃が安いからと言う理由だけではないようだった。患者が来院しやすいようになど、彼の方針で患者には様々な配慮がなされていた。八畳ほどのフロアーには周りに不釣り合いな

贅沢な皮のソファーがおかれ、横には畳の待合室もあった。深々としたソファーに何時間も満足げに座っている者や、畳部屋で黙々と弁当をたべる者。母親に連れられた不安げな少女や青年。声は大きいが要領のない話を繰り返す者。精神が不安定ということで職を失い閉じこもっている者。口を開くことも忘れたようなみすぼらしい中年の女性や身づくろいのしっかりした女性も。患者は大抵が大人しい貧しそうな人たちだった。彼らは決まった日に通院してきて、院長に話を聞いてもらい薬を貰って帰っていく。院長の優しさに触れて安心する。抱擁されたような名残で静かな残りの日々を送る。不安を抱いて毎日を送っているものもソファーにはゆっくり落ち着いて座っていることができた。そこは居心地のいい空間であり、生活のよりどころとしての柱だった。

年ごとに廃れていくこの街は、今は過去の面影がわずかに残っているだけだった。いくつもの地場の会社や商店は閉じられ人々の仕事がなくなる。そこではいわゆる社会的弱者が増えてくる。吉野はそれらの弱者の味方として、この古びた街で小さなクリニックを選んだのだろうか。それに満足しているのだろうか。野本と知り合ったばかりの頃、吉野がかつて激しい反体制運動の闘士であったことを彼から聞いて、沢木は少しは納得したものだった。ただ引退した闘士の静かな仕事だろうか、社会の底辺の弱者への力を生涯の仕事と決心しているのか。もしかして活動の黒幕としての隠れ家では、とふと思わないでもなかった。

患者の数は年々増え続け、沢木が月に一度ほどクリニックを訪れて、診察の合間に話をしたりするのも遠慮せざるを得ないほどだった。吉野の空き時間を待つ間に、患者たちにも顔見知りが出来、畳の待合で彼らと将棋をしたりすることもあった。親しくなった患者たちは沢木をやはり、教授さん、と呼んだ。

たまにしか訪れない沢木にも時とともにクリニックの動きがわかってきた。希望者だけではあるが、毎週火曜日は近くの丘の散歩、木曜日はソフトボールかテニス。そのあとはみんなで銭湯へ行く。月に一回の俳句会は定期的に小冊子に印刷され配布された。春には弁当を持って花見に出かけ、俳句を作った。言葉が五七五に合い、句が活字になると誰も満足だった。

沢木は患者たちの笑顔に会うようになった。教授さん、教授さん、と呼びかけられることも多くなった。しかし相変わらず職を得てクリニックを卒業するものは少なかった。診察が終わっても帰らない者もいた。お茶を何杯もお変わりしながら、一日中クリニックで時間をつぶす者もいた。彼らにとってはクリニックに来る事だけが日々の大切な行事になっていた。底辺と言われるところでもそれなりに日常を送っている。生活保護の申請や往診なども吉野の仕事

だった。そして長い時間じっと話を聞いてやった。貧しくて弱いものに彼は優しかった。夜間の呼び出しは何時ものことだった。彼らを支えている吉野は先生、先生、と慕われ頼られて忙しさは増すばかりだった。

自殺者が出るのが吉野には一番つらいことだった。自分の力不足を嘆くのではなく、死の寸前の彼らの悲しみ絶望を想像すると耐えられなかった。うつ病や幻覚の中で死んでいくものばかりではなかった。沢木は一度落ち込んでいる吉野から話を聞いたことがある。

「幻聴で悩んでいるという青年と話したことがある。幻聴が止まるかもしれないからやってみようかとある薬を提案した。彼は受け入れてくれて、二ヶ月ほどしたら幻聴は消えた。しかし消えた途端に彼は元気を失った。数か月後彼は自殺した。ショックだった。回復しているのになぜ死ななくちゃならないのか。彼にはある女性の声が幻聴としてずっと入っていたのだ。彼にとっては、その声は病気の象徴であり、片方では心の支えにもなっていた。幻聴が消えた今、それからの彼には空白しかない。病気は良くなったはずだ。だが彼は先に何を見るのか。何を見て生きるのか。答えが出ない。そして僕には何ができるのか。彼にその将来に何を見させることが出来るのか。遺書は残していない、僕への恨みなど言わない。その時僕は医者として仕事を続ける自信を失くしかけた。どこかへ逃げて消えて行きたい気持ちだった」

そんな日々で三十年以上も経ったのだ。沢木の心にいつか吉野に対する尊敬の念が大きく育っていった。それにつれて沢木は吉野のふっと呟く、疲れた、と言う言葉や、頬がこけていくやつれをも敏感に感じた。彼のほかの交友などは知らなかったし、医師会や学会でも異端児であろうことは推測できた。何か手伝おうかと思うこともあったが、何ができるわけでもなかった。時々一緒に食事をして好きな読書の話題でお互いに安らぎを得るくらいでいいのか、とも思ったりした。

年に一度の患者の作品発表会と年末のお祭りは大切な行事だった。近くのホールを借りて絵、写真、詩などを展示し、またギターを弾きながら歌い、詩を朗読する者もいた。患者の家族は嬉しそうに参加した。そこでも野本が準備に奔走した。沢木が感心する作品も少なくはなかった。親しくなった患者も増えた。

ケンちゃんという若い患者はいつも母親と一緒で、絵が上手だった。葉っぱや野菜、果物、花が得意だった。一度その絵を褒めるとそれ以来、親愛をこめて沢木を、教授さん、と呼びはじめた。沢木もケンちゃんと呼んだ。母親も笑顔を絶やさなかった。幼い頃いじめに会った彼は母親に励まされて強くなろうと体を鍛えた。筋肉は鍛えたが気が

弱くかえって外出は少なくなった。時折外に出ても、何かのきっかけで怒りが爆発するともう誰も手が付けられなかった。ただ怒りは自分より弱そうなもののみに向けられた。暴れながら彼はいつも泣いていた。一度クリニックに来て吉野に気持ちを打ち明けて以来、そこが唯一の安らかな場所になった。

タミさんはまだ中年と言うには早すぎる美しい女性だった。少女の頃暴行されたトラウマから抜けだせないまま、いくつもの男女関係や宗教問題で疲れ、気力を失くしていた。部屋に籠っても閉所は嫌いだが、人の多いところも嫌いだった。気にかかることが消えないと騒ぎ喚いて、ある時クリニックへ連れてこられた。しゃくりあげて泣き通しだった。何がそんなに悲しいのかわからなかったが、まわりでもらい泣きするものがいるほどだったらしい。今は週に一度来院して薬を貰う落ち着いた生活を続けていた。短い美しい恋の詩を書いていて吉野に見せ、たまには沢木にも見せたりした。

年末の「なるサー」祭りは一大イベントだった。安いホテルだったがホールを借り切ってのお祭りだった。立食パーティに患者たちはいい服を着て集まった。吉野も正装していた。百名ほどだったろうか、患者の家族も時には市の施設の役人も参加した。何人かがスピーチをした。患者には様々な感謝状が与えられた。一年間の山登りを続けた人、クリニックの掃除をしてくれた人、就職できた人、などなど。吉野は参加者の前で各人を讃えた。みんなは恥ずかしそうにしていたが、にこやかで食欲も旺盛だった。ケンちゃんはネクタイ姿だったし、タミさんのお洒落はセンスがあった。最後は「なるサー踊り」で締めくくられた。院長のほか数名が壇上に上がり上半身裸になって踊った。吉野の痩せた裸は浅黒くどの患者よりも貧弱だったが、長い腕は頭上で生き生きとくねった。普段の院長からは想像もできなかったが、患者はそれぞれが院長の秘密を自分だけがつかんだような親しみを持ったにちがいない。何とかなるサー、明日はいい日になるサー。なるサー、なるサー。野本はそこでも活躍した。ケンちゃんに誘われて沢木も裸で踊った。ケンちゃんは筋肉を自慢し、ついでに沢木の体も褒めた。よー、教授さん、と声もかかった。沢木は目頭が熱くなった。

ある年の野本の挨拶を沢木はいつまでも覚えている。彼の話は上手だった。

「みなさん、私は少年のころから吉野院長の友人でした。それも用心棒です。先生をずっと守ってきました。それで大人になるまで付き合ってきた女性をみんな知っています。いつも裏切られ捨てられていました。そして裏切った女性もいます。みんな知っています。院長、院長、先生、先生と言われていますが本当はとても弱い人間です。それも知

っています。先生はみなさんに支えられて毎日を送っています。みなさんが支えて、先生はやっとここにいるのです。そしてたしかに先生は医者です。患者さんの病気を治します。しかし、エイ、治れ、と言って治るものではありません。この薬で治る、手術をすればいい、と言うことではありません。皆さん一人一人が持っている病気にどう対応するか、患者さんだけでなく先生も一緒に向き合っていく、そしていつか退治していく。先生はいつもみんなと一緒にいます、歩みます。これからもよろしく」

それで三十五年が過ぎたのだ。人生の半分以上と言っていい。入退院を繰り返す者、クリニックに来なくなったもの、自殺したもの、病死の者、もう長い間通っているもの、何千人もが吉野の前を通り過ぎていった。患者は心を開いて吉野を受け入れ、もっと深くと招き入れ、自分だけの特別の待遇を彼に求める。吉野はその訪問が終わるとまたつぎの患者の中を覗きに行かねばならない。孤軍奮闘だった。救いを求める患者たちとの戦いでもあった。あるいは彼らを砦の中に匿い重圧をかけてくる社会との戦いでもあった。昔、江戸時代などはこんな人たちも、村人や近所の人たちに食事を貰ったりして、平穏に暮らしていたものだったよ、と沢木は吉野から聞いたことがある。自分は患者とともにその病気に向き合い、ともに日々を進んでいかねばならない。希望に満ちた明日ではないけれど、と。

沢木は自分の個人的な生活にしか興味を持たない性格だったが、次第に吉野に感化され尊敬の念は増していった。それにつれて心配も増えていった。吉野は時折り、疲れたと呟いた。最近は診察日も減らし、予約制にした。患者の数も一頃に比べると減った。沢木の気のせいか、吉野の頬が痩せ顔色も少し黒くなったようだった。

沢木は女子大学でフランス語を教えていた。教授という肩書を貰ってはいたがそれほどの学問の実績はなかった。気が付くと長い時間だけが経っていた。真剣に学問に取り組むほどの学生のいない大学であったので、授業の準備にはそう苦労しなかった。なるべく全員に及第点を与えるようにした。好きな本を読み、フランスから取り寄せた雑誌を読み、時々頼まれて通訳をし、音楽を楽しみ、酒を飲んだ。新聞や雑誌に雑文を書き、何かの機会に喋った。年に二回、彼が学生の母親を招待してありふれたフランス詩人の生涯とその詩を紹介するわかりやすい講義は評判がよかった。数年に一度学生を連れての研修旅行でフランスへも行った。

平凡な生活だったが、風のない湖水の表面にさざ波が立つように、何かの前兆が心の中に起こってくるのを感じることがあった。これが己の人生なのか、このままずっと続いて行く人生なのか。さざ波が何を象徴しているかはわからなかった。いつか意識も失って灼熱の中へ飛び込んでいく何かの衝動にかられるのか、闇の一点に集中して吸い込まれじっと耐えながら消えていく自分を欲するのか。どちらにも激しい理由のない怒りのようなものが伴っていた。ただそうした心のさざ波が起こりそうになると彼は無意識のうちにそれを避け通常の生活に戻ろうとした。日々の生活ではなるべく気にかかるものは避けていたい。そのため結婚の時期と言われる時代もいつの間にか過ぎた。しかしこの平穏な生活もいつまで続くかわからなかった。大学の理事長が、先生お歳はお幾つになられましたか、と言ってきた時が退職の勧めだった。老後をどう独りで過ごすかまだ考えてもいなかった。

沢木は三十歳のころ三年間をパリで過ごした。日本の大学院を出ても仕事はなかった。帰国する予定の先輩がその部屋を紹介してくれた。パリ大学に聴講生として登録した。八階の狭い屋根裏部屋だったがその部屋は満足のいくものだった。天窓と床の間の隙間のマットがベッドだった。雨の時は天窓から漏れるしずくが顔におちて目覚めた。冬の寒い時は、部屋には小さなヒーターあったが、天窓のガラスが凍り付いていた。夜中に共同トイレに降りていきたくない時はワインの空き瓶が代わりだった。夏は濡れタオルを、すぐにぬるくなったが、頭からかぶった。天気がいい時は窓のすぐそばの「聖廟」の後ろから昇る朝日が美しかった。夕陽が家々の屋根や教会のガラスを照らした。夜はライトアップされた遠くの丘の上の寺院が見えた。

学位は持っていたので勉強に焦ることはなかった。会話にもすぐ慣れた。友人たちとのパーティーではよく飲みよく喋った。誰もが日本人に優しかった。映画や散歩で孤独も楽しんだ。何時間もカフェに座って通行人を眺めてもあきることはなかった。

ある日曜日の夕方、散歩の途中に雨に降られて傍の教会に駆け込んだ。教会では日曜日の夕方のミサでパイプオルガンの演奏がある。丁度良かったと思って入ると、大勢の人が座席に座っている。特別の演奏会のようだった。荘厳な音が教会の石の壁に響き渡り、聴衆の頭を重苦しく押さえつけ、深淵に引きずり込む。バッハの「トッカータとフーガ」だった。沢木は学生の頃この音楽を大学近くの喫茶店でよくリクエストしたものだった。古いステレオ装置から流れる音の世界は、その先の荘厳さを想像させた。深い神聖な闇の世界に沈んでいくのもその音の先の想像だった。しかし何か不満足だった。だが今は違う、これはまさに本物だ。曲は深い地底から突然に噴き上がり、地上のものすべてのものに襲いかかり、引きずり込もうとする。必死で逃げようとするが、さらに追いかけてくる。身体を遠慮なく刺し震わせ、残酷なほどに食い込んでくる。そして

身体を引き裂き粉末にして深淵にちりばめる。身体と心はきらめきながら霧のように深い闇に沈んでいく。もはや人間はこの音楽の前では頭を上げることはできない。これは神にささげる音楽ではない。神は深淵のはるか奥底にある。奈落である。その一点にすべては吸収される。人間の悲劇、悲しみはそこで永遠に癒される。

様々な想念に浸って沢木は感動の時間を終えた。演奏が終わってふと気が付くと隣に日本人の夫婦がいた。軽い挨拶を交わすとそれが吉野夫妻だった。

それから彼らの部屋に度々招待されるようになった。吉野の周りには日本人があまりいなかったせいもあったろう。沢木はいつも次の招待が待ち遠しかった。部屋は街の中心の大通りから入った閑静で瀟洒な建物にあった。三部屋あるうちの居間にはピアノが置かれていた。据え付けの家具は古い光沢を放っていた。ベランダには街路樹の枝が垂れ、緑色のカーテンになり、また鏡に映っていた。木の床は固くても靴の音は柔らかかった。開け放したガラス戸からは気持ちのいい風がいつも流れ込んできた。夕方から夜風に変わるとその香りも増した。由紀子の手料理のおかげで沢木は日本料理への渇望が癒された。ワインは沢木が普段口にする味と全く違うまろみがあった。

吉野は精神科の医者だった。沢木がなぜ精神科なのか尋ねると、最初は家内の親が精神科病院を経営しているものだからと答えていたが、思い直したのか持論を展開した。

「精神病院と言うでしょう、なぜ精神科病院ではないのか、内科の病院、外科の病院というでしょう、それが最初の疑問でした。そしてほとんどが閉鎖病棟です。それをだれも病気だと思っていない。病気は治るのにです。社会はその人が社会的に変なことをするかどうか、を問うだけです。その振る舞いがおかしいと判断されれば、閉鎖病棟行きです。夜勤のアルバイトで随分ひどいところを見ました。強制入院させられた若者が自分は患者じゃない、病気はもう治ったんだ、とわめいていました。看護士が数人で彼を殴っていました。彼は最初は哀願していましたがかなわぬとみて反撃しました。彼らの思うつぼでした。患者はさらに激しく殴られ翌日には死んでいました。日本はいつからこんなことになったのか。明治時代に精神衛生法というのが制定されてからです。いわゆる座敷牢を法定化したようなものです。あと何回かは改正されましたが、似たようなものなんですよ」

それから話は政治の問題にもなったが、沢木があまり関心を持たないようなので話は文学の話に移っていった。吉野は文学、とくに詩については造詣が深かった。ある日古い通りを歩いていて、ヴェルレーヌここに死ぬ、と言うプラクのある家を見つけた時は嬉しかったと話した。一階は、レストランヴェルレーヌ。その全集を買ってますます

好きになった。フランス語はそんなに難しくない。彼がランボーをピストルで撃って、刑務所に入れられ、そこで悔悟した話。その後再び彼はある美少年と知り合って、田舎に家を買って一緒に住んでいたが、美少年はすぐに病気で死ぬ。自分はその家を小旅行で前日行って見てきた。晩年はアルコールに溺れ惨めに死んだが、その葬儀には多くの詩人が集まって彼を讃えた。

話は尽きなかった。沢木も喋った。自分の専門が十五世紀のフランスのヴィヨンという詩人であること。名門の出身でソルボンヌ大学を卒業しながら、無頼の仲間たちと交流を続けついに小役人を殺す。何度も刑務所に入り、絞首刑の寸前に恩赦で助かり、また売春宿を転々とし窃盗団に加わり、無頼を繰り返しながらいつしか人知れず消えて行った謎の詩人。その翻訳を一度出版したこともあったが、評判はさしてよくなかった。

またいくつかの雑文を発表してので、一応はヴィヨンの専門家としての名前だけは知る人もいた。

吉野に話はしなかったが、沢木は自分の若い頃の無頼経験をヴィヨンの中に見ていたように思っていた。激しい喧嘩で相手を傷つけ逃げたことは何度もあった。血だらけの相手がその後どうなったか知らない。死んだかもしれないとふと思って、汗をかいて目覚めたのはもう何年も経ってからだったが、それが彼のヴィヨン研究のきっかけだった。才能に恵まれながら彼は何故その世界でしか生きられなかったのか。「往古のフランソア・ヴィヨンは威風堂々と酒場から酒場へと飲み歩いては略奪を行い、そこには群衆の歓呼の声の雑踏と，風塵のような狂える華麗な街の殺戮とがあった」ある著名な研究者の文章は沢木の心を震わせた。強盗に押し入る前夜の酒盛り。欲望に迷わされた夜毎の狂乱。歴史の古い残酷な絵本を見るようだった。彼はヴィヨンに憧れ実際にはありえないだろうがその生活を夢見た。そして怒りと悲しみと皮肉に満ちた詩。絞首刑を宣告された彼の詩は沢木の心に浸みた。沢木がパリでの住まいを決める時もヴィヨンの縄張りであったS・J通りを選んだのは当然だった。

そんな世界と縁のないような吉野の生活は沢木には羨ましくもあったが、妬む気持ちにはならなかった。美しい妻と優雅な生活と勉強は吉野にぴったりだった。帰国してからも保証は十分だ。この友情を長く大切にしなければならないと思うだけだった。

沢木は一人息子だったが、弁護士になりきれずに司法書士となった父親から厳しく教育された。高成績をあげて弁護士にならねばならなかった。圧迫に耐えきれず、ある日彼は父親を殴って家を出て不良グループに入った。無頼の荒れた生活でも文学部には入学できた。母親が陰で金銭面の応援をしてくれた。それは今でも続いている。沢木が吉

野にはそれらのことを話すことはなかった。

沢木は頻繁に彼らを訪れるようになった。おいしい食事や気の合う話。また食後の由紀子のピアノは沢木の楽しみだった。沢木は次第にそれに惹かれるようになっていった。それが訪問したい気持ちをさらに助長した。素晴らしい演奏だった。しかし沢木は演奏する彼女の背中と腰と手の艶やかな動きに魅入られて、次第に曲が聴こえなくなっていくようだった。一曲弾き終わると彼女はいつも数秒うつむいたままでいた。乱れた髪から覗くうなじは白かった。そのうなじから沢木は彼女の表情を想像するようになった。沢木はその美しさに耐えられないと思った。聴こえなかった曲も次の招待まで消えることはない。彼は音楽があまりわからないという不器用さをなぜか二人の前で装っていなければならなかった。

一通りのパリの街を知ってしまうと、何時間も公園やカフェで過ごすことが一番の楽しみになった。公園で見る空は夕方になって陽が落ちかかった時が一番美しかった。空の青さが薄暗くなるにつれてますます透き通って来るのだった。ベンチで本を読み、昼寝をし、ウォークマンで音楽を繰り返し聴いた。ショパンのノクターンとプレリュードだった。由紀子の得意とする曲だった。

カフェでは通行人を眺めながらビールとワインを何杯も飲んだ。退屈ではなかった。もの憂さに身を任せると少しは心地よかった。学生街のそのカフェの前の石畳を、いろんな人種の若者が歩いて行った。一歩一歩の靴音が心に突き刺さった。彼は何か知らない拭い去れない哀しみが心の奥底に残っているのを感じていた。それを苛立ちだと思い込もうとしていた。それを抑えつけておかねばならない。今日はこれで終わりだと立ち上がって部屋に帰っても空しいだけだ。かといってこのままじっと座っていても何の変化もない。心地よかった空気が乾燥したまま周りに張り付いているだけだ。

通りの突き当りの公園の先に陽が沈もうとしていた。その時ふと背後を女性が通り過ぎる気配を感じて彼は振り向こうとした。だが彼はそれを抑えた。なつかしい空気の香りだった。由紀子だと思った。髪の間から覗く白いうなじと、肩の線、背中、腰の骨格が一瞬に蘇った。それは彼にとっては最後通告のようなものだった。数秒後彼は思い切って振り向いた。しかしそれは由紀子ではなかったが、その瞬間に彼は解き放たれたように確信した。俺は彼女に恋をしている、その身体にその存在すべてに。もうそれを抑えることはできなかった。忘れ去ることはできなかった。彼は喜びよりも甘い悲しみに陥った。

吉野から三週間も招待がないと、沢木の胸は苦しくなった。嫌われて拒否されているのではないかと不安になった。夜、天窓の真下のマットに横になったまま彼は身動きできなかった。天窓から欠けた月が見えた。沢木は自分より整った体つきの吉野が、由紀子を抱き服を脱がせている場面を想像した。なされるままに従う由紀子の姿態を思うと胸が締め付けられた。人の妻を自分はどうすることもできない。吉野の形のいい唇が彼女のうなじを這う時の由紀子の表情は、沢木を虚脱させ深い悲しみだけを残した。どうしようもない。嫉妬という言葉では表せない辛い空しさだけが冷たく身体を刺した。乾ききった喉の奥にいきなり塩辛い水分が迸った。

五月の天気の良い日の夕方だった。沢木は吉野の部屋のベルを押した。愚かで醜いと思った。しかし悲しみは愚劣さでしか癒されないのだ、と彼は自分で勝手に納得した。ちょっと近くまで来たので、しばらく彼には会っていないし、と彼は眼をそらしながらも精いっぱいの冷静さを装って挨拶を交わした。由紀子は部屋へ案内してくれた。沢木はその後姿全部を決して忘れないように目に焼き付けようと思った。由紀子がビールかコーヒーかと聞いてきて、彼は水をお願いしますと答えた。それ以外は咽喉を通りそうになかった。

吉野は昨晩は帰ってこなかったということだった。最近は教授の地方講演に同行したり、パリでも仲間内の議論で長引いて帰らないことも多い。疲れているようだが気持ちは高揚している。教授はアメリカでの著書の発売と講演で成功を収めて帰国したばかりだった。由紀子は淡々と話した。

何時になるかわかりませんが、お待ちになりますか、と問われて帰らねばならないのかと一瞬思ったが、彼はもう覚悟は決めていた。厚かましく口を開いた。

「一曲お願いできませんか」

「何を弾きましょうか」

「ゴルドベルグ変奏曲のアリア」

「難しいのをご存じなのね」

「ええ欲望を抑えつけたような単調な哀しみが感じられます。それが好きです」

夕方の最後の光に映えて街路樹の花が眼についた。薄紫の小さな靄のように枝にかかっている。桐の花だ。曲がはじまると陽は急に落ちた。彼は曲を聴きながら美しく優しく揺れる姿を凝視しそれから眼を閉じた。彼女の演奏姿を見なくても眼底に浮き上がらせることが出来るかどうかためそうとした。単調の澄んだ音を奏でる腕は、深海を泳ぐ白い魚のようである。それは悲しみに満ちて小刻みに震えている。その美しさはまわりをただ拒否している。薄闇の中でも白いブラウスを透して彼女の身体が見える。一瞬彼

は気を失ったように眠りに落ちた。彼女の息の匂いを感じそうになった。衣擦れとその空気の微かな流れにも彼は匂いを感じた。それ以上は耐えられなかった。

重苦しい曲が半分も終わらないうちに彼は早々に辞した。挨拶もちゃんとしないままだった。急に悲しくなった。甘い憧れが自分を拒否する前に、自らすべてを拒否しなければならない、と彼は石段に足を踏み出した時にそう思った。どうしようもないことはどうしようもないのだ。自分の動作や周りが空疎だった。手足の動きに力が感じられなかった。すべてが無駄で虚しい。死と言う言葉が一瞬ひらめいた。窓を見上げるともうカーテンが閉められ、薄い光がわずかに漏れていた。桐の花がくるくる舞いながら落ちてきていた。気が付けば数秒おきにポトリポトリと落ちてくる。拾ってみると萼から離れた円錐形の一個の花のままである。

その夕方の刹那を沢木は長い間決して忘れることはなかった。繰り返し思い出しては何度も同じことを考えた。あの時無理にでも手首を握って引き寄せ、せめて首筋にでも唇を押し当てることが出来ていたら——決してそれ以上のことを望んでいるわけではない。しかし間違いなく彼女は侮蔑の激しい平手打ちを返しただろう。それはそれでよかったのだ。それから年毎に記憶が遠くなるにつれ、むしろ想像は勝手に広がった。無頼漢詩人ヴィヨンが勝手に彼の想念に入り込んできた。精悍で凶暴で淫靡な笑いを絶やさない憧れの男。俺は恥を抑えきれないまま、彼のような凶暴な男に変貌すべきだったろうか。しかしそこにはピアノを弾く由紀子の白い項と肩と背中の肉が清楚な仄暗い光で漂っていた。彼はそれを見つめることで変貌することを拒否し、静かに悲しみに浸ることを決心していた。

久しぶりに会ったのは吉野が帰国する一ヶ月前だった。彼らは外で飲んだ。吉野の表情は興奮した後の虚脱状態に似ていた。

酒が深まると彼は古い悔悟を話すようになった。彼の師、H・M教授が日本を訪れたのは彼がフランスへ来る五年ほど前だった。彼はそのころ地方都市の公立の精神科病院に勤めていた。設備も整った一級の病院だった。近くには女囚の刑務所があった。すでに著作で名を成していたH・M教授はそこを訪れた。閉塞された環境や抑圧された個人の意識などから歴史を分析する、逆にその歴史から抑圧された個人はどう生きざるを得ないか。女囚刑務所は世界に稀に見る環境だと教授の賞賛を得た。

彼はついでに吉野が勤めている病院を訪問した。フランス語を少し話す吉野が接待役にあてられた。彼はまる三日間付きっきりだった。吉野はまたH・M教授の著作をよく読んで共鳴していた。不安定な発作を起こす者をすぐに入院させるのが当時の治療だった。特に患者が社会的弱者であれば強制入院は誰も異存がなかった。吉野はH・M教授

の持論を引用してそれらに反対した。彼の論文に、古い医者は、大抵が裕福な医者たちだったが、またあの「アカのやつら」が、と非難していた。

数年たって彼はある少年を担当した。中学でいじめにあった彼は次第に両親へ暴力をふるうようになった。高校も中退し部屋に閉じ籠ってゲーム機をいじっていたが暴力は収まらなかった。初めは厳しかった父親も暴力には負けるようになった。親がある時町医者に相談した。町医者はすぐに強制入院の手続きを取った。病院内で少年は最初は暴れたが次第におとなしくなった。しばらくして吉野は両親と少年と看護師と一緒に面談した。少年は素直に詫び、両親は泣いて喜んだ。強制入院がよかったのかどうか吉野に疑問が残ったままだった。

退院の直後少年は牛刀を手に入れ、長距離バスを乗っ取った。女性が一人殺され数名が怪我をした。警官たちの強行突入で少年は逮捕された。テレビでも中継された。少年は病院では嘘をついておとなしく猫をかぶっていたと言った。両親を決して許さない、復讐するためだと繰り返した。

吉野に批判が集中した。凶暴な奴は閉じ込めておくべきだ。それを見抜けないのは医者として失格だ。吉野に反論はできたが、実際に女性が殺されていた。反論はさらに非難を呼ぶだけだった。遺族が病院を告訴してきた。

吉野はその病院を辞めた。フランスへ渡りH・M教授のもとで一年ほど勉強することにした。由紀子の父親が資金を援助した。その父親もまた、あの「アカ」が、とののしる医者の一人ではあった。

最後に招待された吉野の帰国前の食事は静かに終わった。会話は少なかったが、吉野はしきりに沢木の恋人について尋ねた。沢木には恋人らしき女性がいるにはいた。大人しい銀行員の娘だった。帰国したら結婚してもいいと思って相手も両親も待っていた。次の春にはこちらに旅行で来ることになっている、まだ婚約はしていない、式を挙げる時は招待するからな。それだけでその話は終わった。

沢木はお疲れでしょうからと言って、最後のピアノも断った。もう由紀子の姿は眼底に焼き付いていた。匂いや空気の流れは胸の奥からいつでも流れてきた。一個の物体として彼の中に生きている。彼は必死でそう思い込もうとした。そして決して手が届くものではない。触れ得る者ではない。これが不条理なのだ、彼はそう自分を皮肉った。納得しなければならなかった。帰り際に二人と握手した。顔を見ることはできなかった。由紀子の手を握るのは初めてだった。沢木の体を心地よい甘い悲しい衝撃が走った。

あれから四十年も経ってまだその時の事を鮮明に覚えている。意識を失くすほど酒を飲んで彼は北駅の近くの怪しげな地域に足を踏み入れた。初めての経験だった。危険を

恐れる気持ちは全くなかった。むしろ危険を欲した。危険な男でも出てきたら俺は戦い間違いなくその男を殺す。酒で痺れた感覚にも悪臭と安香水の匂いが満ちていた。それが心地よかった。手持ちの金は使ってしまった。少しの満足にもならなかった。砂のような肉体への無味乾燥の一瞬だった。寒かった。空しさと怒りしか残らなかった。

暗い石畳を歩きながら、愚劣だ、生きていることは愚劣だ、おれは愚劣の塊だと呟くように考えた。何をもっても埋めることのできない空虚を内包した俺は一個の愚劣の塊だ。あと二年自分はパリで過ごす。淡々とした生活を続けるだけだ。もうこれからはどんな女も愛することはできないだろう。決して甘い憧れのようなものを感じてはいけないのだ。一切を拒否する。俺は石のように生きる、愚劣な一個の塊としてただ生きる。

部屋へ帰って彼はその銀行員の娘に手紙を書いた。帰国しても会わない。理由のない簡単なものだった。

由紀子の相談を受けてからも沢木はまだ真剣に考えていなかった。思い出に浸って流れるままを見ていたに過ぎない。吉野が、三か月たったら沢木に相談すること、と言い残したこと、そして今の状況は何を意味しているのか、自分は何をすべきか決めなければならない。その必要があれば彼を救わねばならない。また眼底に焼き付いている由紀子の面影を再び眼前に呼び戻さねばならない。それが幻であっても。

沢木は吉野とは共通の話題で何時間も話して飽きなかったが、その付き合いの中で何かが欠落している感じは拭えなかった。自分のことはよく理解してくれていると思うものの、彼のことはもう一つ踏み込めないでいた。それは吉野の生い立ち、青少年時代を知りたいと思う反面、触れてはいけない柔らかな暗い領域を感じざるを得なかったからだった。幼い頃、炭鉱町で育ち電気技師だった父が事故で死んで以来苦しい生活を送ってきたこと、その炭鉱町の病院の院長に育てられたこと、一度吉野が恥ずかしそうに話したことがあった。院長のあと取り息子も吉野の同級で医学部に入ったが、今はその病院はない。成績優秀だった吉野と幼馴染の院長の娘が結ばれるのは流れとして不自然ではなかった。

よくある話で沢木は別段気にもしなかった。炭鉱町で育った吉野が学生運動に身を投じるのは何ら不思議ではない。そして正義感だけでなく持ち前の優しさで社会の底辺の弱者に気持ちを寄せるのもうなずける。医者としての仕事ぶりは誇りあるものだ。確かに沢木がそこに魅かれたのは間違いなかった。

だが信念のために日々を送りながらも、何かが自分の足をすくい泥沼に引きずり込もうとしている不安を無意識の

うちに感じていたのではないだろうか。沢木もそれを感じ吉野のもろさを心配した。確実な生活を送りながら、突然ある時すべてを捨てて破滅の淵へ自らを投げ込んでいく、沢木はある時あえてその吉野を想像した。なぜそうするのか、そうせざるを得ないのか。

沢木はある衝動を忘れることが出来ない。クリニックの経営が軌道に乗って、吉野の表情も柔和になっていた頃だった。彼への尊敬の念も増していた。市の福祉課や保健所の職員もしばしば訪れて来た。沢木はなぜか吉野に似合わないと思った。その時襲ってきた衝動はなんだったのだろうか。沢木には苦悩に歪んだ吉野の顔が浮かんできた。それは吉野にふさわしかった。破滅、と言う言葉が閃いた。沢木はそれを期待している自分を感じて驚いた。恐怖に似た空気が胸を撫でて行った。沢木は忘れようとした。

「なるサー祭り」の時期になった。由紀子に頼まれてからもう二か月が過ぎていた。沢木はまだ診療所閉鎖を実行する決心がつかなかった。それよりも先に「なるサー祭り」に参加していた元患者や毎年の参加者には院長の不在と祭りの中止を知らせなくてはならない。それを口実に沢木は久しぶりにその駅に降り立った。由紀子にも会いたかった。静かな懐かしさを味わいたかった。電話の応答はなかった。沢木は幾分ほっとしながら野本に電話をした。彼は喜んで出てきた。二人だけで、何とかなるサー、で飲みましょうか、と相変わらずにこやかだった。

さびれていく商店街だったが、ジングルベルが鳴り、まばらではあったが照明が色とりどりに点滅すると、それなりに精いっぱいの歓びが溢れていた。大学でも女子学生たちが様々な企画をして沢木を招待することがあったが、僕はクリスチャンじゃないから、といつも断るのだった。音楽は心地よく懐かしいものだった。だが彼には遠い昔の懐かしい悲しみが付き纏って他人と浮かれる気持ちにはなれなかった。

パリのシャンゼリゼの並木は紫と白の霧のような照明に飾られ、十二月いっぱい続く。帰国する前年のクリスマスは忘れることができなかった。一キロも続くその静かで美しい並木の照明はなぜこんなに悲しいのか。パリを去りたくないという気持ちと帰国すればまた懐かしいけれど、由紀子に会わねばならない。その畏れと、苦悩が想像される。涙でぼやけるイルミネーションが彼の脳裏を去来するのだった。

野本は風邪気味だと言いながらよく飲み食った。接待の女性をからかい落ち着いていなかった。沢木は野本が何か隠しているのではないかと思った。やっと野本が喋り始めたのは時間も相当経ってからだった。

「実はこの前は簡単に言いましたが、この一、二年、私服

警官がしつこくなりましてね、震災以降です、それもおおぴっらにね、昔はそれでも誰もわからないうちに現れて消えてたのに、と先生が言っていました。この前なんか、僕の会社にも来ました。クリニックに覚せい剤患者らしきものはいないかって。先生のことを調べに来たんですよ。ひやっとしました。実は時々夕方になってから、青白い顔をした若い者が会社に来ることがあるんです。ポンプくださいって。可哀そうで時々は売ってやります。飲み屋のマダムみたいな女性がタクシーで乗り付けて大学の先生の名刺を見せて注射器をたくさん買っていったこともありますよ。そうだ、私服は名刺も置いて行きましたよ。樽田とかいってました。この前はケンちゃんも質問されたらしいです。私服と知らず、ケンちゃんが先生は福島だ、と答えたと報告した時、先生に随分叱られたそうです。ケンちゃん、しょげてましたが。先生と出かける時、教えられたこともあります。後ろを見てみろ、あれだ。やっぱり、私服の樽田でしたよ。そして先生が不思議なことを言ったこともあったな。あいつはおれの学生時代からの担当だって、そんなに何十年もやるのですかね。何の意味があるんですかね。ついこの前もいましたよ」

沢木はその反体制運動のことについて、吉野から真面目に話を聞いたり、考えを求められることはあまりなかった。同調者として安心しているのであったろうが、寂しいことでもあった。まして私服のことなど沢木はまったく知らなかった。

別れ際になって野本が言った。二人とも酔っていた。

「今日は体調があまりよくない。今までこんなことはなっかたんですがね。クリニックは年が明けてから取り掛かりましょう。僕もちょっと疲れました。大切そうな書類だけは選んで、あとは「何でも屋」に全部任せましょう。一日で終わりですよ。それで先生ともお別れかな。五十年の付き合いもあっという間ですね。昔のことを昨日のように覚えている、これがいけないですな。五十年前のことが昨日だったら、その五十年はなんだったのでしょうね。先生がいなくなる前に言ってました。高校一年の時におふくろに買ってもらった白いスポーツシューズがいまだに懐かしく思う。それが一番の思い出だって、あのころは貧しかったのにって。こうやって人間はあっという間に五十年、七十年、そして死んでいくんですね」

沢木はこれが終わったら多分君と会うことはないだろう。そしてお互いにどこかで死んでそのままだ、今日は何か自分の知らないことを話してくれと頼んだ。自分の三十五年の推移とも並べてみたかった。

この三十五年の成り行きはそう変わったことではなかった。吉野がパリへ行くとき由紀子は親に相談もせずに同行した。いずれ病院を継いでくれるならと義理の父、院長は

譲歩した。帰国してから吉野は猶予を貰っていたが、その院長も死んだ。吉野は跡を継がなかった。病院は売却された。彼にはどうでもいいことだった。

「先生のクリニックの三十五年は一瞬のような感じですね。空しく哀しいですね。これで終わりですかね。ただね、教授、僕も歳のせいか時々変なことを考えるのですよ。先生、何か人に言えない病気じゃないかって。疲れたと言うことが多くなってきていました。体の芯に何か異常があるような気がしましたね。教授も気付いていたんでしょう。随分痩せてきた。冗談で、先生エイズでも貰って来たんじゃないですか、と言ったことがあるんです。先生、笑いもせず否定もせず、聞こえないような顔をしていましたがね。まさかエイズではないでしょうが、どこかで何かの病気の治療をしている、そんなことも考えられますね。僕たちに言いたくなくて。まさか外国ってことはないでしょうね」

沢木は一瞬でも野本の話を信じたのが嫌だった。半分信じかけてあわてて否定したからだった。確かに十年ほど前、吉野の師のH・M教授がエイズで死んだというニュースを聞いたことはある。だが二人はその話をしたことはなかった。今、野本の話からどこか外国の衛生状態の悪い病院でじっと死を待っている吉野を想像して沢木はぞっとした。

また昔読んだトーマス・マンの小説を思いだす。主人公の天才作曲家アドレアンは芸術の不毛と孤立を乗り越えようとして長い苦悩の末、娼婦からの病毒感染によって霊感を得るという「悪魔との契約」をする。悪魔との長い会話が続く。やがて彼は狂い自滅する。何とも不可解な小説だった。それほどの深い残酷な苦しみが人間にあるのか。そして沢木はなぜそれを思い出したのか、自分でもわからなかったのですぐに忘れようとした。

「実はずっと迷っていたのです。教授に隠してたんですが、今日はいい機会だ。もう三十五年、いや四十年も前になるかな、先生が僕に持ってきたものがあるんです。これは小説だ、おれが生きているうちは陽の目を見ない。誰にも見せるな。死んでも十年は出すな。人それぞれに秘密はあるものですね。それ以来、これについて先生はなんにも言わない。先生も忘れているかも知れない、うん確かに。これを教授、あなたに渡します。僕はこうしていますが、最近は体調も良くない。借金も増えて、いつ首をくくるか分からない。これが何か事があっていい加減なところに捨てられても困る。僕もこの頃、少し疲れましてね。年金の出る歳にもなったし、もし診療所を片づけるなら、終わったら僕も引退して家内の里にでも帰ります。先生の奥さんも別れるつもりでしょう」

中年を過ぎてから、どちらが先に死ぬかな、という冗談は普通だった。沢木は体には自信があったが、これから何があるかわからない、それにそんな重たいものを預かりた

くないという気がしたが、読んでみたいという気持ちを抑えきれなかった。吉野がこのまま姿を見せなかったら、それは許されるだろう。だが今はまだ読む気にはなれない。何かのきっかけがなければ読むことはない。それは多分、自分に大きな衝撃を与えるものだろう。あるいは自分が何かに打ちのめされて立ち上がれなくなった時に読むべきものだろう。野本は紙の紐で括られた茶封筒を鞄から出した。封筒は風化して端から破れて崩れそうだった。中を見せないまま、別の紙袋に丁寧にそれを包んで野本はすぐに帰った。

吉野が帰国して二年後に沢木も帰国した。吉野はクリニックを開業したばかりだった。パリでの贅沢な生活から見て、仕事場にこの煤けた街を選んだ吉野の気持ちが沢木には最初は解からなかった。由紀子もよく承知したものだ、義父からの資金援助は十分にあるだろうに、と疑問を抱いた。義父の病院をそのまま受け継いで経営するのを断ったからだろう。それでも吉野の気持ちを理解するのに時間はかからなかった。すぐ後に彼は自宅を建てた。

由紀子との再会はその新築の家だった。由紀子は変わっていた。というより、沢木が変わったという方が正確だったろう。涼しい風の吹き抜けるパリの部屋の華やかな由紀子ではなかった。普段着を着て沢木に忙しそうにお茶を入れる姿だった。二年ぶりに見る日本、そこに立っている現実が、まだ彼には実感としてない時だったからだろうか。由紀子へのあの熱い思いは消えたが、鬱積された哀しい欲求はその傷跡として残っていた。そして彼女はいまだに沢木にとっては拭い去ることのできない対象だった。目の前にいる由紀子が仮の映像でも、それへの情念は深く残っている。ますます沢木の心に突き刺さる。いくら欲しても、彼女を抱きその肌に触れることはできない。それをはっきりと認識しているからこそその存在そのもの、姿そのものは眼底に石のように居座っている。その対象への情念は心の奥底で冷たく燃えている。沢木はそれを大切にしようとしていた。

何度か訪問して食事をしたが、昔のようにピアノは弾いてくれなかった。沢木も頼まなかった。落ち着かない由紀子の前でパリの思い出も文学論もはずまなかった。

由紀子がある時沢木の訪問を断った。それを告げる吉野に気を使わせまいと沢木は平静を装った。沢木は由紀子が彼の心の中の煩悶を知ったに違いないと確信した。それは一種の歓びだったが、現実としては辛く悲しいことだった。沢木は丁度その頃大学の職が決まったばかりだった。さまざまな用件を確実にこなして日々を送っていた。時には意味もないような雑事にも熱中した。それが悲しみを忘れることだった。時間がかかったが彼はそれを克服した。そしてその癖は抜けないまま彼のスタイルになった。クリニックへ行くと吉野は何もなかったように歓迎してくれた。

いつの頃からだったろうか、それが習慣になったのは、その界隈に足を踏み入れるようになったのは。ある時、吉野と簡単な夕食をとって別れた後、沢木はその風俗街を散歩することにした。意識はしていたが、気づかぬふりをして自然に足がその界隈へ向うままにまかせていた。

その路地一杯にはバランスの悪い原色のネオンがけたたましい音楽とともに氾濫している。ネクタイはしているがだらしない若者が客引きをしている。沢木は何も選ばずただ眼についた入り口へ入った。うす暗いフロアーに週刊誌ののったテーブルが一つ、椅子が五，六個おいてあり労働者風の男が二人雑誌を見ている。石鹸の匂いが不安を取り除いてくれた。誰か指名は、と訊ねる事務的な男にいやと首を振るとそのまま二階へ案内され、蒸し暑い蒸気と香水の匂う部屋に入れられた。化粧をしているがみすぼらしい女がいた。初めてだった。

あれは由紀子が彼の訪問を拒否した日の帰りだったろうか。それとも大学の仕事にも少し慣れた頃、授業の終わりに女子学生が一斉に立ち上がる時にむせるような化粧臭と体臭が彼を襲った時だったろうか。それはもう三十年も前のことになる。

沢木には昔のような悲痛な気持ちはなかった。由紀子にいつか拒否されるであろうことはある程度覚悟はしていたのだ。深層の心の闇では、むしろそれを望んでいたのではないか。由紀子は偶像であり、仮の現象であった。絶対に己のものにすることのできない対象だった。だからこそ彼はさらに欲することができた。それは悲しみや絶望でもなく、沼の底の泥濘のような安らぎであり、安心感であった。今この蒸気の満ちた部屋で、女の肌に触れる時、一瞬由紀子の匂い、雰囲気が閃く。しかしそれは彼女への欲望というより、何かへの哀しい希求だった。

界隈は時とともに推移した。世の中の景気に連れて光の溢れ方は変わった。薄暗く音楽も静かに、あるいはさらに激しく流れる時もあった。顔見知りの客引きも女も変わって行った。たまたま三度ほど会った女に、お金を貯めたら国に帰って小料理屋をしたい、あなた独身でしょう、一緒に来ない、と言われたこともあった。沢木は数秒間それを想像して楽しんだ。誰に知られることもなかった。

クリニックに来ることはここに来ることと同意語だった。それが三十年以上続いたのだ。夏は界隈全体が蒸されたように暑く、異臭も漂った。春の夜風には下品なネオンも懐かしく見えた。冬の夜風は風呂上りに体に冷く淋しかった。時には怒りのように激しい性を求めたこともあった、諦めのように静かな時も、また素性も知らない女に限りない優

しさを覚えたことも。次々に異なる肉体が彼の胸の上を通り過ぎて行った。そしてことごとく過去の闇に消えて行った。反省や悔悟と居直りを交互に覚えた。愚劣な秘密、と惨めさに陥りそうになると、それは意識して避けた。もう忘れてしまったが、昔はなにかに憧れを抱いたこともあったような気もする。激しく希求したことも。そんな新鮮な気持ちの時もあったと自分を慰めた。しかし時は流れて行った。ある時、なじみの客引きに、よう、ご老体、と冗談で声を掛けられた時は不敵な面構えを意識して、彼にニヤリと笑みを返した。ここで俺は三十五年という時間と肉体の一部を費やしたのだ。

吉野の原稿を持ってこの界隈に来るのは少し気が引けたがすぐに居直った。人には言えない愚劣さ卑屈さ俗っぽさに浸るのが沢木には一種の安心感だった。それで貴重な原稿を手にしていることが今ふさわしいようにも思えた。ただ失くさないようにコートのポケットにしっかりとねじ込んだ。

懐かしい場所だった。帰って来たと思うことすらあった。慣れてしまった石鹸の匂いと暖かい湯気、毎回変わる女の肌と安香水。様々な肉の感触も同時代の女から娘に近い感触になって行った。ここに来るのも最近では義務のように思われることもあった。そして安心することが出来た。音楽やネオンはいつも煩わしかった。

受付の小さな窓口に見慣れた顔があった。あ、教授さん、と声をかけられても恥ずかしさはなかった。ケンちゃんのお母さんの仕事場だった。ケンちゃんは元気ですか、と聞いたがすぐに返事はなかった。しばらくはケンちゃんに会っていない。覗き込むと暗い声が帰ってきた。「死んだよ」沢木はお母さんの仕事が終るのを待って話を聞いた。

それは半年くらい前のことだった。ケンちゃんはある日クリニックへ行くためにバスに乗った。降り際に小銭がなかった。一万札におつりは出なかった。謝るケンちゃんに運転手は舌打ちを返した。侮辱されたケンちゃんはシートベルトで動けない運転手を殴った。殴っているうちにさらに怒りが増してきた。乗客は誰も止めなかった。運転手はドアを開け警笛を鳴らし続けた。そこを通りかかった男がケンちゃんを止め引きずりおろした。ケンちゃんは暴れたら止まらなかった。男はケンちゃんを投げ飛ばし地面に押さえつけた。首筋を膝で押さえつけられ手は背中へねじ上げられた。ケンちゃんの顔には砂が食い込みこめかみからは血が滲んだ。ケンちゃんは痛いと泣いていた。男は止めなかった。男はクリニックを偵察に来た私服の樽田だった。偶然だった。やっとケンちゃんが必死の力で男をはねのけて逃げたが、クリニックの前まで来たときにまたつかまった。揉み合っているうちに入り口のガラスが割れ、今度は男が倒れた。男は動かなくなった。周りの者が男をクリニックへ運んだ。ショックで心臓が止まっている、と院長が言った。AED除細動器が当てられた。院長は注射を打ちマッサージを続けた。ケンちゃんの興奮は収まらなかった。ケンちゃんは泣きながら繰り返し叫んでいた。先生、こいつを殺してくれ、生かさないでください、お願いです、先生、なんでそいつを助けるんですか、先生。救急車が来て男が連れて行かれてもケンちゃんは泣き止まなかった。先生、どうしてですか、あいつは悪い奴です、スパイです、先生。吉野は院長室に入って鍵をかけた。ケンちゃんは泣きながらいつまでもドアを叩き続けた。

それで終わればそれでよかったのだ。ケンちゃんの興奮が収まるのに時間がかかっても何とかなっただろう。吉野は母親と一緒にバス会社に謝りに行った。その一週間後のことだった。ケンちゃんが久しぶりにクリニックへ顔を出した。受付で少し恥ずかしそうにしていたのも束の間だった。また偶然に樽田が入ってきた。菓子箱を風呂敷に包んでいる。ケンちゃんの顔色が変わったのを誰もが見た。そして少しずつ後ずさりしながら出ていくのに気付かないふりをした。男はケンちゃんを無視していた。樽田は長々と吉野に喋ったらしい。

「先日は本当にありがとうございました。先生は命の恩人です。救急隊の方に言われました。先生がいなかったら多分命はなかっただろうと。まだ死にたくありませんから。まさかあそこで私を助けないでおこうと思ったわけではないでしょうね。先生と私は本当に縁がある。二人だけの縁もある。もう何十年になりますかね。私もおかげさまで警察を辞めてからもいろいろ使ってもらっています。これからもよろしく。先生とは長くやっていけそうだ。ところで私の家内ですが、ひどい鬱病です。今度診てやってくれませんか。先生だったら安心だ、評判もいい」

樽田はしばしば来院するようになった。クリニックへ来る従来の患者は次第に減っていった。院長は樽田を断ったが、彼は愛想笑いをしながらまた来た。ケンちゃんはもう姿を見せなかった。患者が誰も来ない日もあった。そんな日は院長は一日中部屋に閉じ籠っていた。そしてケンちゃんは三か月後に自殺した。患者の死であれほど泣いた先生を始めて見た、と誰もが言っていた。沢木は吉野の苦悩が想像できた。いたたまれなかった。

ケンも三十五になったばかりでした。なにもなくなってしまって、こんなものですかね、仕方がないです。ケンちゃんの母親は落ち着いて話してくれた。

いつものホテルは満室だった。何軒か探したがなかなか見つからなかった。湯上りで寒くなってきた。何軒も回る

うちに滑稽さ、惨めさが消えて自信に似たものが湧いてきた。だれもこんな自分を知らないだろう。もし学生と会っても俺とは気づかないだろう。しかしなんというつまらないことをしているのか。まさに愚劣だ。誰もこんな愚劣な俺を知らないだろう。先刻は腹が減ったという女の頼みでラーメンの出前をとったのだった。湯気の中のラーメンは空腹に浸みた。今日初めて会う、学生だと言った女。干からびていく俺の肉体は醜いか。

日頃は期末テストでも全員を合格させるためになるべく易しい問題を出す、カンニングも許す優しい教官だ。学生には少しでもフランス語を齧ったという記憶さえ残っていればいい。彼女らはまだ若い。誰もがまだ将来の希望や楽しみをなんの疑いもなく持っている。それが虚しいものいだとやがて知るだろうが、それも未来の意味だ。だが愚劣の俺には未来はない。老残と死に向かって愚劣に生きるだけだ。ならばもっと愚劣に生きていかねばならない。情熱をもってそこに集中していくべきだ。それを愛すべきだ。吉野の苦悩に歪んだ表情が思い浮かぶ。吉野ともと語り合っておくべきだった。望むものを捨てろ。意味のないことに生きることを怖れるな。そうすれば生きることに煩悶はない。

やっとベッドにもぐりこむことができた。シーツも替えられていない。なま臭い惨めな部屋だ。服のまま横になる。なかなか眠れそうにない。だがなぜか安らかな気持ちだ。

今こそここで吉野の原稿を読むべきだった。小説であろうと告白であろうと三十年前の遺書であろうと沢木はすべてを受け入れることが出来そうだった。吉野の苦悩を全部俺が引き受けてやる。お前が苦しみながら生きてきたこと、その様を決して忘れはしない俺がいる。安心して現実の世界から姿を消してくれ。汚い安宿の暗い電球のもとでこそこれは読むにふさわしい。

吉野の原稿は三十枚ほどの短いものだった。原稿に彼の名前はない。タイトルは「小説」とだけ書かれている。沢木はその「小説」に衝撃を受けたが、それはすぐに消えてもの悲しさが残った。彼の苦悩を感じると、それは吉野へのいとおしさに変わって行った。おそらくこれは四十年も前のことだ。いやそれ以上だろう。すべてが真実ではないだろうが、吉野がこれを書かざるを得ない気持ちになって、また野本へ預けた気持ちは理解できた。原稿用紙は変色して読めない個所もあった。まだ三十歳前の吉野のペンは若々しくぎこちなかった。沢木は一度読み通してから、もう一度気になるところを繰り返して読んだ。最初は彼がデモで逮捕されたところから始まっていた。

「まさかお前が逮捕されるとは思ってみなかったろう。あの日デモの帰りに僕を取り押さえた私服警官がにやりと笑いながら言った。僕はその意味がわからなかった。まさに思ってもみないことだったので、それほどの緊迫感はなかった。しかしその言葉は拘置、保釈、裁判という時間の中で次第に重く僕の頭上にのしかかってくるようになった。一つには僕の数年間の活動に対して無視するという限りない侮蔑の言葉である。僕の行動の一つ一つを見透かしてマークして適当なころを見計らって逮捕する。理由はなんだってよい、おれたちは深刻ぶったお前たちに因縁をつけてくだらないゲームを楽しんでいるのさ。歳は同じくらいなのに、妙に老けた私服の狡猾な眼。思い出すたびに僕は怒りよりも激しい恥辱に耐えられなかった。そうだ、まさに僕は逮捕されると思ってもみなかった。凶器準備集合罪、傷害罪、公務執行妨害罪、あまりにも大げさな罪名だった。裁判が公正なものだったら何の時間もかけずに僕の無罪は証明されるはずだった。

逮捕される三か月前のK大学での集会が僕の罪の現場であるということだった。裁判が始まって証拠写真が出され、何かを投げている見知らぬ男が僕だということだった。それが事実であるかどうかは権力にとってはどうでもいいことだった。僕はその時いままで何に向かって闘争を続けてきたかということを改めて知った。ふとかすかな恐怖が背中を掠めるのを覚えた。絶望へ滑り落ちていく一歩なのか。権力は有無を言わさず対象を抹殺しようとする。無力なものに無意味な仕草を強要する。愚劣な巨大な力を持って僕を一片の小さな愚劣の塊にしようとする」

未決囚の日々の生活、仲間の励ましの面会を少しうるさく思い始めてきたこと、次第に闘争への彼の力が必要とされなくなり、保釈後は自然に身を引いて行ったこと、が書かれている。内ゲバ、R派からの攻撃を怖れて身を隠し精神的にも追い詰められた不安な日々も続けられている。裁判の日は出廷しなければならなかったが、それ以外では表に出ずに彼は炭鉱町のT病院で働いている。アルコール中毒患者や自立の出来ない無気力な人たちばかりだった。病院は病気を治すところではなく、隠し捨ててしまおうとする家族のためにあるようなものだった。退院するのはわずかで大半はすぐに戻ってきた。T病院はかつての親友Mの父の病院だった。その親友は大学二年の時退学処分を受けて行方不明になり自殺した。昔のことだ。

吉野の文章には子供の頃のことが語られている。彼の父親は炭鉱の会社の電気技師だった。人望が厚く会社からも労働者側からも信頼を得ていた。また技術力のためT病院の営繕を手伝うことも多かったので、院長とも個人的に親

交が深かった。その父が事故で死んだのは彼がまだ小学校の時だった。途方に暮れた家族を院長が引き取ってくれた。母が女中として離れの一間に住むことが出来た。利発な彼を院長は自分の子供の学友にしたかったのだ。彼らは兄弟のように育った。坊ちゃん、坊ちゃんと大切にされるMの前で、幼い吉野は自分の位置はちゃんとわきまえていた。Mはそれをごく自然として振る舞った。長髪の美少年のMと丸坊主の吉野だった。二人はじゃれあうようにいつも一緒だった。次第にMが指示を出し吉野がそれに従うようになっていったのは仕方がないことだった。

ある夏のことが淡々と書かれている。あまり暑いので二人は水風呂に入って遊んでいた。自分の性器を見せ合い、お互いに触ったりしていた。そのうちにMが面白いことをしようと、吉野を妹の部屋に誘った。広い家には誰もいない。部屋でMは引出しをあけて妹の下着や洋服を出して吉野に触らせた。彼は揉んだり引き延ばしたりしながら不思議な気持ちになった。Mはもっとやれと勧めながら吉野に体を押し付けた。がそれ以上進まなかった。いきなり吉野は射精したのだった。

中学高校になると成績に差が出た。吉野の成績は県内でも上位にいた。院長はそれも喜んだ。息子と一緒に医学部に合格してくれたら学費は任せてくれと言った。吉野は毎晩Mの部屋へ通って勉強し問題を解いた。吉野はMに教えるために結局二度その問題を解いた。Mの母は嬉しそうに夜食を運んできた。妹の由紀子が一緒に夜食をとることもあった。由紀子はお兄ちゃん、お兄ちゃん、とMを特に慕っていた。吉野にはよそよそしい態度でしか接しなかった。

Mは革靴で学校に通う背の高い長髪の似合う生徒だった。学校では吉野はいつもMに付いて回った。腰巾着と悪口を言われたが悪い気はしなかった。夜と昼とは支配権が逆だった。

「二人でそろって医学部に合格した祝いの席で、将来二人でこの病院をやってくれたらなと院長が言った時、僕は空々しさを覚えた。酒気を帯びた院長の赤ら顔に僕は憎しみに似たものを感じ始めた。将来ずっと彼らの従者として僕を囲って行こうというのだろうか。

入学と同時に僕たちはふと疎遠になった。僕は安い下宿に住み酒と麻雀を覚え怠惰の味を知った。彼は磨き上げた車で通学した。彼は昔ほど僕を必要とはしなかった。それでも時折り二人で過ごすこともあった。ある時彼が初めて女を経験したと言った時、僕は賞賛の言葉を送りながら、彼のセーターの下の肩のふっくらとした膨らみに激しく嫉妬した。

休みにも僕は郷里に帰らなかった。母は僕の入学を見ないまま亡くなっていた。僕はアルバイトで稼ぎながら収入

の大半を酒に変えてしまっていた。約束通りに院長は学費を出してくれたがそれ以上頼るべきではなかった。戻って来るたびにMは女の経験を語った。父の目を盗んで空いた病室の鉄製のベッドに看護婦を抑えつける話はいつも僕を興奮させた。ちょっと優しい声をかけるとすぐに夢中になってくるぜ。僕は見覚えのある看護婦の姿態をどれほど悲しい気持ちで思い浮かべたことだろう。時に僕はその看護婦が由紀子の顔をしている気がして嫌な気持ちになった。そんなことはありえないはずだった。僕は必死の気持ちでそれを追い払った。嫉妬だったのだろうか。ただ由紀子を犯し奪い取る想像がふと浮かぶと、それは僕を力づけてくれた。彼女を愛し始めていたのだろうか。

由紀子はたびたび出てきた。兄の部屋を掃除し食事を作った。仲がいいのを見せつけるように僕も呼ばれた。ある時など酒を飲み過ぎて部屋でそのまま眠ったことがあった。咽喉が渇いて目を覚ますと、Mを間中にして向こう側に由紀子も眠っていた。昔の悪戯が思い出されて僕は興奮した。そして布団の中の由紀子の肉体を想像して、兄妹として共通のものを持っているMを憎んだ。

僕の生活は苦しかった。Mに金を借りるしかなかった。前の借金の残ったまま、ある時次の借金を頼むと彼は露骨に嫌な表情をした。それから度々僕は返す意思もなく金をせびるようになった。彼は僕を避けるようになった。しかし僕は止めなかった。ある期末、僕は二つの科目を落とし、追試を受けることになった。Mは及第していた。僕がテストで彼に負けたのははじめてだった。いつものように金を借りに行った僕に、彼は誇らしげに要求よりも多く出した。それは僕らの友情の終わりだった。

Mの自殺の原因の大半を僕が占めているのは確実だった。誰もそれを知らない。誰も理解できないだろう。永遠に闇の中に閉じ込めておくのだ。しかしそれを思い出すたびに僕の胸は締め付けられる。胸が抉られるような恥ずかしさに責め苛まれる。その当時、僕も自殺しようと思うほど苦しみ、その恐怖にも捉われていた。しかしそれももう昔のことだ」

僕は今、運動から身を引いてT病院で働いている。何故あれほど激しい運動に没頭していたのか、自分に問うこともない。今はただ患者への深い思いやりについて書かれているだけだ。

「患者の中に、小学生や中学生が何人もいて僕はいつも痛ましい思いに胸をふさがれた。駆け落ちした母親に捨てられた少女は愛くるしい眼をいっぱいに広げていたが、決して泣こうとも口を開こうともしなかった。アル中の父を持つ少年は母親への虐待を見かねて、ある日突然自分の体が

輝きだして、不幸な家庭を救う救世主になったと宣言した。彼はいつも病室で毛布をマントのようにはおり神の言葉を喋った。また入院してから一言もしゃべらなかった少女は窓から飛び降りた。

一人一人の患者の顔を思い浮かべると僕はたまらないほどの懐かしさに捉われる。かれらに限りない愛情を持っているかと問われればそうだと答える。しかしそのために自分の全生涯と生命を掛けて身を犠牲にすることが出来るかという問いには答えられない」

大したことではないと最初は高をくくっていたが、裁判の結果がだんだんと気になってくる。有罪、刑の執行、医道審議会による医師免許剥奪、もしかしたらという経過を怖れるようになる。

「闘争に没頭していた頃、疲れて着の身着のままで眠りをむさぼった日々、あれほど軽薄に思われた医者という職業になぜこれほど固執するのか。不名誉を恐れるのか。医者以外に僕は何もできないのか。僕は反問し意気地なさを悔やみ苛立ちの日々を送った。僕はこっそり図書館へ行き医道審議会の処分の記録を調べた。惨めだった。静まり返った中でページを繰る。隅の方でささやく声がする。まさかお前が、まさかお前が逮捕されるとは。だれかが耳元でからかいだすようだ。

裁判が終わりさえすれば、無事終わりさえすれば、何度この言葉を繰り返し呪文のようにまた祈りのように繰り返し呟いたことだろう。有罪、頭上に打ち下ろされる鉄槌のようなその瞬間は、僕の全身をどのように打ちのめすのか。狂気に駆られたように僕は叫ぶか。下半身が崩壊していくようにその場に崩れ落ちるのか。打ちひしがれたまま二度と立ち上がれなくなるのか。

反面、僕は無意識のうちにその瞬間を期待していたようでもある。その瞬間はむしろめくるめくような快感となって襲って来て、一種の至福感として僕を包み込むのではないか。そのような想念が眠りの浅い明け方訪れて来るようになった。原色の形のない映像が不規則に動き始める。誰かの忍び笑いが聴こえてくる。誰かをこの手で苦しめたい」

僕は神経が相当にすり減ってきているのを感じる。

「患者を診察するとき、自分の行為ひとつで彼らを破滅させることが出来るとふと考え、不安になることがあった。社会生活へ復帰しようとする患者の努力の中に、さらに深い破滅へ身をなげうっていこうという無意識の傾向があることを僕は感じることがあった。彼らをそれ故に病人とよ

ぶのか。病人だから顕著にその意志が表現されるのか。彼らを僕自身の手で破滅させる。二度と立ち上がれない言葉を投げかける。そんな誘惑と知らないうちに戦っている自分を感じて僕は驚いた。その上その誘惑に打ち負かされれば、この上ない至福感に陥るのではないかと思うと、僕は恐怖に捉われて暗然とした。

僕は医者としての人格欠落者か。しかし本気でそのようなことを考えているのでないことは自分でわかっていた。人間をそれほど冒涜できるわけはない。他人を破滅させるという妄想の快感の中に、僕は自分の破滅への衝動を秘かに感じ取っていたのだ。己自身がいつか一瞬のうちに暗黒の淵に身を躍らせる衝動を待ち望み怖れてもいたのだ。深い苦悩は存在しないだろう。何も見ず何も聞かず何も語らず、ある時狂気に駆られて深淵を落ちていくのがいいのだ」

彼は数年そこで仕事をする。鬱積した怒りや不安を払しょくするため彼は修業僧のような生活を送る。専門書を読み、古今の詩を読み、音楽に日々を費やし禁欲を科す。

特別病室を部屋兼書斎にして病院食で過ごす。すべての患者の顔が頭の内外で渦を巻いて語りかける。渦に巻き込まれ倒されないように自分をしっかりと見つめなければならない。区別のつかない日々は驚くほど速く流れる。外出はほとんどしない。長い苦悩が書かれている。そしてある時、私服警官が訪ねてくる。

「襟の高い灰色のコートに身を包み鳥打帽を深々とかぶった男を見て僕ははっと身構えた。おまえが逮捕されるとは思ってもみなかっただろう。まさかお前が。その声でなんと多くの眠りを破られてきたことだろう。まさにあの時の男だった。僕は恐怖よりも背中を冷たいものでそっと撫でられたような虚脱感に捉われた」

そのなれなれしさに激しい嫌悪感を覚えるがどうしようもない。

「やあ先生、お久しぶりですな。ここにおられたのですか。真面目なお勤めご苦労様です。革命運動から身を引かれて、静かにお過ごしですか。もう何年になりますか。今日は特別の要件があるわけではないんで。先生が連中の資金源であることが確認できればいいんですよ。それと何か新しい動きがあれば、またその時は来ます。あ、R派はもう来ないでしょう。この前奴らと話をしたのですが、先生はもう忘れられています。大丈夫です。あ、K教授、先生の学生時代の教授ですよ、あの方にも久しぶりに会ってきました。大学紛争も一段落した、懐かしいとも言っておられました

よ。いや、懐かしいと言いながら、嫌な気持ち、屈辱を思い出したようだったかな。先生の学生時代の事もよくお話になりました。面白いお話でした。いや、先生ご心配なく、こんなことは誰にも言いません。先生と私だけの秘密です。先生の友人、誰でしたかな、あの自殺した友人の方。先生と特に親しかったとか。残念でしたね」

そもそもの大学紛争はパリのカルチェラタンで学生が学問の自由をと叫んで始まった。日本では医学部のインターン制度廃止反対に端を発したものだった。過去が蘇る。

「僕はインターンを終えたばかりだった。学生のリーダーの一人が教授面会の際、教授の肩を押しそれが暴行として報告され、その理由で処分を受けてから紛争は混迷し始めた。医学部長である精神病理学のK主任教授は護衛に守られて登校するようになった。毎日のように医局では討議が行われた。学生の意見をいかにも理解した様な助教授の愛想笑いはかえって反発を受けた。最初自分の長い下積みの思い出で学生を説得しようとした教授は次第に何も話そうしなくなり薄笑いを浮かべているだけになった。彼が口を開かない限り収束への糸口はなかった。

教授の絶対的な権力と官僚機構の中で学問の自由な発露はあり得ない。現在の大学でこれ以上学ぶものはない。青年医師連盟と無給医局員組合は全病棟の自主管理に踏み切った。僕は連盟の指示を受けて、医学部共通医局と自主講座の場所を確保するため数人の仲間と医学部図書館を占拠した。

教授への個人攻撃のビラが撒かれた。まず彼が助教授の頃おこなったロボトミー実験がとりあげられ彼の断罪を迫った。教授は病気といって自宅に引きこもったままだった。また助教授時代の論文が盗用論文だという問題も起こった。続いてその前年に下された友人のMの退学を強引に進めたのもその教授であることが問題になった。

大学は何度も機動隊を導入した。病棟の自主管理は二ヶ月で排除され、教授派の医局員で占められた。十数人で占拠していた図書館はいとも簡単に奪還された。僕は殴打され長い間寝ていた。紛争は収まりつつあった。医局員は次々に大学を出て行った。僕は肋骨のひびの痛みにうずくまる布団の中で、教授よりの手紙を受け取った。彼は僕が他人の過去をあばいて破滅させようとすると非難していた。君がこれ以上大学での運動を続けるならば、自分もまた発表しなければならないことがあるという趣旨だった。それはMの自殺の原因を指していた。教授の脅迫している原因は確かに僕にあった。しかし誰も知らないはずだった。彼はいつどこで知ったのか」

沢木は最後のページを一気に読んだ。全身は虚脱状態でありながら、動悸だけは激しく鳴っていた。もうこのページを再び開くことはないだろう。これは彼への同情か、いや違う。彼への限りないいとおしさだ。沢木はインクの消えていきそうな、そして風化して粉末になって飛び散りそうな原稿用紙の上に吉野の幻影を見て、それを抱きしめたくなった。この世の中で君を理解し受け止め抱きしめるのは俺だけだ。これがフィクションなのか現実の話なのかそれとも告白なのかわからない。どうであろうと、とにかく読むのは俺一人だ、他には決して出さない、と沢木は固く決心した。

「めくるめくような夏の一瞬の記憶がよみがえる。白熱した太陽の光線に満ちたあたりの情景を僕はまったく覚えていない。しかし現実の僕は数日前から夏風邪をひいて寝込んでいた。冷静だとも思っていた。寒くてどうしようもないのに全身からは絶えず汗が噴き出ていた。数日前の解剖の学生実習が浮かんでくる。検体は干からびた老女のようだった。かつて愛されて歓び、裏切られて悲しんだ肉体の残滓だった。快感が貫いたことも、苦痛に曲がり歪んだこともあったのだ。

朝めざめた時に僕はふとそうすることを思いついたのだった。朝の三十分しか陽の射さない部屋だったがその日は久しぶりに朝陽を顔に浴びて目を覚ました。気分はよかった。急に何とも言えない幸福感が全身に満ちてきた。灼熱の太陽の下の輝く海が脳裏にひらめいた。午後は泳ぎに出かけよう。Mを誘って行こう。僕は立ち上がった。急に眼がくらんだのを覚えている。あとはまったく消えてしまった。

どこかの薄暗い部屋でタイプライターを打っている自分の姿を僕は見ている。ローマ字で密告書を作っている。まぎれもなく僕自身だ。しかし夢の映像のようだ。なぜ僕なのか。僕はそれを廊下に貼るかK教授の部屋に投げ込むか郵送するか考える。それがすんだら海水浴だ。どこまで泳いで行っても海底の砂地が見える海。太陽の匂いに満ちた愛撫するような風が吹く。

それは夏休みを間近に控えた解剖学の実習の時だった。学生たちも解剖には慣れてきつつあった。男女の死体が解剖台の上で少しずつ剥されていく。助手が席を外した時だった。Mが素早く男の一部を切り取って、女の下半身に差し込もうとする。卑猥な忍び笑いが起こるが、ふとそれは途絶える。敬虔なものを冒した畏れと後悔で誰もが口をつむぐ。気の弱い助手が真っ青な顔でいつの間にか僕らの後ろに立っている。叱ることも出来ず彼は呆然としているが、ふと気づいたように部屋を出ていく。教授に告げに行ったのだろうか。僕らはそしらぬ顔でその場を離れる。

Mの行為を見ていたものは僕を含めて五人だった。教授はひどく怒りクラス全員を教室に閉じ込めて説教した。このような行為をする者は医者としての人格を持っていない。教授会に報告され行為者の処分について討議された。しかし行為者が誰であるか、分からなかった。決して口を割る者はいなかった。Mは普段と変わらずに振る舞っていた。僕ら五人は彼の不安と反省を感じることはできた。夏休みがはじまり、それが終わるころには誰もが忘れてしまうさ、僕らはそう思い込もうとしていた」

ある日沢木は吉野の診察室に入った。この三十五年で五、六回しか入ったことはない。あとは吉野に挨拶をするときに覗いたくらいの診察室だった。神聖な仕事場をかかわりのない自分が馴れ馴れしく出入りするのはどうかと沢木は遠慮していた。吉野もそれを理解していた。

由紀子に相談を受けてからも、すぐには入る気にはなれなかった。なにか衝撃的な根拠が見つかるのではないかとの怖さがあった。だがいつまでもそのままでは済まされない。

エアコンを点けたがそれは冷房のままだった。足元と頭上から冷気が襲ってきたが、暖房に切り替えなかった。埃の流れがひんやり首筋を撫でた。いつ始めたのかたばこが匂う。

八畳にも満たない部屋で窓は摺りガラスで白く外は見えない。溜まった埃のためかもしれない。隙間風が木の窓枠から流れ込んでくる。患者と医者が真向かいに座って話をする小さなテーブルが入り口近くにあり、椅子は患者用の方が革張りで立派である。乱雑に散らばっている書類やまとまりなく詰め込まれた本棚の本。壁には患者たちの作品の絵や書道が掛けてある。その隅にテーブルトップのパソコンと小さなステレオセットと沢山のCDがある。特に記憶とは変わってはいない。パソコンは当然パスワードで保護されて覗くことはできない。ここ数年は夜遅くまでこの部屋で過ごしていたと事務員から聞いたことがある。うす暗い蛍光灯をつける。

哀しみか苦しみかどんな感情の流れが彼の心に渦巻いていたのか。どんな切ない力でそれらを抑えつけようとしていたのか。あるいはもう諦めてその激流に身をゆだねていたのだろうか。彼は逃げたのだろうか、それともさらなる流れに飛び込んでいったのか。沢木はまったく今までそれらを感じなかったことを恥じたが、また何の相談もしてくれなかった吉野を恨めしく思った。誰かほかに相談するものがいたとは思えない。今彼を抱きしめてやりたい。愚かな意味のない雑事に次々に纏わりつかれながら、それに苦しめられながら力つきてただ遁走していったのか。やるせなさが沢木の思考を止めた。そこにどれくらいの時間いたか覚えてはいない。

沢木も自分の三十五年間を考えてみる。世の中は様々に変わった。日本経済の成長がありバブル景気があり崩壊があり、一晩でどん底に落ちる人がいた。日常に残酷な事件があり自然災害が起こり、原子力発電所が崩壊した。苦しみと悲しみを抱えて生きねばならない人々が増えた。外国では戦争がありテロがあり、泣きわめく人々の映像に触れない日はなかった。沢木はその都度同情し心を痛めた。しかし自分では何もしなかった。何もできなかった。そして忘れた。自分に残ったものは本当に何もない。吉野のような煩悶もない。その間、自分が熱中していたのは秘かに自室で浸るヴィヨンの詩だけだ。美しく哀しいバラードを暗唱する。暴力と放浪に憧れる。闇の中の感動を想像する。本気でそれらを追っかけるのではなく、ただ夢見るだけだった。

また大学の授業はたいして重荷にはならなかったが、面白くはなかった。それを何という長い間続けてきたのだろう。勉強もせず物覚えも悪い女学生へ一時間も喋ると、学生が見えなくなる。空虚な空間へ言葉ではない俺の音だけが漂って消えて行く。それだけの三十五年だった。同僚の教師とは誰と何回喋ったか記憶にもない。

明日の十時に理事長に呼ばれている。用件は分かっている。年が明ければ自分は七十歳になる。

沢木はもう吉野は帰ってこないと確信していた。由紀子がいろんな事情を知っていることは間違いない。二人の間には誰も知ることのできないことがあったのだ。愛か憎しみか、あるいはそれでも離れることのできない無関心か。冷たい気流を間にしても引き付けつけあったものが。それらが氷解したのか、それとも吉野だけが一散に闇の彼方へ遁走していったのか。なぜか。しかし由紀子がそれを語ることはないだろう。感情を押し殺して沈黙を守る悲痛な表情が浮かぶ。

沢木はかつて吉野の姿がそこにあった椅子に座ってみた。長い日々の中で、彼は心の奥に重い鉛の棘を抱えてそれに耐えてきたのだ。今彼が憐れでいとおしい。そしてそれに従ってついてきた由紀子の苦しみがさらに沢木の胸を打つ。

ステレオ装置のスイッチを入れてみる。沢木は当然そこにあるCDを見つけ、ためらわずにかける。「トッカータとフーガ」だ。出だしの音が突然冷気をつらぬいて鳴り響いた時、沢木はそのあまりの鋭さにあわててスイッチを切った。切り裂かれた冷気の間からいきなり漆黒が出現した。灼光のようでもあったが一瞬に消えた。動悸が高鳴った。懐かしさはなかった。そしてまた気分が沈んだ。

その時沢木は自分がなぜそう思ったのかわからなかった。由紀子を抱きたい、かつての美しい由紀子ではなく、今の

朽木のようなやつれた由紀子を。彼女は決して逆らわないだろう。うなじにかかる乱れた髪、萎れていく乳房、もう鍵盤の上で踊ることのない木の枝のような指。そして形の崩れつつある腰。それらを力尽きるまで愛撫したい。かつての美しさを秘めた醜い由紀子がさらにいとおしい。長い間由紀子に求めて来たのはそれだったのだろうか。彼女の歪んだ顔は苦痛のためか、悲しみのためか、快感なのか。

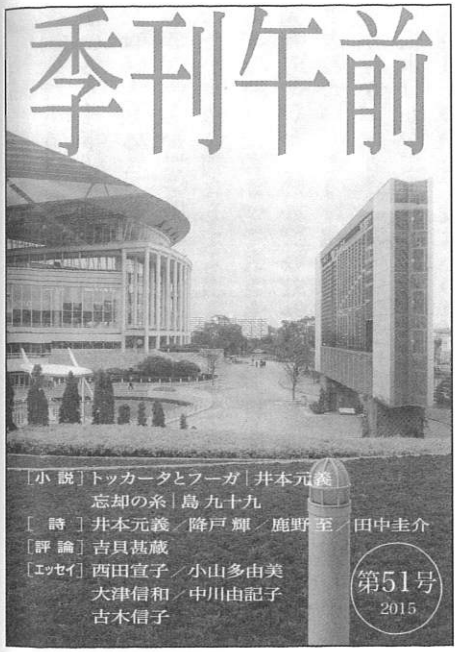
玄関の戸が開く音がする。由紀子が来たのだ、沢木は身構えるが、それが幻聴だとすぐに気付く。彼女が来るはずはない。しかし彼はじっと待っている。

（「季刊午前」51号より転載）

井本元義

いもと　もとよし

1943年生まれ
九州大学理学部卒
詩集「花のストイック」
「レ・モ・ノワール」
小説「ロッシュ村幻影」
新潮新人賞　佳作
福岡市文学賞
文芸思潮　現代詩賞奨励賞



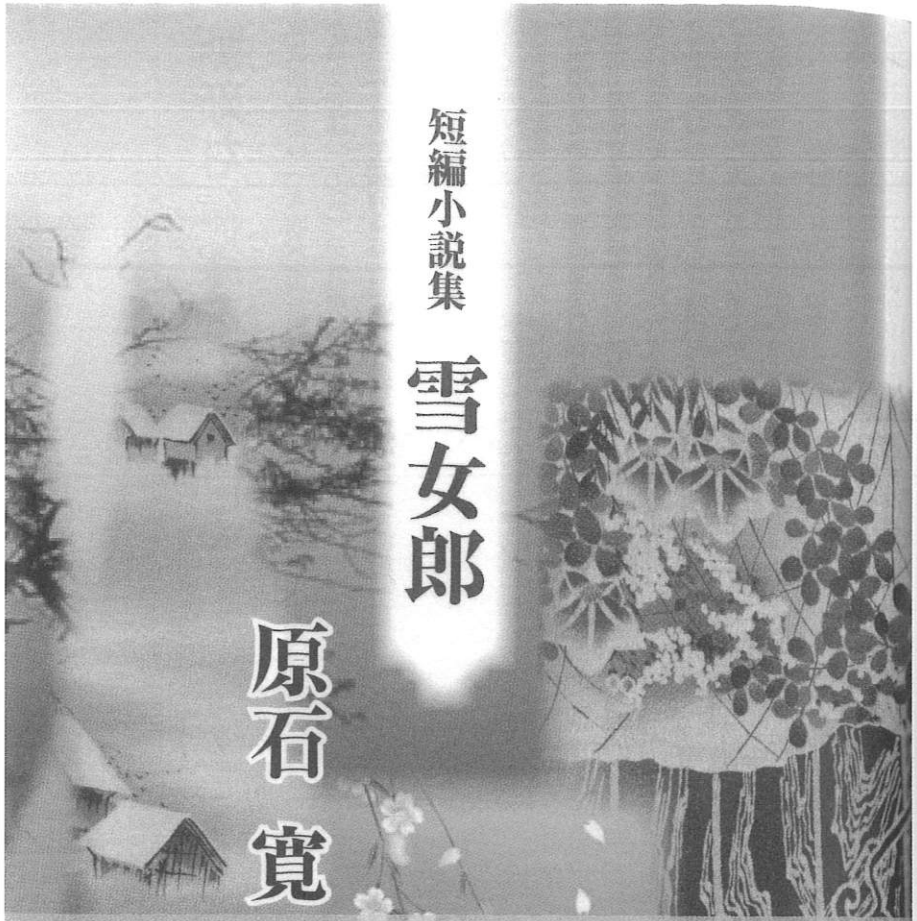
小説の書き方
——作家を志す人のために——
改訂版
近日発売
五十嵐勉
一一〇〇円

御注文はアジア文化社まで

新刊案内

この書は我が人生の誇れる証であり、
そして遺書である。

原石寛　渾身の短編小説集　堂々完成！　世に残る作品集



原石寛氏の作品を読むとその後に立ち上がってくるのは、華やかさの流れの底に沈んでいった美しいものの宿命である。美しさの陰に潜む残酷さである。無数に散り、踏みしだかれて埋められていったものの姿が、三味線の音曲に乗って乱舞する。氏の文学は、生身の女性の美しさとそれを追い、滅んでいく者への鎮魂であり、憎しみと呪詛をも含んだ人間の美の影への鎮めであろう。

——五十嵐勉

アジア文化社

※同封の葉書にて御注文下さい　　アジア文化社　1728円（税込）

季刊午前

福岡県

斬新な編集を心がける

戦後間もない一九四六年、福岡の地で商業文芸誌「午前」が眞鍋呉夫と北川晃二によって創刊された。その後第2次、第3次の同人誌「午前」を経て、一九九一年に北川が再出発させた同人誌が「季刊午前」だ。

同人は現在（二〇一五年五月末）二三人で、この中から編集委員の中川由記子、西田宣子、廣橋英子、安河内律子、吉貝甚蔵、脇川郁也の六人が企画立案や掲載の可否など合議制をとっている。他に特別同人に岸本みか、原口真智子、宮本一宏の三人がいる。

季刊を謳ってはいるが、掲載作品の質を保持するため発行の歩みは遅く、最新号は第51号（二〇一五年三月）だ。

左から編集委員の安河内律子と西田宣子。右端は井本元義

斬新な編集をつねに心がけており、同人誌でなければできない、工夫を凝らした企画特集を組んでいる。

企画作品を創作する中で「ある縛り」を作ることは、作家にとって新鮮であり、時にこれまで感じたことのない新たな世界を見せてくれるものだ。複数の同人が参加することから、「競作」という意識が芽生えることは当然で、刺激的・魅力的な取り組みである。まさしく同人誌ならではの取り組みといえるだろう。

最近の企画特集の内容を簡単に紹介したい。

●企画作品「言葉へ・跳写真」（第44号／11年）

第44号では「言葉へ・跳写真」と題して、同誌の表紙写真を提供している福岡の写真家・古城由香里の写真から一、二枚を選び、その写真から発想連想して小説や詩を作り出した。

条件は原稿用紙三〇枚以内という枚数制限のみだった。九人の作家が参加し、およそ八〇ページを埋めている。

●創刊50号特別記念企画（第50号／15年）

節目の第50号では、「短歌から創

る」と銘打ち、一首の三十一文字から［創造の冒険に］と謳った。八人の同人が取り上げた歌人は源実朝、樋口一葉、佐藤佐太郎、塚本邦雄、寺山修司、角居典子、江口志計子、大森静佳と幅広く、それぞれの一首からイメージを膨らませて短編小説を創る試みである。一作品五〇枚以内という条件で、一〇〇ページを費やしての特集となった。

また同人全員が参加してジャンルを問わず原稿用紙五枚を発表する記念企画「2000字特集」を組んだ。これは発行の節目となる十号ごとに企画している。

「季刊午前」同人会では、創刊以来、毎月第三日曜日に欠かさず例会を開催し、発行号の同人合評会のほか、芥川賞受賞作品などをテキストとする勉強会などを実施している。同人加入希望者の見学も受け付けている。

（季刊午前同人会事務局・脇川郁也）

季刊午前
〒812・0015
福岡市博多区山王二丁目一〇・一四　脇川方
☎092・452・0510

「季刊午前」同人